

鳴ぬと同意ふして共によらぬ筋ならずやといへるは大段と忘れたる也花に向ひてい
てあられぬといへると郭公に向ひていふてあられぬといへるとの情と押して自得すへし花
の久しくあられぬは樂しき土のよくほり也郭公の鳴へき夜に鳴ぬは一むきのうらみならず
や又咲すやはあられぬ思はそとやはいひはてぬなとは語調異なれば同じやはあられ打まの
せて此證明とはなしのたき事など外あひへり

○餘材云うるふ月のくはよりて春の久しき年さへなとあられはせぬあられよととしふ
る也云々やはそるも無下にわろしとはいふへらねとやはせぬといへるは更に上手也
といへるは非也あられよととしふるにはあられ事委く本註あひへり又せぬといへると
上手也とはめたるは余りふまてもなき事也上手下手にあつる事は
てあふへきあまのせん事いふまてもなき事也上手下手にあつる事は

○遠鏡云セメテ春ノ一月加ハツテ長イ今年ハカリナリ人ノ心ニタンノウスルホトエ
ルリト咲テアツタカヨイニナセニイツモト同シヤウニ今年モ早ウチルツイといへるは
非也あられやはせぬのあれとたんのうする程と、さやはせぬと引はなちて末なる早

ふ散ろいのそいの詞にて聞せたるは語勢句調共お失へれば彼するせぬのこまき論など
にはあけ難しもあきあくの語は充實ふ過て反て空虚になれる心より出たる名義にて
譬へは器に盛水の盈滿て溢れくつるへりてあきあらに成たるの如しされはあきあくは
十分と過たる意はへにて俚言にもふいやといふ也集中おも人とあきあくは移るてふ也世
中のうけくにあきぬ其外身と秋風人の心のあきあくと皆厭ひ嫌ふ意也されどあられぬあ
らるあくまであくはありなとやう僅にはたらく辭とるふる時は忽ち満足の事ふ成て厭
ふ意にはならざる也斯十分の處にとまりて過るまでの心なきは其助辭につきて一轉
するものにて俗にいやあなつたどたんのうするとのふたつあわられて忽ちうらうへの
違ひ出くるもこれまた言語の常也只あきあられあくあけるあといとへにいふ時はもど
よりもどの厭ふ心にて満足の方にはならざる也されはあられやはせぬけあられとされ
て厭ふ方なればいとはれやはせぬにて俗になせあいやあられはせぬ事うといふ也さる
と今あられあくまでなとはたらく十分の方に思ひてたむのうするほど云々とみちたら
へる意ふとけるは謬也近きころ或やむ事なき、はの御歌お花なりなうらうつりやはせ

ぬと申そ末句侍りしと或人聞てこは華美ならあたくしうらぬとほめたる方の御な
らんふうつれよのしといふ方にさこゆるはいらと難したるも此歌のあられやせぬ
とあられよのしと一むきに意得とるうらの謬也これも花ならんには世にもうつりやす
るへさといつてのくはみさとしくうつりやはせぬさはありのたきわさのなといへる
にてうつれよのしといふには非す今の意得にもやと申出侍る也

さくらの花のさのりふ久しくとはさりける人のきたりける時によみける

よみ人しらす

あたふりと名にころたてれ櫻花とにまれなる人もまもけり

詞書より歌の趣と見るふしはく通ひ住ける男のさる方のくせち有て去年の末よりの春
のはしめよりの心ならそとたえたると花の頃お思ひ起してふととふらへる成へしふりは
へて花見のみ來たるには非と花の盛にしも打合せたるといふ書さま也次に櫻の花の咲
ると見にまうて云々なとあるとはのはれり歌の意櫻はあた也と名にこそ立らるれ年ふた
まざるならてはのくとひこぬ希人も待てとれりといふされはうしかも待付たりとあ

たあらぬ探心とはこれる也この待けりと待えけりといふ意也といへるなとはあらぬ事也
こは年に希なる人もとまれに來たる方よりいひかふるせると承るの故にれのつら待付た
る方お聞ゆるのみ譬へは同じいひさまにても希なる人と今日も待けりなといへは語のま
ゝに只待とる事のみに聞ゆるともて識得すへし初二句はのねてあたなる方さまにいひし
るひて此日ころうとくしう物せしにあたりてさらぬ心と花によせて打出たる也さらば
あた也と君はいへともなといひて名にこそたてれおと打まらせてはいふましく聞ゆれと
こは本跡と櫻にあしてよみたれば櫻の上にもうせて理りと合せたるもの也さて年ふ希あ
るといひて却て人こそはとあてはみたる心みめり

返し

業平朝臣

今日來すのあすの雪とそ降なまときえすの有る花とみまよ

たましく盛に打あひて折よく來たればこそあれもしけふこすして明日ともならばとく雪
とろふり果なましさらはたどひ消すおは有ともありと見ましや本の花にしあらねはとい
ふみな花の上にていへりさて下の意はたましくさる方に移り果ぬ程に問來たればこそこの

くも見つれ今のまかくれたらは決めてよろ人の物と成てんさらん時はさておはすとも本の吾物也と見るへけんやと却て巳の來たるとはこり猶あたる方にいひつされる也消すは消すにの也にはとははありいふは古の常なり門人熊谷直好云贈答の歌の詞書に其名といはす人とのみ書るは皆其よみ人しられざるもの也されは此歌も前後の歌とひとしくよみ人しらすありけんを恐らくは後人物語によりて業平の名とくはへたるなるへしさらでは此調さくらの花の盛に業平朝臣の云々とあては余の例にたのへりといへり

○餘材に此作者女には有へるらす其故は年頃音信ぬ女の許へはさくらと見にのみは行ましきことわり也といへるは非也年に希あるとあると年ころとこゝろえたるはいのゝ年ころは年とふる事にて數年と隔つるといふ年にまれなるは年内にまれくくる人也しのたまくとふらへるの花の盛にあへる事上にいへるの如し譬ひまとは下の意に花と執したりともろは詞書の表にあらず伊勢物語も此歌の所に櫻の盛に見にきたりければと書るは例の意と得ざるもの也年に希なると年久しき事と意得て年頃れとつれさりけると書るはいよくいふにたらず餘材も物語にはあられて誤てるもの也此物語は多

く此集と取ひのめて作なしたるものにて大方はすちあぐたのむましき事は本書につきて辯しおけり遠鏡ふとも是に隨ひて男とちの贈答とせるは四季の中に戀の歌は有ましく思へるより也此贈答女とみすして事情のなふへけんや實は戀也といへとも表にさるへきとわりあれば其上につきて或は四季或は雜にもいれる事也凡男女歌よみのはとはあり親しき中らひは下に艶情こもるも又おのつら多く有へきもの歎ざるは其下の意は捨てうはへととりて物せる也今の歌は即櫻によりて落花のつらにかけり其下の意に付て見れば四季雜の中にも戀の歌少らそ見わたして知へし表裡全き戀想歌にて花にも月も打まのせてよせ難きと戀の部には集めたる也されは又却て戀の題しらす讀人しらすの中には親と慕ひ子と思ひ友と戀るなども必有へし其事實しられぬ限りはうはへの戀おつきてみな戀の部に置へき物也必戀の部あらては戀想歌おはあらそとわたくあふ思ひ泥むへらそ

題しらす

よみ人しらす

ちりぬれいこふれと一るとなき物とげふ社櫻をらひをりてめ

これは今も散みんと見えて明日までははつるあき花に向ひてよめる也されは此よりは折
 てめは折らんとならは折てんなどいふとは違ひて折へきとつよくいはむ爲に重ねたるな
 れはいさ折んといふにてけふこそ櫻とれ〜といふはあり中々ためらはそ折とるへき語
 勢也これは本の句の一むきなると四の句のせまれるにてしの聞ゆる也俗に死なは死れいは
 いへなといふふ似たりこれも死なんとつよくゆるしいはん事と事ともせぬにてしね
 く〜へ〜といふに同じ死なはいは〜はためらふ詞あらそれのへりて下の勢ひと出
 らはせまれるてにはの自然也死なんとあらはしふなんいは〜いひもせぬなとゆるく理り
 とよくめたる調とはうらうへのたのひ出くめり同じことも今日も櫻はとらは折てんけふ
 こそ櫻ゆきてたどらめなどやうにあらんはた〜詞のま〜お聞ゆへし又しあらんには本の
 句の語勢も忽ちうくては叶ふへのらぬ事也やうて六帖に躬恒の歌櫻はな夜のま散なん後
 やいのふけふころ行てとらは折てめとあるは同じ結句にて趣もあらねどこれは理りのま
 らに折みらは折てんを云にて語勢ゆるやの也詞の上ののみつきて一つに思ふへのらす開
 の緩急によりて懸隔のたのひ出くる也

どのやらのをいけにんあるか櫻花いさやとかりてちるまてはみむ

きのありとも

櫻色に衣いふかくるめてきん花のちりなんのちのかたみに

さくらの花のさけりけると見にまうてきたりける人ふよみてれくりける

み つ ね

わかやどの花みかてらよくるひとちりなんのちそこひしかる〜

詞と見るに常はこぬ人の只花のゆのりにとふらひたる也されは實は又はふりはへて來ま
 しき人あればさる方の淺々しさをのすりきこえてわさと戀しゆるへきなとのまへていへ
 る也實になつらしむにあらすされはのく後によみてつのはしあから戀しゆるへきとてい
 たしくればめくもの也

亭子院歌合の時よめる

伊 勢

見る人なき山里のさくら花ほかのちりなん後うさかま〜

なくれたらんは世にふりて珍し〜ちねとさりとてのくも見る人なきはのひなければ山里

の櫻は外の散たらん後ふ咲へき事也さるは世の花と見果たる人のなほ尋こんとたのみて
とせめて佗ても進まぬ方とねらへる也後そさのましは後に咲ふんなどよめる勢ひある調
にあらそ止と得ざるの意と知へし後撰ふ紀氏の風とたふ待てる花の散あまし心つゝらに
うつろふうさどよみ給へるもたふちられは花の心より移ふの見えていとうければ風と
まちてたにちれよとあり風あちるもうけれどせんうたあさにさる方とたに希へる也道濟
の櫻花見るにも悲し中々にとしの春はさるすそ有ましとよまれたるも花のさるぬは好ま
ぬ事なれと中々悲しおらんよりはといふにて皆打まのせたる願ひおはいたくたのひてそ
とおきてましと承たる弱き語調と味ふへしなほ俚言おまのせていは、外のちつた後に咲
たのましちや引たる二首も風と待て成とちればよいふけつくさるぬるよのらうさといふ
はのりの事也

古今和歌集正義卷第二

春歌下

題しらす

讀人しらす

春かぞみたる引やまのさくら花うつろふんやいろかひりゆく

いと長閑ある日影お打のすみたらん山の櫻の今はちらんとてやうす紅お色變りゆくと也
只今も風ふのは残りなく散果らんと見ゆるけしきといふうつろは空虚の意おて物の心
あしくなれる跡とさしていふの語の本ならそれより其物の去ゆく先とつけてのみいひ
なれたりされは古へ花のうへなどにうつろといふは皆ちる事おて神代紀に如木華之俄遷
轉當衰去矣とあるおとこのはなのうつろひやすきとよませたるもちりやすき也うつして
は色の變するともうつろといふこれも、との色の去ゆくよりの名也としるへし顯注おう
つろふといふ事打まのせては色變とる也うつろふ菊と云も白菊の紫になる也この歌にて
は散といふへきのと云れたるは本末たのへると諸注大やうこの心おおもへるはおぼつ
なし密砌に花のうつろふ事は散には非す盛なる時にあはりて散ぬへき色のつくこと云也と

ありては歌のうつろはんとやも色のはる事にとり給へるはいふにたらしむるとききて聞か
へけんや

まてといふにちちて一とまる物ならいなにを櫻に思ひまてまて

まてといふふいつれの花のはとまらんあれと櫻は余りお速くちる方お付てのくもわり
なくいへりさばはりはやくもちらさらはいのなる物の櫻の上に思ふへきと一つの疵と惜
めるの意也

○打聞おちちてまてと云也遠鏡おシハランチラスニ待テツレト云ノヲ聞入レテといへ
る共に非也こは只ちるとまてと云也ちちすおまてといふにあらすちるとまてとちちて
まてとと一つの思へるは疎うの也ちちすおまてはちちとに居てまつおて外にまつ事あ
る也人おてこれといへは行とまてといふなり行すにまてといへは此方よりゆつて来る
とまてとやうの所おいふ語とされるの如しまてといふおちちてしとまる云々といふ
おはるなはさると聞しるへし

のこりなくちちとめてたまてくら花ありて世中へのうけきん

ちちるはあゝぬ事なれとしの散おつきてそれもまたさる方およしと扶けたる意とくうけ
とゑてよみたるは前の歌の疵と求めたる反也世中おありくして大方は末のよらぬとい
ふ古語お命長きは恥多しといひ或は四十にたちて死ん事とめやすきものにいへるなと皆
第三義といふおて花の散とめてたしといへるお全く同じ命長くてころ何の上のいさとの
程も見ゆへけれされとさて恥おらんは難おあるわさおれば中々成おつて見苦しおらん
よりはと次なる方と願ふか世のいひなれ草と成たると今も打まのせたる物にしてのくは
いへり

此ととにたひぬしぬくくら花ちりのまかひに家路忘れて

櫻の花の散みたるおおもしろさお家お歸るも忘れてこよひはこの里に旅ねやせんすらむ
といふ也散のまらひはちりおちる事おて散の盛といふ今は語のものとまらふといふ縁に
物のまされおは物まといひする方とも思はせてよみなせるものもとの意は只ちるとめて
お歸ると忘るゝ也さると來むといふなる道まかふ前に花のまされに立とまるへくなと
ひたすら同じとに意得て花のちるにまらひて道の見えぬ心おとれるはいはゆる光ととめ

て玉とするの謬也萬葉卷十五不安之比奇能山下比可流毛美知乘能知里能摩河北波計布仁
 聞安留香母なとあるも散の盛は今日ふころあれと其日しも竹敷の浦小泊りあはせたるよ
 よめるふて物にまざるゝ意にはあらそ同卷二小大舟之渡乃山之黄葉乃散之亂爾妹袖清爾
 毛不見云々とある亂の字もまのひと點せり實にしるよむへし是もたゝ散て亂るゝ小妹の
 袖もまされさへきりて見えぬといへる也散之亂にといふ所もまざるゝ意はいまたなしさ
 れとも本まする意より出たる語めればまざるゝ方ふいへるも少ならず即ち今の歌其まき
 るゝ方の詞よりて忘却せる意よめる也

○遠鏡にヨヨヒハ此里テトマラウ事チヤ云々内へイヌル事チハ思ヒタサヌコサといへ
 る非也こは終には歸らん事も忘れて此里ふやとるへきはやと今日しも散の盛小打合
 せたる面白さに然あらんあらしといへる也思ヒタサヌニトマラウ事チヤなどのまへ
 て希ふ心はあらず内へイヌル事チハ忘テ此里テトマルテアラウなと解へし

うつせみの世にも似たるか花さくらさくと見しまにかつ散にけり

はなさくらはいのなき人の世も似たる哉さけりと見るまにうつ散ぬといふのつらさの

つらさの意ふて咲も散も時の間あると人間有爲の世の程なきにのけて歎したる也こゝら
 のつは俗にもう散たといふもうの言ふあたれりうつせみは世の枕詞花櫻は櫻の内の一
 種にて其色赤ければ花染の意なるへしうす花櫻などもよみて一きはうつるひやまきもの
 ふいへりうつは其本物の僅ふあらはれたるの稱にて活らく語なればわつといふゝのなと
 やうのすわりたる詞に非そ草木の地ふ芽し月日の山より匂へる如きとつ萌のつ出なと
 いふ也それよりくさく轉り用ひ或はのたのちなど活らく委き事は外ふ辨せり此歌あと
 にてはささちるの間にければうつささのつらさの意とある也

○遠鏡に咲イヌト思フマウチニハヤカク一方カラ散テシマウマウイといへるは非也
 うつは咲と散と對へていふふあらねは片一方のらなとたへとのけていふ意はなしの
 つらさのつらりと兩段ふされて拘はらぬてにとは也と知へし同し事も咲ぬればうつ散
 るむるなとあらんにころは然もとのめ一つふ混とへらすうつ喜びのつ憐ふのつ引か
 つ戦ひ或は且戦且學仙などの語勢間に髪と容とといへともなは其義兩段なれば片一方
 の意はなしこは程なき事と前後ふいひ短き物と左右にふくより自然相交はる勢ひある

に似たる事出くるはさゝのなし也末の義に付て本のすへてと説むとする時は違ひのみ
出こんわざ也

僧正遍昭よよみてたくりける

これたらのみこ

櫻花ちらひちらなんちらととてふるさと人の來ても見ふくに

雲林院にてさくらの花のちりけると見てよめる そらく法師

櫻ちるばなのどころは春さかす雪そふりつゝきえかてにする

雲林院は淳和帝の離宮ふして仁明帝處分し給ひ後ふ常康親王傳領してこれに在しまし出家の後遍昭に付囑して元慶寺の別院と爲給へりといふされは其結構とは思ひやるへし殊に櫻の名高きは紫野ののさき舟岡とつけて數千株の花林なるへし櫻ちりみたるへ雲林院の其花の所と來て見れば空は長閑き春ならなは雪の降しきりて消れてにさへすといへり承和の行幸ふ閑覽池塘錫宴群臣などあると思ふふさる池の中島より汀の堤とつけわたして残りなく花ふ埋れたらん實に冬の最中のこゝちすへし

○打聞に花の所は花の散所と云と上下して云り遠鏡も是に従ひて初二句は櫻花のちる

所はといふ事あるとさはいひ難き故に花と散とと上下にいへりといへる共に非也こは散とは大よりに置て花の所はと受すゑていへるに今さへ其廣らなる院内の花景かのつちら見ぬめるこゝちするもの也いひのたきによりて下上にせしあらんやは然いはんど思は、櫻花ちる所にはともちれる所はともあはいのやうにもいふへしさては只一二株の木陰のけしきにも聞なされて雲林院のさまふあらし或異本にとあらは咲すやはあらぬ云々の次に同じ紀氏の歌に雲林院にまのりて櫻のちりけるとよめる雪と見てぬれもやすると櫻はあ散ふ袂とのつさつる哉とあり此うたのうへにてもいと廣き境内の落花のさま思ひやるへし又遠鏡に春ノ雪ハ其マ、消ルモノチヤニコレハ正ノ雪チナイ櫻ハナチヤニコツテといへるも非也しる春雪の消やすきに對へて消れてといへるにあらず只積るのさまに下消もあき花の雪のけしきといひるへたるにて消れてにさへすといひて雪と見なその寒景とつよめたるのみされは今は雪を降つゝといへるの主意なれば此春あゝらは春は雪のふらぬ物にしていへるにて長閑き春あゝら雪を降つゝと應ずる語調也消やすき春あゝら消れてにすと聞へきならんや吟して知へし

櫻の花のちり侍けると見てよみける

素性法師

花ちりす風のやどりいたれかゝる我れをこよゆきてうらみん

風はいま目前にふけと形ちなければうらみんによしなしやどりとまらん所ふはしのと
物あらん事に思ひなざるまよとさなくよめる也

うらん院にて櫻の花とよめる

由性
ろろく法師

いと櫻とれもちりふんひととかりありふ人にくさめ見へなん

諸注素性集六帖等により又部立の名の交はれるに付て此歌承均ふはあらし素性ならんと
いへる尤不審とへき事也さて按する小三代實録云元慶八年九月十日丁卯權僧正法印大和
尙位遍昭奏言雲林院者故無品常康親王之舊居也親王出家爲沙門貞觀十一年二月十六日
以此院付囑遍昭曰深草天皇賜此居之天皇登遐常康落髮具天罔極德猶難報恩欲永爲精
舍令學天台之教伏思元慶寺永置年分度僧三人傳天台之法行試度之道請以爲元慶寺別院
成親王之心願矣但院中雜事擇遍昭門徒之堪幹事者令其勾當勅依請聽之また紀略云寛平
八丙辰閏正月六日行幸北野雲林院有子日宴遊略雲林院之院主由性法師任權律師とあり

されは此由性法師さきの元慶八年奏言勅許の時雲林院の勾當となりうれより十三年の後
行幸の時に初て權律師に任せられたる也又寛平二庚戌正月十九日僧正遍昭寂年七十四略
素性亦善倭歌頗有父風住良因院由性任僧都爲雲林院別當とわれは僧都まで轉任して雲林
院に住持せられし也是ふよりて是と見れば此歌はそなはち院主由性にして其勾當と辭せ
んと思はれたる程の述懐なるへし其名の似たるより素性とも誤てる也やうて彼奏言の翌
年仁明帝の御世と成て遍昭の寵遇殊に盛んにして法威火のとしさる時の別當にわたれる
人實に一世の榮なるへし況や遍昭の親昵なるに付ても誹議妬心の徒多あるへく思はぬ事
出きてたしなめられんかそりあらんや歌の心いさ櫻ちらは共に我もちり行ふんしの一
盛あらんにはきはめて人にうさめとこそ見えんすらめといふさる辱のしめと世人に見ら
れんよりはとく退くにしのしと盈は虧なん戒懼の心とよめるものうら花の上ふて一盛
といひちるによせて人にうさめといへるわざとならすやさしくもめてたき也由性も父兄
ふれくれぬ歌よみありけん寛平法皇嵯峨院御幸の時の菅根卿の序文も權律師由性献風流
艶藻と書れたり當時退散する事とちるともいひならへり末の長歌も秋の紅葉と人々は

己のちりくわのれなは又紀氏の歌も花もみみ散ぬる宿の行春のふる里どころなりぬへ
らなれあも皆退散するといふさて此歌今散ぬへきとあちませてよめるにてあなるち散花
に向ひてよめる心とも定まらぬのうりん院ふて櫻の花とよめるとして上の二首の如くち
ると見てとの書れさる也さりとて又ちると見つゝもよむまじき心ならねは撰者其心しら
ひと得て落花の中に入ら前後の詞書とはたのへられたるもの也

○遠鏡にトレヤ櫻ヨオレモ一所ニ散テトウナリモナツテシマハウ人ト云物モ一盛サカ
リナ時ガアツテツレカ過テオトロヘタナラハ老ホレテラツシモナイヤウヌ人ニ見ラ
ル、テアラウホトニといへるは非也いつれの人は盛過ては老ゆるさらんさると獨た
ちて散ふんとまていはんも異やうならんに其盛たにもいまたこぬま小老らん末としの
あちまして歎くへうもあらし況や出家遁世の身ならんとや全跡盛あらは人に憂めと見
えなんといへると盛の時有てそれ過て老はれかとるへたらはとやう小解なすへきもの
ならんや事たのへるのみならず更おさる心うたのうへに見えさる事也せめて一盛過な
は人おあどあらはこそはあらめ一盛わりなはと有とやこはひとへお衰老と歎くと見ひ

あめたるより強たる言もいへるあり

あひしれりける人のまうてきてのへりにける後およみてはなふさしてつのはし
ける

つらゆき

ひじめ見し君もやくるじとくら花けふいまちみて散ぬちらん

こは花とやるお付て思ひよせたるうたにて引とりていはくけふは待見て云々とまてよみ
つるおなは来もし給はねは手折て参らす也とやうお落る心はへ也諸註この歌とつのはし
て来ん事ともよほせりとするはたのへり上に惟喬のみこのちらはちらなんちらととてと
よみてやり給へるは同じ詞ならしらへ異おてちらはちれく今待しとやうに強くい
ひはなちたるおのへりてあたる所あればやめて来たれと催したつるに落る也今はしおう
らみんやうの意はなしさてころ花と共にはやりつれ故郷人の来ても見なくおと思ひさり
たるには花と折て添へきよしなし聞わくへし

○打聞お相知とは男女の逢たる事とあひしるども物いひけるとも云は常の事也然れど
もこはた、相知れる人とまてお軽く心得へしといへるは非也しるとは我ものと領す

ると云稱ふて世としる國としると始め皆其意推て知へしこゝらふては知己の友といふ也されと見しり聞しりたるともいはざるにあらす是も目の物とし耳の物とせるふて見しめ聞しむる也夫婦の上ふ殊更ふいへるは己の物と領する事外の類ひならねは也又相の言は我と人と對する事の限りふはみな加へいふへし今常ふも相待相添相變らすなどいへるふ違ふへらす

○遠鏡ふ此間チヨットキテ見テイナシヤツタ人カ云々を解るは非なりこは其みしわひたはわつらふまれいふふまれまうて來たる事花見るとてふりはへしあらす事のついであらんふは其意と得てよろけふ一目みしとは云る也されはチヨット見テとは云へしチヨット來テとはいふへらす人の上おていは、たどひ終日面とあはせたりとも同し席おつらなりたらんは有りなる類ひとは猶一目見し人といふへくよし時の間なりともふりはへ語ひし人とは只一目見しとはいふへらするの如きと思ふへし

山の櫻とみてよめる

春霞なにかくすらんさくら花ちるまをたにも見るへきものを

こゝちうこなひてわつらひける時ふ風ふあたらしとておろしこめてのみ侍りけるあ

ひたふとれる櫻のちりけたふなれりけると見てよめる 藤原よるの朝臣

たれこめて春のゆくへもしらぬまに待とくらもうつるひにけり

こは廉もふるし帳もたれたる寒疾のさまふて春のゆくへもしらぬまはたち行日數もしらさりしといふ也こは邪熱ふ犯されて何事もおほえさりし問あるへしさてや、物もねはゆるふ帳の惟子るといふかとのけてあたりふさし置せたる櫻と見たるに大方散過たるふしらぬまの日數の程と打驚ける也詞書に風にあたらしとておろしこめてと書るにいはるも風のもあらず日數のためにうつるひたると自然に見せたるのいみじき也
東宮雅院にて櫻のはるのみは水にちりてなわれけると見てよめる

すのの、高世

枝よりもあたに散よと花ふれは落ても水のあわせころなれ

さくらの花のちりけるとよめる

貫 之

ことならんかかすやいあらぬ櫻花見るとれさへにうつころなし

ことならば、斯とならばの約まりたる言ひて今ものくわらむとみらば咲としてあれし
とさけるのひなきといふ末にもことならば君とまゐるへく云々ことならば思はずとやは云
々あり允恭紀の許等梅濕座云々万葉の殊放者云々又殊落者云々なども斯と愛は斯と
放は斯と落はにてし約まれるもいとふるき事也又末のさくらしことばふらなん管萬
ふとは根さへにはりてすて、んなどはことならばふらなんことならば根さへふといふへ
きとならばと省きなれたるにて又後なるへし

○餘材に常ふことみらばの心歎といひ打聞も是によりて異さなればと解ると遠鏡の
は是と破してトテモ此ヤウニと釋せる共に非也中に遠鏡のトテモ云々といへる其心は
へのみは大やうわたれるものうらこは例の諺解なれば更ふ其辭義何の事ともわられず
この美のてにとはと引取てさにと解さるものゑと推こめてくせにと、けるにひとしき
根なし言なれば其末つひに違はさる事少しとせす

櫻のととくちるものはあしと人のいひければよめる

さくら花とくちりぬともおるほえと人のこころる風も吹あへぬ

畢竟何よりも心はありとくちるものなしといふ意と人の云ふ付て花ふたくらへたる也さ
るは世の人こころのあたしくしう移りやすきときはめていへりあへぬはあはぬの意にて
彼と此と立合ふたきといふ秋ふはあへすうつろひにけりも秋にはいと立向ふ勢ひなく
うつろふといへり此外とりあへすあへなきなどの語みな然り今も人の心はいととく散て
風の吹あはん間も待ぬ意也

さくらのほなの散とよめる

紀ともものり

久かたのひかりのどけき春の日に一つとつらなく花の散らん

しつ心の心は濁りて唱ふへしあた心のさわるしき反にてのどけき心といへるうのらみ一
つの詞也上なるしつ心なしも同しすむときは調はりて自然心も違へるもの也吟して知
へし

春宮のたちはきのちんにて櫻の花のちるとよめる

藤原のよしおせ

春かせハ花のあたりとよきてふけ心つからやうつろふとみん

さくらの散とよめる

凡河内みつね

雪とのみふるたにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらん
こころ面白く詞うるはしくして調たのくなつるしきは殊れたる歌あるへし

ひえにのはりてかへりまうてきてよめる

貫之

山たかみ見つゝとかとし櫻はなかせのころにまかぞへら也

題しらす

大伴黒主

春雨のふるはなみたかさくら花ちるをしまぬ人しなけれは

亭子院歌合の歌

つらもき

櫻はなちりぬる風のなごりに水まきうらに浪そたちける

ならのみのとの御うた

ふるさととなりよならの都にも色はかからす花はさきけり

春のうたとてよめる

よしみねのむねさた

はなの色は霞にとめて見せどもかをたにぬすめ春の山かせ

寛平御時さといの宮の歌合のうた

素性法師

はなの木も今のほりうゑと春たてはうつろふ色に人習ひけり

菅萬拾遺等に初句花の木はと有る然るへき花咲木とは今は堀植し其花の咲散春と成くれ
は世つけるうのれこゝろふなりて我さへわためくと也人あらひけりは花のあたしくし
きに人さへあやうりあらふものといふやうて次ふいさけふは春の山へに云々いつまでの
野へふこゝろのわくかれん云々思ふとち春の山へお打むれて云々なと同人の詠にて彼う
のれこゝろ也按するにわきてさる方の情ある人也けりと見ゆめり

題しらす

よみ人しらす

春の色のいたりいたらぬ里にあつとげるとかさ花のみゆらん

いろは五色の類ひにて物の上にあらはれたるとさしていふ今の常と同じ衣の色花の色な
どありあまゝ也のたちなき物ふは古今ともいふ事なし即ちいろの辭義しといふへくもあ
らぬ事など外に辨せり今春の色といへるは漢國の春色の文字につきていへるふて此ころ
の語也のしては風色雨色とあれどこゝは風のいろ雨のいろといはず其余も國色容色など
もとより國のいろ容のいろといふへくもなきと思ふへし歌のこゝろ春氣のかしなへたる

はいたれる所いたらざる所有へうもあらしさるふ花のさける木あり又さのさる木あるのみゆめるはいのにといふ也里とは大らのにいふにて鳥みき里花のうたぬ里などいへる里也所といはんはんに同しさて咲る咲さるは諸木といふ

春のうたどてよめる

つらゆき

三輪山を―かみかくすか春かすみ人にしられぬいさやとくらん

こは譬へはけたるき人あるあたりとは物もてのこふやうお見なしたる也しられぬはこゝにてはしらすぬといふにてしられてあらぬやうの意也人にしられぬと人しれぬと約めいふに同じ三輪山とくはのり霞の立隔てのくせるはたやすく人にしられぬさるへき花や咲らんと也この山は同じ作者の見ゆとし見るは杉みさりけるなどもよまれて杉のちにして奥まりのうしくしきはのすすすとも有ぬへしさて初二句は萬葉卷一三輪山平然毛カノスカケモキニセコハ、ロフヲナムカクツヤフヘンヤ隠賀雲谷装情有南畝可苦佐布倍思哉とあるに同じ今は是によられたるの又はふと暗にふはえたるといひ出たるるなるへし大に意たうへはさらふにたらず六帖ふは山とに立もろくすのとあれば夫のとも思へたとさては一首ことわり明らるならぬはと難し曾丹集に源

順霞たつ三輪の山へお咲花は人しれすこそ散ぬへらみれともいへると見ればこの山にまを大物主の大御神の社もなく杉といつき祭れるよりとふらひきませ杉たてる門みといへる皆人しれぬにたよりあることちそれは當時さる意はへも有けんをし拾遺によしの山たえと霞のたな引は人おしられぬ花やさくらんとよめるも末句みと全く同じ是もよし野は世と通れて人の入山なれば花もさる人にしられしとするの咲らんと云今ととくにたれり

うりん院のみこのもとに花見に北山のはどりふまかれりける時によめる

そせい

いさげふの春の山へにまーりなんくれなひなげの花のかけかひ

こは古本のつ一本おみこのともにとあるを正しりけるもとはともと下上に書たうへる也もとふとありては更お聞えず雲林院北山にあらはころはあらめこはみこの御供し奉りて程近き北山のあたりには花見にまのりたる也秋の部お北山に僧正遍昭と茸狩しにまのりけるによめる紅葉は袖おこき入てもて出ふんと同人のよめるもこの雲林院より遍昭の供

して北山ふあうひしにて全く今と同じこは常康親王の遍昭にこの院と譲り給ひて後也此
 花見はいまた親王のしめ給へる程なれば遙の前なるへし歌の意もいと若け也さて歌は顯
 本奥義抄等に三の句まどひみんとあるる正しき密勘に迷ひみんとまじりなんふ點とあひ
 て可用の由侍し也とありこはまどひなんは統ひして酒なとくまんといふなるを迷ふ事と
 見られたるよりまじりふ點しかへられたる也まどひは統ふにて一まどひ一ひれの事ある
 と体言にまどひとともいひて思ふとちむれよる事といひなれたり思ふとちまどひせる夜
 は唐錦といへるも同じ是とこの頃圓居の意と思ひあやまちしよりまどひなんと活らけた
 る用言とは圓居の詞しあつるふへさふあらねは惑ひなんどこゝるえさて惑ひなんどあ
 りては意どほらねは直したる者也うつ穂ふまどひする千年の陰の嬉しさにもるともなけ
 の松のがけのはとあるはさなるら此歌によれるもて初句のまどひするは即ち此まどひな
 んととれる也中務集に思ふとちまどひて見れば梅花云々と云るにも今としるへし又なけ
 はもとは無氣ナキの意より起りて今は一つの詞とありさるは等閑なる意と成て今の俗ふなけ
 やりといふなど即ちこれより出たる語也これと諸註本の意のなさそうなどいふ方にどれ

るは根と見て花としらさる也たとへはあさけの辭は爲氣ナキの意より出たらんふなすのみの
 事に非ど人とのる鄙言に戯氣オモシといふものならそ戯れたる意にとまらさるる如きと思ふ
 へしさて一首の意はさゝらはけふこそはこの山へにまどひして心の限りあろひなめよ
 しやくれるはこのまどひふやとりなんこはなほさりなる花の陰のはねのひてもさてあ
 らまほしきといへる也

○打聞に雲林院は北山の邊に在てろこへ花見にまのりける事とのやうに書は文の一昧
 也下に僧正遍昭のもとに奈良へまのりける時と書るも同じ書牒也といへり諸註もしの
 思へる共に非也こは遍昭のもととて奈良へといふも何も異なる文ふ非す奈良へ遍
 昭のもとにと書ても同じ奈良ふ遍昭の家あれば也又其例ならば北山の中に雲林院なく
 ではあはす又あひたに花見にの詞ありてし聞えんやは今は羈旅の部に惟喬のみこ
 のともに狩ふまられる時に天河といふ所云々とあるに全く同じ文にて然も彼天河の端
 書は此雲林院のみこの供とあるとまねひて書たるものもて物語の攪入なる事なと其所
 に辨せりさるにても今本ふみこのもとにとあるはいよく寫誤あると知へし又同書に

此北山は平野の社の北に大北山小北山といふ村あり其あたり雲林院ふ近しと余材に付
ていへる共に非也よし近うらんとも其所と直に雲林院とさし定むへけんや況や半里許
も隔つらんとや又院内の花下にあるふと春の山邊といふへけんや又山陰の仮寐としも
なほさりあらそといへるにこそたのしきおもむきはあんなれさはり結構せる院内に
ものせんと今更たそくもなけの陰のはるとなほさりならずいはん却て何の興のあらん
又同書ふなけは歌集どもにあまた見ゆる中に曾丹集ふあればありとなけらのよそに見
し人と秋風ふけはるれを戀しきこれはあれども無氣ナキの如くする事にいふといへるも非
也此歌はありし時は只有とのみ等閑によそくしくみし其人も今は戀しきといふふて
ある時はありのすさみにくくありきなとある歌の心はへ也あれともあけの如くすると
やうの意にては更ふなしみな語の本に泥みて無さそうふそる事と思へるよりのく強た
る言も出くる也後撰ふなけの紅葉の夜の光のもとあるもあはさりならぬ紅葉の色とい
ひ此外もあけのなさけ言のはなけなるものなどいへるみな然り
はるのうたとしてよめる

いつまでもか野へにころのあくかれん花をちらすは千世もぬし

題しらす

よみ人しらす

春とにはなのさかりありあめどあひ見んとはいのち也けり

このあひみんは上の相しれりける云々と同じく相は軽くろはれるふて只みんといへる也
逢て見んの意と思ふへうらと花に逢といふにあらす花とみんとあはる也年々春とお花の
盛はあらんそらめとぞれ見ん事は命也けり其命あそとせるへうらねは只これと限りとみ
るこちとと老人或はあよわき人の述懐なるへし限りあき盛はあれあれと見ん見さら
んはこなたにありてさてたのまれぬ身にしあれはいともはあなき限りなると立のへり歎
したる也

花のこよのつねならぬ過してむかむまたもかへりきなまよし

吹かせにあつらつくる物ならぬこのえた一もどいよきよとらひまよし

顯注に此一枝はとあり察勘ともなくもなし同心のと余材ふ書りさて今の刊本には此歌の
注ふし又古寫本といふ限りにも此歌なし契沖所持の顯本には有し成へし索性集六帖等に

も一枝とあれは古本は然りしおころさて思へは折ておはしまなとにさしたける枝の何そ
さる故有てよめりしならん一たひ我ものと手折來て殊にもめつる此一枝のみは世のおし
なへならず吹風も心せよとはのなくねのへる方感あるこちせむるにや

○打聞おあつらへつくるは詭着るなれとつくると濁りてよむへしといへるは非也着る
の意ならんといつて濁るへき有まじき事也さては告る方にさへまとはるゝとや

まつ人もこぬ物ゆゑにうくひどのなきつるはなを折てけるかな

花は梅なるへしさてものゆゑは物の故のゝとたゝみて物故といふ也然せめていふゆゑ
あつてといふ意と生とつよき勢ひにたされて余韻のそみやけくあらはるゝは歌の常也
ものは何おまれ受たる物とさす意と得ていへは物の何故おといふへしされと一首の中お
もしうたのひの語おらは何の意にはさくまじき事いふも更也こは語のとわりと明すのみ
物故といふ一つのてにとはと成てはさはりの轉用は歌の上によるへき事又いふまでも
おらず此にてとは昔より事されねは調と捨て意ととくものにて止とえさるのしわざ也な
は委くはこゝお辨せず畢竟は物ゆゑは物ゆゑ也と其儘に自得するの外なしけりはけりら

んはらん也行はゆく歸るはのへる目は目耳は耳にていさゝのゆるはゞ差はさる事と得
へらす

○遠鏡にこぬものゆゑには來もせざるふといふ意也といへるは非也せざるといふの物
故の意ならんやこは引とりていふ諺解にしてたどへはしれものとのしらすといひ
或は虎は猫に似たりといふに似て只其たもむきと示そのみ何る其意味ととくおたらん

寛平御時さまの宮の歌合のうた 藤原おきさのせ

さくばなひちくさふからにあたふれと誰かひ春をうらみはてたる
春霞いろのちくさに見えつるはたなひく山の花のかけかも

のそみの色のあやしうも千種は匂ふと見えしはろこの山の花の色をうつれる影も然也
けりと落着そる也打みわたせる山邊お色めくとふと花のあらぬのと目まどひたるとはの
りの間の趣きとよめるおて霞と取たてゝいふも景色につけるおていひのなし也

在原元方

霞たつ春のやまゝの遠けれとふまぐる風は花のかそをる

霞こめたる山本はいと遙のなれと猶ろあたより吹わたる風にはなの香ころは匂へといふ
花は其山に咲たらん物にしていりて遠きにくまてはといふのしむ方によめるのはな
くてめてたき也梅は散櫻は咲出らん頃ほひの山野の春色といとみつゝのしくうつし出せ
り次ふく風と谷の水としなりせは云々冬の部にも此川にもみち葉なる云々なとい
へるも花は深山のくれみ咲けん物とし紅葉は奥山の也とさし定めてよめる只近わたりの
花紅葉ならんすらめと皆見わたしの打つけ心おさなく思ひ入る歌となれるの雅情也

○遠鏡お霞ノ立ッテアル春ノ頃ノ山ハ遠ウ見エルケレモカクヘツ遠ホウナイカシテ吹
テクル風ハ花ノ匂ヒカスルといへるは非也遠けれと遠らそ遠けれと近けれはやとい
ふ語調あるへきならんや遠く見ゆれとなくはさる心は出こぬ事也即ちとける詞お
は遠ウ見エルケレトモといひなせり又よし遠らすとも打わたしたる山の花の大やう
匂ひくるものならず況や長閑き春日あらんとや

うつろへる花と見てよめる

み つ ね

花みれいこゝろとにうつりける色にみ出しひととこそ一れ

うつろの詞ちる事にも色のはるにもいへれと詞書にうつるといふは色のはるといふち
るとは皆ちるとのみ書る例也今もろの方に見るへし歌の意は上あうつろふ色に人ならひ
けりといへるに全く同じこゝろはへにて花とし見れば心さへ花やきてあためさぬこは色
にはあらはさし人知て咎めもそするといへり花に感ふと人のしるらん何はありならねと
余りある春のうれれ心としつめ難き戀の心おあそらへなして人にしられしとあまへいへ
るの尤れのしき也こは必うつろへると見て起る心ならねと心の色あうつるといふは打ま
るせて戀の詞あればさる方におもむけたる也人もこそしれはこゝなとは人こそしれとい
ふに多く違はす此外もそとるもこそせめなど暫くればはめく意とおふるはそするこそそれ
の詞もとよりのよく物とさし定むるてにはあるにも歎辭と加ふれはいさゝの語勢よ
わりてさしつめたる矢さき二の的にあたれる也暫くの時つれしのみにて必わたる手
こたへしたる詞と知へし

題しらす

よみひとしらす

鶯のさく野邊とに來てみれはうつろふ花にかせそあきける

是より六首は落花とむせへる鶯の歌也鳴野へ毎に來て見ればといへると思ふに旅ゆく人
などのよめりしならん花の散ぬ野もなく鶯ならぬ里もなき彌生の春色思ひやるへし

○遠鏡に二の句のことにといふ詞は下の句へかけて心得へし來て見ればへはるゝらさ
る也といへるは非也鳴のへとお來て見ればといへる引はなつへき句調ならんや調へと
しらぬの甚き者也さりと引つらぬては聞えとはこそあらめさて事もなき歌なるをや
吹風をなきてうらみよ鶯いわれやはなれ手たよふれたる

こは俳諧に梅花見にころ來つれ鶯のひとくくといひしもとるとよめる同じ意はへに
て木陰など其花近く立わたりたらん時しも鶯のきり聲ふとに鳴けんよみし成へしつよ
き語勢しのきこめり

○遠鏡に鶯カオレカ近クへ來テ恨メシツウニナクカといへるは非也鶯はよし近のらす
とも有なんそはとまれこの歌は花に近づけるともとに解へしさらては我やは花にとい
ふへきゆりなくのつは語調にもそむけるこゝちすめり今恨メシツウニナクといへる
は常の長やのになく聲ときくにやいのゝ覺束なし

典侍給子朝臣

ちるはなのなくにーとまる物あらぬ我うくひすにおどらまじやん

泣によりてとまらんやさるしるしある花おはあらずさる事あらんおはもとよりわれ鶯に
かくれてあらんやは惜む心は彼の類ひにはあらぬといふ意はへ也女のうたふしていと
情あり

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せんとてしける時よめる

藤原俊蔭

花のちるとやわひーき春かすみたつたの山のうくひすのこと

詞書の歌合せんとて云々は一本せんとしける時よとあるにしたのふへして文字衍り也即
ち次なる素性の歌の同じ時の詞書には然しるせり

うくひすのあくとよめる

そせい

うくひすの
こつたつひあのか羽風にもるをたれよおほせてこゝら鳴らん
二句原本にのの羽ふきとあるうのれとまには似つのはしゝらん又初句六帖には鶯の

とありさて按するに鶯の已の羽ふきに散花と大らのならん方却て花中に出没するさま
して其けしき見ゆめり顯注にもろくの鳥はなるんとは羽とうつ也云々五月まつ山郭
公打はふきともよめりと云て今とも其心に思はれたれとはなくなのさるには拘はらそ
鶯の高くは飛すしてはく羽さる常のさまといへり郭公の歌はやめて今も鳴なんと有
て鳴ん爲に羽ふくといふ混とへらす密樹に家本には羽風にとあり同心なれと今少しあ
らはありと宣へりこは羽のせの方誰にもよく聞ゆと云意歎羽ふきといふとも何のあらは
ならざらん

鶯の花の木にてなくとよめる

み つ ね

しるこあき音おもかくのあ鶯のてーのみちるはあしちあくに

題しらす

よみ人しらす

こまかへていさ見にゆかんふる里は雪どのみこそ花はちるらめ

こは遷都のはしめ奈良の舊都と忍ひて思ひ立ける人のよめりしならん今の都人はみな奈
良人にて誰のはさるはれさらんなれば駒並てといふへし

ちる花をかにかうらみんとの中にわか身もじんにあらん物かか

小野小町

花のいるばうつりにけりあいたつらに我身よにふるあかめせしまに

此歌末の句の意ふとは心得のたきより諸注解まへりこは俗おまのせていへはうき世の
さまにて身にさう難き心つらひの事ありてえ見にこぬうちにといふはのりの心はへ也な
らめは物思ひ也今はそれお長雨と思はせたりいたつらは勞して功なきといふの本にても
たしとるともいひ其外轉し用ふめり今は花とは見ぞして詮なき物思ひおあたら日數と過
せしといふ

○遠鏡に世おふるとは男女のあたらしするといふ男女の中らひのことと世とも世中とも
いへる多し此集戀の歌おもこれおれありいせ物語に世てゝろつける源氏物語にまた世
としらぬなとあるたくひもこれ也といへるは非也男女の語ひは世としるとはいへど世
にふるとはいはすしるの語は其本物とうこの事にてろれより轉りて心に物とまのそ
るともいへり其委しき事は今辨せとされは世としるは長くも大御世しるしめそと初め

或は國と有ち家と脩むるも皆はどく世としるといふ也中にも女は男によりてたつものなれば男せると打まのせて世としるといふされは其心のささせると世心世つけるなともいひなすめり伊勢物語お巳の世々に成ければ疎く也おけりといへるも女は男し男は女せる也男の女せるは家と嗣さどさむるふて即ち世おたつ也世にふるは只世とわたる事おて是ど混とへき事に非ず雜の部にも世にふれば愛ころまされといひあるは紫式部の我身世にふるはどろはのあき世にふる道はのらさものとなどよめる類ひ舉るにたへねと更に男女の語ひとると世にふるといへるものなしされは我身世にふるなめせしきは只世につれたる物思ひの有しおひたと聞へき也

仁和の中將のみやすん所の家お歌合せんとしける時によめる

ろ せ り

幸一とちるふ心はいとにどられおんちる花とよぬきてはしめん

願はくはこの惜むこころ形ありて糸のやうによりなざるものならなんさらは散ゆく花ひらとにぬきとむへきとといふ也こは未ふとむへき物とはみしにはのなくも散はな

とおたくふ心のといへるお同してころはへにて花とに心はうひゆけとのひなきより糸ならませはやかてぬきとむへきと心の付まといなからせんわさなきともとしみてあらぬはのなき願ひのいはる也

○遠鏡にチル花チーッく其糸テツナイテチラスヤウコトメテオカウニといへるは非也こはまのあたり今ちりゆく花ひらとぬきとめんといへるにて思ひおへぬあわてころ也咲るなら梢におうてはどむるのひなきなど云ん理りとはなれて見るへしのつ梢に繋く事とちる花とにぬきとといはんやさはきこえぬ事也

志賀の山越おて女の多くおへりけるに讀てつかはしける

つ ら も き

あつとゆみ春のやまへをさえくれは道もさりあへす花を散ぐる

餘材にむらし志賀寺へまうつとて都の人の往來しけりしところ也志賀寺は崇福寺と號す天智天皇の大津の宮おまししくけるときお建られし御寺也といへり接するに大和物語に志賀の山越の道に岩江といふところお故兵部卿の宮家といとおのしう作り給うてとさ

くおはしましけりいと忍ひておはこまして志賀にまうつる女どもと見給ふ時も有けり
 などおれは今も其宮女たちふても侍るへし次ある詞書お志賀より歸りける女どものと打
 まのせても書れたるなと思ふに當時は志賀の山越にて女の多くあへりあといへはやめて
 崇福寺まうての御達ならんとこそ聞とられけめさてみちもさりあへすはいつちむきても
 散くるさまおてよくへき道なきといふあへすの詞はあせも吹あへすの所にいへり下の意
 さくへき方もなきさて打むれても來たる哉こはいらへせんぞすゝるさいへりあゝる山
 邊の行ふりは誰たにあらんと内わたりの一むれに行あひたらんとさめさこゝる思ひやる
 へしさるこゝると打つけによみて休らひたらんあたりなどへ追つきてやれりし也古は男
 女の別ちはさる方おこそのなる物あら又あゝる雅ひたる方は嫌ふへらぬあらはしな
 れは其宮女たちの中に大やうしれたらん心あるわたりまてひそのにう打出たるへき

寛平御時后の宮の歌合のうた

春の野よしかかづまんとこゝ物を散かふばおに道ばまじひぬ

わらふ摘事は打まのせて女のしわさなるは論なしさる女わさと男もして遊ばんといへる

春興れもひはるるへしゝのいひ契ては出づるものゝもとよりうのれ心おまのせたれば花
 ある方にひねもすくらしてさて菜つみといひしにたのへると散みたるゝ花お道まじひし
 たりといへるゝおのしき也余材にわらなは打まのせては七日あつむといへとひろくは春
 のうち野に出ておはきとつみ棘とゝるに至るまていふ也といへり

山寺にまうてたりけるによめる

やどりて春の山邊にねたる夜はゆめのうちにも花ぞ散ける

花のうつろふさうりに山邊おしも宿りしめて寝たる夜は終日としひ暮せるはさるものに
 てゆめの中にさへたゆみなくも散のゝれるといふ夢も現も一つ也と散の盛とおのしくも
 よみなせる也

○打聞に山里にいと多く花のちると見て寝たるよの夢おも散花と見たる也云々遠鏡お
 春ハチノチル時分ニ山ニトマツテ寝タ夜ハツノ花ヲ惜イノト思フニエカ夢ノウチニ
 モ花ノチルヲハツカリテ見ルワイといへる共お非也もとより見るいはれいさる事なれ
 とおもむけいへる筋違へりさるは夢にも花の散と見るのなといはんお同じく意得た

るにてすなはち躬恒のいもやすくねられさりけり春のよは花のちるのみ夢に見えつゝ
とよめるにわいためなるへし今夢のうちにも散けるといへるは散はなの晝夜間断な
き方によみかゝるせる也上の句に花のもとにねたる事と強くことわりたるは夢の中にも
散入る夢にも散のゝるといふはのりのこゝろなるを聞わくへし

寛平御時ささいの宮の歌合のうた

吹かせと谷の水と一かかりせばみやまかくれのばあを見まよや

こはさはめて其わたりの花なりけんもいつれしられねとさる水筋より流れこんには奥深
き花も交りなんとなつゝのしうもおもひなさるゝ押あて心とさる方に推きはめてよめる也
歌はさてころ有へけれ

志賀よりのへりける女どもの花山にいりて藤の花のもとに立よりてのへりけるに

よみておくりける

僧正遍昭

よぞに見てかへらん人に藤のはあはひまつぱれとえたばとるとも

打聞に末の句六帖にとのんまどたにどあるの此僧正の口ふり也枝はとるともといへるは

ことわりつさす詞もよしなしといへるを然るへきとのん其間たにとめて見んととよの
く暮へる心よのくみやひ面白くしのもいひ果すしてあさやのに聞せたらん凡器の及ふ
所ふあらと決めて僧正の口つさ成へしよに見てとはふりはへてたに問へきと物の序に
しのもさしいそきたらんと云

家お藤の花さけりけると人のたちとまりて見けると讀る

みつね

わかやとにさけるふちあみ立かへりどまりてよのみ人のみるらん

こは我やとの藤波さはのりの花ならぬとさる人の過つてお打のへしてまてはいうて見る
らん見たてあらん花のはといへる意也しといへるのやめて下嬉しみの深き也巳の物とめ
て、内にはこりて獨この詞はすへてしいうらうへにはいはるゝそ常あるさて藤なみと浪に
よせて立のへりと云り

○餘材に藤浪とは藤の花は波に似たれはいふ云々打聞に藤なみとは花のなひくと云と
いへる共に非也ふちなみは藤の本名ふてあなうち花によれる名にあらず凡ふちは蔓草

の総名にてもはら葛の字とよませたりふちころもなど葛衣と書て必藤のみに非ざると思ふへし馬の鞭むちなとも必しなへたるつゝらと用ひしよりふちの名ありさる中ふ藤樹は其幹こは更もて花も葉も殊れて打しあへたるものなればふちなみの名と負る也竹の中にてわきて靡くと奈與竹といへるの如し又然しかとくれてしなふるの故に只ふちとのみいひても葛藤の事と成て獨其名と得たるは是又しのとのみいへは細竹其名ととれるに似たり花と浪と見たらんに藤浪の花とはいひのたく又萬葉に藤浪フチナミ之思オモヒ統トなどあるふもなみは花ならぬと思ふへし

題しらす

よみ人しらす

しまもかもとま句ふらんたちはかの小いまのささの山吹のはか
こゝろ明らけし

○餘材ふ萬葉ふ橋の島とよめるは大和國高市郡也此歌は古歌の体なれば藤原の宮より奈良へ都と遷されて後故郷と思ひてよめるにや打聞ふ橋の小島の島は大和の飛鳥の橋の島と云所也萬葉にあまた見えたり宇治ふ山吹の瀬といふ所有によりてこの橋の小島

とも宇治ふありとせるは後のわやまり也といへる共に非也大和のは橋の島とこそよみ
たれ橋の小島の崎といへる例あしさは島といへる所の名なれば小島とも崎ともいふへ
きふあらざる事論なき也こは世説の如く山城の宇治川に在し島なるへし今大水ふ流れ
てあしといへり又源氏宇治十帖に明らかなるの島のたすまひより古橋の物よりし
まへて寫し出て歌にも橋の小島の色はうはらしとなとよめり凡五十四帖の内名所と
違へる事はとさくみえと況や都近きわたりとしも偽りしるすへけんや作り語りなる
の故にならくさる名所などはたしかにとわり出る事也事情思ふへし又山城風土記の
殘缺宇治川の所に舊名號橋川とあるも世おいちしるき橋のありしより呼なれしあさ名
ならんのやめて其島陰に秋冬あまたわんなれば後ふ山吹の瀬といへるお同し又元暦の
合戦ふ高綱景季の彼川の先鋒とさそひて乗入しも橋の小島の島と崎と彼世の書ふ往々みえ
たり是も其頃さる所あらんふはいふへきいはれなしのたく思ひきはむへきふころ
春雨に匂へるいろもあかかくに香とくあつかしやまふまのばあ
やまふまはあやあゝ咲そ花見んどうあけん君かこよひとあかく

こは聳すみしたらん其聳などの植つらんと女の思ひてよめるとやうの事あるへしみん人の見さらんはひなきに然な咲るといへり

よしの川のほとりみやまふきの咲りけるとよめる つらゆき

吉野川きこの山ふきふくかせにそのかけさうつろひにけり

岸なる山吹と吹のせはさる水底までは至らぬと同じく底のうけさへ散にけりこはいりてとどさなくいへり

○遠鏡に吉野川ノ岸ナ山吹ヲ見レハ風カ吹テチルカ其風テ川ノ水カウコソコソテ底へ移ツテ影ヲテカチツタツイといへるは非也岸なる山吹はちらすはこゝろ水のうごきに影は散たりともよみなすへけれ本の花の散ふは底の影も一つにちらん事論なし水のうごかうこのぬと待へけんやうつしの聞んには三四句のあひたふ涙めく事なくては詞もたらさるや

題しらす よみ人しらす

かばつあく井手の山ふきさうりにけり花のさうりにあはまし物を

この歌はある人のいはくたちはなのさよともうた也

歌の意明らかし蛙鳴と諸注枕詞とするものは非也こは井手の形容と云るふて蛙なくけしき有ん時におきつへし蛙鳴神なひ川と古歌皆しより井手とれこすの枕ならんやは蛙鳴井手のわたりふ降雪のあとよまるへき物ならぬと思ふへし次おも千鳥なく佐保の川霧する鳴秋の萩原の類ると皆形容也枕詞と混すへらそ

春のうたとてよめる そせい

思ふとも春の山邊にうちむれてそこともいはぬ旅ぬしてこか

旅ぬしてしらの詞打まのせて聞はしたりしといふなれば只有つる事と語るにていはゆる過去のてには也鹿の音あうらうつしてし哉の類も皆同じさると願の詞としも定めたるは譬へは旅ぬしたりし歎いまたせすいりてせまはしさとやうふ二たひのへして出くる意と取こしてさのせられたる自然一つのてには也委くは外あいへり

春のとくすくるとよめる 見のね

あじむ弓はるたもーとり年月のいるかことくもおんはゆるかな

年の内よりまたるゝは春のならひにしてさるは樂しき時の盛なればとほりのまふ過も
くこゝちのせらるゝ也歌の意すきゆく年月のいつはわれと春たちしよりはわたるも矢と
いる如くいとくも思はゆると也詞書と合せて意得へし同人のはのなくて春ふた月はす
きにけり花の盛はそきのてみせよると春とはのなむ意今とのはらそ上る梓弓はると受し
枕と再び受て射るとはいへる也是と家集六帖などふ歳暮に入たるは後人意と得さるのさ
のしら也春立しよりふもほゆる哉は其春の内にていはてはそわらぬ語調なると聞知へ
しこは年月とおほらるゝにいへるに皆まとへるもの也春も年月ならさらんやは

○餘材云家集と見るに内の御屏風の歌とて子日よりはしめて十首あるふこの歌志は
そとて果にわれはもとより歳暮の意ふよまれたれと取わきて春立しよりといふ詞ある
につきて此集にはこゝみ入られたる歟といへり遠鏡も是み從へる共に非也歳暮の意に
よみたらん歌と春立しといふ詞あるふ付て春のとく過るとよめるといふ詞書とさへく
はへて春のうたとすへあらん事更みいはれなき事也況や撰集におきてとやこの躬恒集
は後みとちこち拾ひ集て端書ると殊更正しあらざるもの也先達此集によりてあやまた

れたる事少しとせそろは此集に付て委くいへり今十首の内に入たるやうみ見ゆれどや
あて次に六首無題の歌と書つらねたると見れば七首一絡の歌にて其初發にわれは上の
つらみ思ひて師走と題と加へたる也又外の九首は子日花つみ草合せる所三月つくる日
或は六月はらへ七月あぬの七日夕八月十五日いねはしたりあど書のおもひきと書たる
に是のみ師走とのみ書ん事はやめて此上に木間より風みまのせてふる雪も春くとい
へは花のとそ見ゆと云ふも只師走と端書せり其外もみな初の春中の春初の夏中の夏な
ど四季とも歌にまのせて押あてに書加へたりやめて次なる彌生の晦の日花つみより歸
りける女どもと見てよめるとある歌とも只はての春とのみ書り今の師走も此類ひにて
取にたらず

やよひに簾のこゑ久しう聞えさりけるとよめる づらゆき

あきとむる花―かければうくひきもはては物うく成ぬへらあり

やよひのつこもりゝたに山とこえけるみ山川より花の流れけるとよめる

深 養 父

花ちれる水のまにくとどめくれば山には春もあかりにけり

花の散て流るゝ其水筋も随ひて分かれは山には花のあきのみのみる青葉と成て春さへも
なくありふけりと夏めきたる思ひの外のけしきといへりとめくれば、強ち求めくるふ
あらず賀部に山の岩根とめて落るといへるも同じくつたひくるといふはのりの意あ
へる也隈もかたさすねんころふしたゝめ行貌也上に誰しをもとめて折つるを求めてど
きゝても事なきに似たれと是も猶したゝめ折つるにてよく見とめてあやうの意也本も
どめはとめの語にも言とろへたるなればもとより同じ意はへならら輕重のたうひひて
其語意もはり行也とめともとの略也とざるものは本末たのへりくはしくはこゝにい
はぞ

春と惜みてよめる

もとゝらた

とどめともとゝまらあくに春かすみかゝる道に―たちぬとちかゝる―は

何はあれと霞はのり春のけしきのいちしるき物あきにたつといふの縁さへわれは春のす
みたてるといへはやうて春たつ事に聞えあらへる其うらにてしる立馴たる春霞も今はか

へり行道の空も立ぬれはいのふしたふとも思ひとゝまらしと歎きたる也しる霞といふの
なへての春と惜む也

○餘材おこの春霞も上の春のそみたてるとやいつことよめる歌も注せしごとく春といふ
事お用ありて霞は立ぬといはん爲のみ也といへるは非也此歌何る霞に用なしといはん
却て霞と主としてよめりといふへしたちぬといはん爲のみに只春の事と春のそみと
つらぬいはん事有へうもあらし又春霞たてるとやいつこの歌もゝはら霞といへる也是も
あやまてる事其所お云り遠鏡も是に随ひて霞は立の縁にいへる也といひて一首の上に
霞の事とさらにははざるは意と得ざるの甚しきもの也

寛平御時ささの宮の歌合のうた

ねさゝのせ

聲たえぞあけやうくひすひとゝせにふたゝひとたにくゝき春かは

こは上お彌生お鶯の聲久しう聞えさりけるとよめるとあるお同じ意はへにてざる絶間あ
るともよはし立てたえすあけやと云るおもむきなるへしもとより絶間なく鳴しきりたら
んにしつゝいふべからず

○遠鏡小鶯ハ隨分絶ス鳴テ恨ミヨヤイイカニモナキトコロチャといへるは非也こは春暮ぬれは鶯もとまらぬ物にして一年に二度としも聞へき聲あらずされは己のなくへき春につとめてなけといふ心はへにて花は根お鳥は古巢にふといへる暮春のさま常の事也さるはのれの鳴音とめてよめりと見て事もなきとや今は上に鳴とむる花しなけれはちる花の鳴にしとまる物ならば吹風と鳴てうらみよしるしなき音とまなくのなの類打のさなりたるお耳なれて是とさへうらむる心お思ひとれるなるへしさりとて聲たえずなけやとあると鳴てうらみよと聞へきならんや又恨みてなけとあつらへそめんも異さまならそやしひても春の暮ゆくどやうの心ならばこはさもとのめふたひとたに來へき春のは一年にまれあるとつよくいふ也さるは鳴て惜めよとはいひもしつへしまれなる春なれば恨みよといはん更に語意さへ打あはさる也こは上に雪の木に降のれるとある目うつしに次なる歌と庭わたり雪と思ひとれると同一謬也打聞にわあ深く惜むと鶯あつらへたる也と云るは今一等打てえたる物にていよく覺束あしすへてさる心歌の上に句はぬ事也

やよひのつこもりの日花つみよりのへりける女どもとみてよめる

躬 恒

とよむくまのよはあしにはかあくる散はあそにたくふこころか

餘材に花つみどは野山などに出て花とつみて佛お奉り聖靈などおもたむくるといふ歎云々躬恒集お花つみ鶯はいたくなきうつりのにめて、我つむ花ならなくお是は鶯の來るて鳴花と摘おあらと功德の爲につめはいたくわひてな鳴るとよめる歎といへり打聞にも花つみとは二三月のころ野山に往て花とつみて先祖の墓と祭る事也今の京人は四月お日枝の山お上りて花摘とて草花などつみもて歸る也云々といへる此等の説わたるへし六帖に舟岡にはな摘人のつみはてよとして行らん方やいつころとあるもやうて蓮臺野の茶毘の墓原に手向るなるへきとはのりてさしてゆくらん方やいつこそとさしも花やける人の向はん行への引たうへたるとあちきなみいへるなるへし歌の意留めらるへき物にはあらぬと散ゆく花お心の付まよひぬるよと人しれぬあたし心とはのなみたる也思はずなる道中にしてのほよきおもさあへらん痴情といふ其女どものおのつみたる花もてた

はれ行らんささちる花とにといへる中か句へるもの也味ふへし

○餘材に春の暮とくると花つみの女共のすき行ととめんよしのなさと散花とにとはよ
ろへたりといへるは非也さらば花と春と女と其としむもの三つ也いと煩はしくて然は
聞とらるゝ事おあらん譬喩の歌多しといへどもとよりさる例なき事也又云女どもと
こそ散花とにとはよろへたれ春のくれとくると惜む心見えすやと難する人あらん然
らすは詞書に只花つみより歸りける女共と見てよめるとて上の貫之の道もさりあへす
といふ歌の前後におきてやよひのつこもりの日とことわるへららすといへるも非也花
つみは同人の歌に鶯はいたくな鳴そ云々六帖お舟岡お花つむ人の云々たと皆上おひけ
るの如し或は人九集お春の野の花とくさく摘んとてさもるたみとも遣りける哉など
あると思ふに凡山野の草木花咲ぬれば摘はやす事にて春の内いつおてもするわざなら
んには此花摘は落花の頃ありしと歌の爲お見せて晦日とはおれたる成へしさらば紀
氏の道もさりあへその歌も同じ心なればいつの日としるして落花の頃と見すへさおの
しこにはさる事なきおも今の詞書は春と惜む心ともおねたる證也といはんおなほ然ら

そ彼志賀の山越めて道もさりあへす花を散けるといへるは全く女の群くると形容せる
あらんには其まとの花はちりもちらすも強てあつらさめればもし其時二月の末三月
のはしめるとならんと其實ならんおらお書するさは歌のおもての花を散けるといふお
時たおへるこちしてふさはしおらす聞おへしされは大やろ落花のうたの中にいれて
只志賀の山越めてとしるされて其日とはおれさりし成けん此心つらひ撰集の上にお
はく見ゆる常の事也もしこれも實お春たけて落花の頃ならませは其日とも書出て此
前後おろ入らるへき又今の歌も其日もし落花のころあらそは只花つみよりおへりける
女どもと見てとのみ書て彼志賀の山越のあたりにお入られんよく思ふへし
○遠鏡に一本くちツチユク花コトニといへるは非也花の木ことおといふ心とちる花
とおといひて聞ゆへけんやさては、おなくたくふとも受おたき事也散花とにといへる
ちりゆく花ひらとさおん事論なきとや

やよひのつこもりの日雨のふりけるおふちの花と折て人につらはしける

なりひらの朝臣

ぬれつゝそとひてどりの年藤のうらよ春はいくかなもあらしと思へば

按するふ月の一日とついでに十五日ともち三十日とつこもりといふより當時うつしては凡上句とついでに中句ともち下句とつこもりとやうお推こめてもいひならせりさるは二日三日とついでにちる十四日十六日ともちの頃廿八日廿九日とつこもりたなといへりしやうやくにおし移れるもの也されど猶ついでにちる日もちの日など日とろへていふ時はもとの期望當日の事と成て他日に及ぶ事なし語勢しあり此詞書もやよひつこもりの日とあれは本のつこもりにて即ち晦日也上の花つみの詞書もこれお同しく次なるも歌お今日のみとよめれば此末の三首は皆盡日の歌なる事論なし上おやよひのつこもり方どあるに混とへらさずさて歌は業平集にぬれつゝろしひて折つる藤の花春はけよとしりさりと思へばと有と正しりける此業平集は此集中なる朝臣の歌のさきりと書あつめたるは論なきものゝされとそれやめて古人のわざにして古本のと書ぬきたれば謬らさるもの也今の年の内に春はいくらしも云々は伊勢物語より入來たるものおて端書おる部立にも更お叶はさるとやさればそ物語にはつこもりの日とはせずやよひつこもりお其日雨はふる

にど書おへてつこもりの内なる或一日とさしてとわりと合せつゝ濡つゝろしひて折つるといへる句調何となく佗しけにも聞ゆる方より衰へたる家としてたのきに奉りて世お類たる歌とせるなと例の漫りお興したるもの也さるとも辨せするののみ彼物語と朝臣の自記るといへる妄説おこなはれて終に彼と採て此集に摺入せるもの少らぬにいたれり其謬はことゝ其所お辨せると見て物語の取に足さると知へき也借歌の意なつゝしき春も今日おさきにて明日さへあければ雨の晴間も待あへそぬれゝ手折つるといふいひて春の内お見せまはしきの意也しやとらひ難き心と事もなくしひて折つるといへるいみしき也風躰抄おもしひてといふ詞とたも詞もめてたく侍る也とあり今本の如く春は幾日もといはんにはしりせまれる語調もるひてつこわりさへ聞えすさる余日あらんには雨にせまりて手折らととも有なんあは明日と待んも遅ららし

○餘材おやよひも今日はのりなれば春の別れ花の名殘取あつめたればぬれつゝしひて折つるといへり云々打聞も一歳の間お春は只一日に成たれば春の別れ花の名殘取あつめつゝ思へば濡るともしひて折つると云贈し也といへる共に非也幾日もあらしは幾はく

の日數もあちぬにてあつふるにたらぬといふ今日おせまれる語にあらそこれと今日はあつた、一日あつ聞へきならんや常おもいくらもなしいく程もあらしなどいへるはせめてもすくなきといふ語おて是きり是はありといふにはあらざる事也又春の別れ花の名殘と取あつめて思へはどてしひて折とる事いゝことわり聞えぬ事也立さらて見んなとやうの心には云つへしこはさはりの盛と花の時なる春の内にもみせてやみなんぞあたらしみたる雅情也

○打聞おやよひの晦日とせまれるとは年の内に春はいくのもなとあるひて云たるを限りあつ上手のしわざ也といへるは非也一日とあるへて幾日といはん事たえて有へうもあらしせまれるはせまりもるふはもるへきころ當然の眞心あらめ上手のしわざといへる何の事ともしられず

○遠鏡お春ハマタイクカモアルテハ有マイモウ當年ノ内ニハタツタケフ一日ナラテハ春ハナイト存スル故ニサといへるは非也これもいくのもあらしとしひて盡日にときなせり春は幾日もの間に未の語と加へ又あらしと思へはマアルテハ有マイと打のへし又

春はいくのもとタツタ一日ナラテハと云たのへなど意おまのせて説るの故お歌の本意聞えざるはしはらくおきて更に又いゝなる心ともわのれすもとより春はまた幾日もなしといふ語世に有へきならず更にとわりなき事也しはらく未の語とすて、春ハイッカモ有テハアルマイとく意ならんには春はいくのもあらしはころあらしとなくしてはあはそ又モウタツタケフ一日ナラテハ春ハナイト存スル故ニの意ならはひと日なててはあらしと思へはなとなくしてはあたらそくも違へる詞としも似つへうよせ合せて俚言にさへあやどりのいへればふと打つけにはさるへき意のとも聞えとふへければわつ前に其實と推せば語意も語調もよく呼はさるもの也後なる物名お今いく日春しなればといへるは同じ語なららこは語勢急おして句調とあればやめて晦日の事也さるるとさへモウ春ノアヒタハ何ホトモナケレハトゆるやうおとけるならずや畢竟今は端書と歌と違へるとしらて強て其意おなへんとするの故お諸注さまくくに解滅ひてあらしぬ事ともいへるもの也

亭子院の歌合お春のはてのうた

み つ ね

けふのみと春を思はぬときたにふたつとやすき花のかけかは

この亭子院歌合と昔より延喜十三年とするものは謬かて實は十二年也此歌合の夏部に郭公後のさつきも有とてやなうく卯月とそくしはてつるとあるは閏五月とよまれたるなり其うるふ月は十二年ふあんなるともて十三年ならざる事と證らむへし歌の意明らかし

古今和歌集正義卷第三

夏歌

題しらす

よみ人しらす

我やとの池の藤あみさきにけり山ほととぎす今ヤいつかきあうん

このうたある人のいはくさきのもとの人まろる也

結句六帖に今や來なかと有る正しあるへき今は萬葉卷十フナガサミヨナヒシツメヘコトアシヒキ朝霞棚引野邊足柏木乃山ノセキナ公鳥キヌイシカ何時來將鳴キナカンといふ末句に全くひとし萬葉のは霞たな曳はるの野のいまた夏めりぬニ郭公ニとおもひ出ていつのはと其待とはさ心といへり今の池の藤なみ咲にけりは郭公のくへき節ふむのへると打驚けるみれはいつのと打歎くへきにあらす本の句の勢ひあるふも今や來なると應すへきと聞知へし萬葉卷十八フナナミ敷治奈美能佐伎由久見フナナミノサキユキヨクミ禮婆保等登レバホトノトノノトノ藤須奈フナスナ久倍吉登クハキトノキ伎爾知可豆キニルチカマメ伎爾家里キニルチカマメといへるにひとしき意はへなからこれは三月廿四日の詠なれば近付にけりといひ今は夏あさへのれるなれば今や來なるといへるれのつららのけちめふて昔のけしき今も見ゆめり山郭公は山の郭公山なる郭公といふ意はへにていま

郭公とたにいへは山郭公と差別なくいふ類ひにあらそ萬葉中郭公とよめる歌百二十三首
お及へと山郭公といへるは四五首に過すしよよめるは必山の用ある也今も宿の藤なみに
むのへて山の郭公今やと待わたる也八代集までは大方さる心と用ひたるの多し此鳥時く
れはもはら里にも出て鳴ものより更に鶯などの類ひお打馴て日数とよまるものならぬ
山の物として山郭公とも打まのせて呼ならせる也藤なみの事は春の部にいへり
うつきにさける櫻とみてよめる

紀としさた

哀てふてをあまたにやらしとや春よおくれでひとりさくらん

餘材云花と見て人のあはれとめつる詞とあまたの木にやらせずして我ひとりいはれんと
てや春はさのて引さのりて夏ふなりて此木ひとり咲ぬらんと云心也と云りさくらんに
櫻とさかせたり卯月は萬葉おも宇能花能佐久都奇多知奴おもよみて其ころ此花さけれ
はしのいふ也卯花はうつ木の花とつゝめいふて此木その中心空虚なればうつ木とよへ
るなるべしあはれは只あはともいふ又あなともあやともいへり嗟嘆とへき事には歎ひお
も悲みおも或は愛るおも驚くおも大やういはさる所なくいと廣き語也あはれはあはに禮

の言のうへる也らりるれるは其言とあその聲にてあゝる所に用ふる事多し委くいこゝに
いはす古語拾遺にあはれい天晴の意也と云る妄説出てそののみより然思へるも少ららず
感ふ事なうれ

○遠鏡あア、ハレ見事ナト云其詞ヲ云々と云るは非也あゝと云もはれといふも歎辭お
てそれとたゝみて云也といへれと覺束なしはれと云歎辭あるへきならんや

題しらす

よみひとしらす

いしちまよひ山はどしとすすうちはふき今もあかあんこそのふる聲

山おこもりて五月のみ待ん事のは今も打羽ふき出て鳴なんと云也彼の聲は諸鳥おすくれ
て高くいと清亮たる中に物なつらしき余韻さへ有て聞人忘れ難く耳に残れるこゝちせる
也よりて今もとり立て去年の古聲といふ次にも去年の夏鳴ふるしてし郭公それのあらぬ
か聲ののほらぬとも云り菅萬にいくつ夏鳴のへるらん六帖にいくつ夏の聲に立らん後
にも俊成卿の聲は枕お有こゝちして慈鎮和尚のぬぬめさまそ郭公哉など皆身に入通る
のれの高音と形容せるもの也さる方より多分昔と戀るつまともなれり

○打聞にこの鳥は去年の聲のまゝも變らぬ鳴故に古聲とは云也といへるは非也いつれの鳥の年々聲のよはるべき

○遠鏡ふ去年ノ残りノ古聲ヲ出シテトウソ今モナケカシといへるは非也こは去年鳴盡さずして殘しかきけん聲あるへし其のこりの古聲ととり出て今なるなんといふみやさる事歌の上のみえぬのみならず事のみならずやこは只去年さし古聲と今もなるなんといふて六帖にも即ち紀氏郭公去年のふるこゑさくうらあはれむらしのかもはゆるのななどよみ給へり又云打羽ふきは真葉に打羽振と書て羽とよると云此譯はあきのよろしといへるも非也大やうは鳴んとする時いつれの鳥も羽ふきとるより真葉も羽振鳴志盡ると云れと今は打しつまりて時まちせると催したてゝ云るなれば此打羽ふきは羽刷ひして打出ん方おもたはら聞なざるゝ也さるは其羽ふき鳴りたらと打見て常いへるとは語調おのつら異にして後撰の打羽ふき飛たちぬへし天の羽衣なといへる形容の方に近ければ也さるは此打羽ふきは自然のけしき見えて此一首の力ある所なるといたつらに見なして解さる方よしとまで思へるは例のとわりのみにつき

て語勢と忘れたるの謬也

伊 勢

五月とはあまもふりおん郭公またしほやの聲をきりばや

讀人しらす

さつさまつばあたち花のかとつけばむかしの人の袖のかそとる

たち花の或説ふたちま花といへるのはふりたる也さるは垂仁帝の御時田治間守の常世の國よりもて歸りし樹なれば也といへりさる事みや猶考ふへしさて橋はるののみ原野はもとより人の宿々も有て常に見はやせしものみて今の梅などの如きありけん句ひの殊れたるは更也其花さよく其實あてなれり植物の最上とす今は都あまれらめて昔の事情さとりえのたし萬葉卷二橋之蔭履路乃八衢爾云々卷七阿婆乃野之花橋之殊爾拾都卷十橋之林乎殖云々卷十三花橋乎末枝爾毛知引懸云々或は橋乎守部乃五十戸之なと枕にさへいへるにも世も多きと知へしわきて花橋としもいへるは其橋數多き中此一種ことおも花のうるはしければ也歌の意五月と待出て咲句へる花橋の其香とけり昔なれつる人の袖の

うつり香うると云此五月まつは上の五月まつ山郭公と云とはたのひて常に五月と待得て咲なる大やうと云りさて彼の咲ちる四五月の頃は何となく世のけはひ物なつゝしく木草のわさとならぬ匂ひ雲風のきはやのなるまてうらふるゝつまとなりて今更めく物思ひろつくめる百千鳥囀る春お咲出らん梅の匂ひの花やきたるとはうらうへにて花橋の打しめりて人香なつゝしき薫りの實景と見知へし物盛んなればやめて衰ふる氣の下に催す天地のあしなる自然の時候也けらし

いつのまに五月きぬらん足引のやまほどよきすいませあくある
けさきあきいまた旅あるほどよきま花たちはかに宿ばからなん

郭公は山より出て里には住なれすいうのはしう飛めくるさまと旅のけなる人の上と思ひあして古より多く旅のありさまふ云り蜀帝の故事も彼の羈旅のさまより作りよせたるもの也其旅のさまに付てのくもあもしろくいひなせり

音羽山と越ける時に郭公の鳴と聞てよめる

さのともものり

おとば山けさこえくれは郭公こそまはるかにいませあくある

音羽山の曙お至らんは夜とこめて都と出たる也やうく明わたれるころこもとある梢高うふり出たらんけしき思ふへし彼は高く飛ものあれば好みて喬木にやとる也萬葉卷十木高者曾木不植霍公鳥來鳴令響而戀令益また夏山之木末乃繁爾云々六帖お足曳の山の梢し高ければ鳴ほどよきすこゑはるの也あとも多くよめり又さる明方と時となく也萬葉卷十八乎里安加之許余比波能麻牟保登等聽須安氣牟安之多波奈伎和多良牟曾また保等登聽須麻豆奈久安佐氣など舉るにたへも

郭公のはしめてなきけると聞てよめる

そせい

はせしきまはつ聲まけはあちきあくぬーさたまらぬ戀せらるはた

彼の初聲お人なつゝのしうなれる也昔今誰となく思ひ残さぬ感情のおこれると主定らぬといへり二句素性集六帖等お鳴こゑまけはとあり是を正しめるへき初聲は詞書にのつりて歌にはなく聲と云りさる方しらへのとのへは也時鳥なくはつ聲おと云にはたのひて時鳥はつ聲と打つけにいはんはたはぬ心ありてのつ古歌の跡裁お非さると聞知へし又歌にはつ聲とあらんおは初て鳴けると聞てとは中々書へおらす集中の例と推て知へし後世

一首の上あろなへて人のきゝとてらふ類ひあらずあちきなくは春の梅の所ふ云りはたは活動のすみやけきと云てにはにて今こゝなる物のやうてのしこふうつり今白き物の忽ち黒くのはるの如きと云也今も何のこゝるあさの忽ち人戀るふうつると云あちきなくまてのゝれるはた也句頭ふはたあちきなくとはかゝて語尾にかくはすみやけき勢ひのおのつらしめる也よりてはたは句中句末ふあり萬葉ふはたやはたといひはたやこよひもなど云るは別に論あり

○遠鏡お時鳥ノ始メテ鳴聲ヲキケハオモシロウハアレモ又サ何トナウ感情カオコツテ無益ナ其人ト定マツタ事モナイ戀コ、チカナル又云すへてはたは又也此歌なるは三の句の頭ふうつして聞へしおもしろけれとも又の意也と云る皆非也鳴こあきけはあちきなくといへる面しろけれといふ意と入て聞へき句調ならんやこは彼の悲哀のこゑお感情の發れると一筋おいひおるせるもの也聞知へしつれもしるき聲なれども又悲しき聲也といふとわりあらんや云ふたらずこは結尾のはたと又也と思ひとれるより強て其またの意おとさなせるもの也または物のそひ重るる語おて形お付ても木の又人の

股おと思ふへしはたは活轉すみやけき語にて物おつさてもハキハキハキハキハキ箴機釋靈活動など見るへしされいはたまたは立おはると立ならふと云はりの違ひ有て更お其心ひとつならとされとまたの速やのなるとはたの緩やのなるとたまゝ語調の似たるより新古今の頃お至りてはふとはわいため難きも見ゆめれはのく感ひたる説も出くる也委くの外お辨せり

ならのいろののみてらにて郭公の鳴とよめる

いそおかみふるさみやこほとよきす聲はうりこそ昔なりけれ

願注に云この歌の詞お奈良の石上の寺おてどけける詞こゝるえす奈良の都は添上郡也石上は山邊郡也いづくは書るおや後撰おも石上ならの都の初めよりふりおけりとも見ゆる衣の又石上ふるさ都とよめるは彼石上お皇居再ひあれば云れたり安康天皇石上穴穗宮仁賢天皇石上廣高宮いろの上の寺と奈良と云ん事いはれすやと云れたるはさる事也紀略と按るに素性亦善倭歌云々住良因院とあり又紀氏の集に素性失ぬと聞て躬恒のものとみれくる石上ふるさ住てし君なくて山の霞は立おわふらん躬恒返し君なくてふるの山邊

の春のすみ徒にこそ立わたるらめとあるふ又消にきと身こそ聞えぬ石上ふるき名失ぬ君
 あり有けるらくわれは石上にて終焉ととられし也さて今本ありのりみてらとの文字な
 きはあやまり也袖中抄ふ三所顯注に二所までいそのりみの寺とのりれ密勘ふも奈良の石
 上と二所まで書給へりもしいうのりみてらと寺號のとく有けんには寺の字とのりれさる
 いはれなしされは古本の古今集には石上の寺にてとの文字ありし事うたのひなし古今抄
 の刊本に顯注の初めのいろのりみの寺ふて云々といろのりみ寺にてとの文字と脱せるは
 今本の詞書に耳なれてふと書たのへしもの也とて刊本は寫誤甚多し古本よるへしは
 はいへ其良因院石上ふわれは俗には石上寺ともよひつらたとへは元興寺と飛鳥ふわれ
 はあすの寺といひ法隆寺と斑鳩にわれはいろの寺なといへる類ひ多き事也やうて後撰
 ふは石上といふ寺ふまうてといひ古今目錄には石上寺之名良因院也ともいれたりさ
 れと此目錄は今の古今の詞書によりてしるされたるなれば證とはしうたしいつれ今は正
 しき方あつきて石上の寺とは記されし也さて按するにこの石上ふ奈良としも冠らせたる
 は決めて後人のさのしら也當時ふるき都の昔としのふなといへは大やう奈良の外ならそ

且詞書とはなれて見れば初句の石上も普通の枕ふ聞えていよ／＼其方に思ひあさるゝよ
 り其ことわりたゝさるゝも辨へそ意にまうせていろへるもの也集中此類ひ少とせすもと
 は只いそのりみの寺ふてと有けん其寺は即ち良因院也さらは石上の良因院にてと書へし
 と云んふ然らず先春の部ふていは／＼西大寺の柳と見てよめる渚の院の櫻とみてよめるな
 ど奈良の西大寺片野の渚の院とは／＼さる也其外の端詞も國と舉れば所としるさす所と
 ろけは國といはと集中みな然りさるはつとめて繁文といひしものふて此集の文法也心
 とつくへしされはこゝのみ石上の良因院と所と重ねて書へきふ非す只集中雜部に津國須
 磨と云所云々と其國とわけ比叡の山なる音羽の渚云々と其所としるせるの二所あるのみ
 こは其故ある事其所にぞけり然らばこゝも例ふまのせて只良因院にてと書へきなれとさ
 は世にあまねく聞しりたる寺ならぬの上ふ歌ふ石上ふるき都とよめるは常の枕詞の例ふ
 聞えていつくの舊都とさせるにやと聞まるとふへき筋もあさふあらねは石上の寺にて云々
 と常の枕あらぬと思はせてよのらんほどに心と用ひて書るもの也又密勘ふ是は玉鉞の道
 足曳の山と申様にふるると云文字あつきて石上とよみて侍り詞ふならのいろのりみと書る

古き人は思ひのけぬ横入ふ力と入侍らて奈良と過てまのれは遠のらぬに思ひわたりて奈良の石上と書て侍也不及不審云々といたく願注と破せられたるは詞書とのみ守りて歌とは疎るのに見られたるものにて中々のひの事なるを衆説これに従ひてつひに謬とつけし也石上の舊き都ふ在て時鳥とさして石上ふるさ都の時鳥とよめるお何の異論といふへけん是と石上にあらす奈良の舊都也と云るは又何の事ともしられと石上はふるの枕なればしこの置て其枕の石上やうて住所の名なる事とうらに聞せたる歌の意と儘にせんとてろ詞書ふ石上の寺としるされたるふて即ち上ふ舉たる紀氏躬恒と贈答の歌ふ石上ふるく住こし石上ふるさなうせぬなとよみ玉へるに全くひとしき心はへある事論なきとやさりともろののみ奈良の都のさのんありし時にわたらは其餘澤石上わたりまても及ふへければとる所とわされて奈良の遠きとも思ふらん事有ましさふもあらそ又たどひわれたらん後なりとも花紅葉などの面白のらん上ふ付ては類ひなき全盛なりしつたへの奈良とも思ひよすへき事有もしつへし今は布留の山寺ふこもりあてさしも怪しき時鳥のこゑとさしたる也穴穂廣高の都人こゝふして聞つらん昔のけはひ思ひやりても忍はさらんや上ふあち

きなく主定らぬ懸せらるとさへよめりし人也況や穴穂の昔そのそめらみこと眉輪の王ふ弑せられ給ひしこのし御代の亂れよりやうて其眉輪の王と始め白彦馬彦の二皇子たち大泊瀬の皇子に殺され給ひし事状のあちなき又圓ツラギの大臣オホミの妻のふみの子のたへの袴とと歌ひしおなしみも忍ふお余る語り草ならずや何うはこゝなる今の哀と捨てのしこなる昔のさのえと思ふへき其所其時其物おつきて意とはやりて知へき事也今は在納言行平卿の家の歌合ふ小夜更て布留の都のはとささかへる雲井お聲とさのせよとあるお全く同じ意なるとや然るお奈良とささてまのれは遠のらぬお思ひわたりて奈良の石上と書て侍る也不及不審と云れたる却て不審の事也奈良とささてまのる石上なればとて其すさし奈良と引よせて石上舊き都と云へき謂れ有へうもわらし石上の舊都にて石上ふるさ都とよめると思ひのけぬ横入ふ力といれしといはれたる更お何の事ともわのれと石上ふ在て奈良としもよめらんころは即ち思ひのけぬ横入といふへしおへとくも此論筋なき事お侍る也ひとり願注の説わたりと云へし

○餘材云此石上ふるさ都とつへけよめるは安康天皇の石上穴穂宮仁賢天皇の石上廣高

宮の昔と忍ふあらず是は奈良の京のわけての後の心也されは其心とあらはさん爲に奈良のいろのあみ寺にてとは詞書とはしたる也と云るは非也此石上舊き都とあると穴穂廣高の兩宮と忍ふにあらずと思へるは詞書にはあられたる也いかに歌の心とあらはさん爲也とて奈良にてもなき石上とならぬのいろのあみと書へきならんや又云元明天皇和銅三年に藤原宮より平城へうつされて光仁天皇まで七代の帝ましつて全盛なりける所なればそへてしたへる歌多き都也さて石上ならともよみ又奈良と布留と讀合せたる歌もあり六帖には古里と成りしならの都にもといふ平城天皇の御歌とも石上よりもしならの都にもと載たり後撰石上ならの都のはしめよりふりにけるとも見ゆる衣の詞花集雜下又千載集神祇に再ひ入たる歌上東門院三笠山として來にけり石上ふるさみゆきの跡と尋ねて曾丹集お春雨のふるの都の花見ると三笠の山とさしてのみこそ此曾丹あうたは奈良の都と即ちふるの都とよめり云々其あはひ幾はくも遠のらす況や奈良の都の全盛の時は大方つゝきても侍るへければならぬ石上ともいそのあみならともつゝけていふ事あやしむあたらず侍りけんと云る此説皆非也まつ第一ふ擧たる後撰の歌は

とのる物と取ちのへたるよあさみたるたはれ歌にて地理の上なとにのけて引出へきふ非す況やこれは故さとのならの都の昔よりなれぬけりとも見ゆる衣のとある歌おて發句ふる里のなると石上とあらためて奈良の都お冠らせみたりに今の證とせるはいの一四句のなれにけりともとふりにけるともとさへるへたりとは顯注お此歌と暗引たのへられたると正さとして其體引たるおや石上にもあらぬ奈良と石上奈良とつゝけたらん古歌有へうもあらしいつれ杜撰の甚しきもの也顯注に此歌と引すてられしはこれも一つに不審の部おいてとらざるの意なればたのへらんも更お答なし又第二に擧たる三笠山の歌はいはゆる上東門院の後一條院春日の社行幸の時一條院の例と思し出てよませ給へるにてこの石上は只ふるさくと云ん爲のみ地名とさせるおあらずされと石上の枕詞もど此地名より出て三笠山ちのくのけはなれぬゆるりわれは同じ枕も心ありとは云へしされと歌のなもては萬葉に石上ふるとも雨おさはらめやとあるに等しく只ふるると云んの枕也と知へし又第三ふ擧たる曾丹集の歌は春雨のふるといふお三笠の縁と求め出たるのみにて更お地理など考へたるにもあらずともより是はふるの都とあれば布

留の都の花なる事論なし奈良としもいふて布留とはいふへけんさるはたとへは比叡の山とあらんと愛宕の山と聞とるへきにひとしきひの事也さらは又いふて三笠山とはよみ合せたりと云んるそはこゝより思ひやるなれば布留へ行んふは春日とさして向はんに違ふましければ三笠の山とさしてといへる也譬へは石山に詣んふは天津とさして行へく比叡に登らんには雲母とさして向ふへきならそやのく正しもて來ればことく附會の臆説にて奈良の石上とも石上奈良ともいひし證明更に有事あし奈良と布留ともみ合せたる例すらもなくなり侍る也是とあやしむふたらすとさへ云るは何の事う只奈良とある詞の疑しきと決せんとして其證ともとむるに其證なければあらぬ歌とさへ強ても引るもの也うたのはしきは只疑ひかくへき物とや

○打聞お是はもと山邊部の石上の京に在し石上寺と後お奈良の京お遷されてなら石上寺といへる故おわけて云りといへるは非也さる事ものに見えたる事なし恐らくは例の間とわたその妄説あるへし

○遠鏡お石上寺は山邊郡石上にあると奈良と云る事は今の京にては石上のあたりまで

とも廣く奈良と云ならへる也譬へは今の世お丹波國なる愛宕山とも他國おては京の愛宕と云る類といへるは非也皇都と今田舎より京といへるは大よそとさす稱にて山城一國にわたれりさるは山城にならば入立たる愛宕山なれば京の愛宕と云ん事更に強言ならそ山城の愛宕と云にひとしければ也さりとて撰集ほのり正しおらん書に京の愛宕山城の愛宕なとしるすへけんや所と記すお至らは必丹波の愛宕と書へき事論なし又今うつゝに敷ませる皇都ともて舊都とさせる例お引るも類としらさる也のけまぐもつしこければ設けていはんに今の皇都と他國お遷されたらん後ろの後の都よりいはんに平安の愛宕とゝなへんや甚おはつゝなしこの例ならては奈良の石上おは叶ふへらぬ也今じふとしく榮えませる大都としも他國より云んにはいつくとも殘すへき京の御室京の伏見京の小栗栖などさへ常にいふゆりされは奈良のさるんなりし時おころ廣く引及はして奈良の石上ともいはゝいふへけれ其都おとろへて後今の京おいたりてしゝいひならはん事いゝいと有ましき事也又山ともて石上の例にいへるもかゝはず山はいつくよりも見ゆる物なれば近く見あふく限はこゝもとの心ちして其所に引付ていへる近江

の比叡と都の富士などいはんは更也猶へたゝるとも引よせてしたしみいへる類ひ今も
いと多し古くも菅原に鹿島なる筑波の山など云り類推すへし

題しらす

よみ人しらす

夏山になく時鳥こゝろあらば物おもふわれにこそあまきかせぞ

はじしきを鳴こゝろあけは別れよゝふるこゝろそ戀かりける

時鳥のなきおくとさけは打つけお其聲の物なつゝしく暮はるゝのみならて別れこし故郷
の空さへ更お思ひ出ても戀しきと云こは旅ふ在てさゝしにてまきの主さたまらぬ戀せら
るはたの意はへ也

○打聞お是は旅にして物思ふ時さけばいよゝ故里とを戀まざると也といへるは非也故
郷さへとあるといよゝ戀まざると解へけんやこは其聲とさゝて今思ひ出たる也

○遠鏡に時鳥ノ鳴聲ヲキケハ感情ガオコツテハナレテキマ前カケノ在所ノ事マテカナ
ツカシク思ハレルワイといへるは非也故郷さへとのさへはうひ加れるてにははあれば
其本お戀しき物ありてならてはいはれず在所の事までいと云るまでの語は何にうけた

るにや更に其ことをわり聞えざる也

郭公あかあんとこのあまたあればなほうとまれぬ思ふ物から

おもひいつるこさばの山のはじしきすから紅のふりてゝそなく

初句の思ひ出る四句ののら紅はとさばといひふり出てと云ん枕也畢竟常盤の山の時鳥ふ
りてゝそなくといふ也常盤の山といへは縁ふりく聞ゆるおら紅と打あへるゝ自然けし
さありてしらへの句ひとされるもの也戀の部の常盤の山の岩つゝしも松陰などお咲出ら
んつゝしの紅を思はせたる序也と知へし振出てそあくは俗にはり上て鳴といふにひとし
昔は常にふりてゝといひし也

○遠鏡に戀シイ人ヲ思ヒマシタ時ニハ聲ヲアケテサワシヤナクワイノといひよて云此
歌はもはら戀の歌なるとこゝに入れるはいのにそやといへるは非也こは時ありて物と
も人とも思ひ出る事あると常盤山の枕として次にも思ひ出るときはの山の岩つゝしな
といへり此思ひ出る時はと昔より歌の心と思へるはひの事也然さゝたゝへるよりこの
歌は更おもいはと後なる戀の歌なといふおも聞えぬ事とみれるもの也委く其所に辨

せり今も戀しき人と思ひ出る事と思へるより是れ戀の歌と意得てこゝに入れるとら
ふのしみたるは古説ふよれるの謬也これと打聞ふ時鳥の妻こひしく思ひ出る時とせる
はいよく疎妄也

聲はしてなみたば見えぬ時鳥とかこるもてのひつをからなん

是は梢なと飛わたりて啼と見つゝよめる也とらては泪は見えぬといふ入るにあらざるの
鳥大方はとひのけりてやすらはぬものなれと又とよまる時は時うつるまてもありて日ぬ
るそも鳴くらす物也萬葉なにもなる氣色とよめるも多し

足曳の山ほととぎすをりばしてたれうまゝとてぬをのみそ鳴

こは山のしけみのとちこちにてこゝらとりはへなくと鳴くらするもままよてよめる也山
とよめて鳴聲けにしるるもの也とりはへのは心はへななどののは入にて居る事とまど
す大よそにいふ語也なるは居延ユルヒノの意ならんらに其延と長居とるやうの意にとる事な
るれ時鳥の上にていへはとりは梢なとにままりるやうの意とりはへはそこら立さらぬ
といふはより輕重のけちめある也とまはへの言ひはひはみともいひ轉してはまひなひら

ひなど猶くさくさ活用そといへとも本の意はたのふへらす引延る方より語勢よわ
りて其こゝろ薄らくのみ即ち心はへは心のやうすとらふてあつて心とすとはいと輕
の如きと推て知へし委き事は外にしるせり

○餘材にたれのまさとては時鳥の物おもふ人おくらふるやうになく心也といへり打
聞遠鏡等これお隨へる共お非也其物思ふ人の上ともいはずしてたれのまざるとのみい
ひて然きこもへきものならんや誰のといへる人めさて聞ゆるより思ひまをへるもの
也孰れまざるといふにいとものほたる事あてると誰のといへるのれもむき也
されは是は聲くらへとすする心にて悲しみて泣の意にあらず又遠鏡にとりはへは時延お
て時長くつゝ事といふ詞也といへるも非也もととるといへるはそこにもよまるの意
なればおのつゝら時うつる方おはなれるものゝらこの延の語に時うつる意あるには非
そ又とりは時の意にはあらざる事など本注お辨せるの如し

今さら山へおくるお郭公こまのかまりはわかやとよなけ

みくおのまぢ

やよやまて山ほとくさすつてん我よの中にすみ詫ぬとよ
歌の意明らかし

○遠鏡ハワシハモウ世ノ中ニ住アツンタワイノといへるは非也是は我世中お住わひぬ
と言傳んと末より三句にのへる也とよのよはよと呼のけていふこゝろにて初句のや
よのよと再ひいひのへす意也とよワイノと解ては言傳んとのへり合さるもの也さる
と打あはせんとしてサウ云ヲタモの言とそへたれと此一首然もるひて余意と殘との語勢
にあらそ又サウ云ヲタモはことつてんを同意なるとや

寛平御時ささの宮の歌合のうた

紀 友 則

とみたれに物思ひとればほとくさす夜ふかく鳴ていつち行らん
物おもひとれば夜ふかく鳴てと打合ふ也さて然鳴ていつちくちらんと云流すにてももの
もひとれば何地行らんと結ふにあらぬと辨ふへしさみたれはひたすら雨の名のみには非
と多分時候とさしていへり六帖の雨の部も春雨夕立時雨とつゝきてさみたれの歌はな
しこれ打まのせたる雨の名あらねは也今其頃はひとさしてつゝと云にあたりこれもよ

る雨の雨とさしてのみいふならそ大やうもの、しめらひ露めくよりの名なると同じ後拾
遺お五月雨は美豆の御牧のまこも草刈はすひまもあらしとる思ふとある歌の初句と解わ
つらひてさみたれにはのふとはふけるものと意得たのへるも古お暗き也これも雨やまぬ
五月頃はといへる意にてさと雨のみとさすあらず春雨には夕立おはといふへさと春雨
は夕立はどのみ云て聞ゆへけんやは拾遺にさみたれは近くなるらしさみたれはいこそね
ふれねなとある同じ意也只雨とのみ見ても事なき歌あるに付て思ひわく人なき也後撰お
この頃はさみたれ近み時鳥思ひ亂れて鳴ぬ日そあき五月雨にはるの宮人くる時ははと、
さすとや驚おせん五月雨あめくらすせる月なればさやのに見えと雲のくれつ、六帖に
五月雨と事なしひつる時しもろ人お櫻の花は咲ける此等みな只五月といふ方にのりて
雨とせとせるあらず又躬恒集お郭公なく五月雨のみし夜は月のけさへるともしかり
けるさみたれのためそれとよの月のけのかほるけにやわの人とまつ五月雨の月のはの
のふ見ゆるよは時鳥たにさやのになけ願集お身とつめは物おもふらし郭公なきのみま
とよ五月雨の晴など猶擧るにたえすこれら春雨の短夜春雨のためそれ時春雨の月春雨の

暗などいふへきにはむらさるとおもふし

夜やくらき道やまはへるほとくきす我宿をしもすきかてよなく

大江千里

やとりせし花橋もかれなくになどほとくきすこゑたえぬらん

さのつらもき

夏の夜のふすかどされば郭公さくひとこゑにあくもしのゝめ

初句題本に夏のよはとあるそ正しき密勘ふも同心のよし宣へり夏のよのとあるはいろに
すとも聞えざる事也もどより寛平后宮歌合に夏のよはとあれは異論更になき事なること
は菅原の本に一たひ書あやまてるより六帖ふ是とうつしつきく子細あるへう思ひなり
て此集とさへいろへるもの也と知へし志のゝめは明るといふの枕詞めて戀の部もしの
ゝめのほらしくと明めけはなとふるさすのたふ見ゆれば萬葉に稻目明去來理とよめる
同じ意の枕詞て並ひ用ひたるへしいなのめは寐之目也しのゝめはしなひたる目にて即ち
いねてふさける目といふ其いねてしひたる目は必あくものなればあくの枕とせる也當時

も兼輔集ふしのゝめのあけくれ君は忘れけりいふともわらぬ我を悲しき信明集にし
めのあけさりしのは夜もすのらまきの戸よりは立のへりにしなどありさて其明るは夜の
明もくのみ大やうつらひならせるうへに寝たる目てふ枕の心もしたしきよりのひにし
のゝめと明方の事とも當時よむ事になれりし也さるは玉垂は緒の枕なると小籬につらひ
ならせるより垂の語もゆりありければつひには玉垂と籬の事ふよみなせる類ひ也さは
いへ此寛平延喜の頃はれのむさくによみて明方ふもよみ或は古へと守りて只あくる
の枕にのみつらふもあめりと見も今も玉垂と籬にもよみ又古へつきて枕にのみ用ふる
もあるら如し此後享子院の歌合に頼基しのゝめにれきて見つれば櫻はなまたよこめても
散にける哉とよめる判の詞ふ此右の歌とみよとのおぼせられけるやうねめとするくは
あどみけむとあ行へいふおやどのたまはすればさたのたのあろんのほるのあそむのよと
こそたにどおほゆれとそうしければ御こきよにてさらはどてちふなさせたまふなりと
書れたり此判の心と按そるに歌ぬしの心しのゝめと明のたの事ふよみとあたるとののも
どの心にたのひたるともとのしみ給ふ御心よりしらすのほにやはら枕の意の寐たる目ふ

して寐はけたる朝目とそりく、打見けんを嘲けらし宣へると定方朝臣昇朝臣の兩郷けに
これは仰のこく夜床姿にこそと覺え奉れと打合せてあされ奏し給へれば却て興有るとあ
りて持になされたりと云心也これふても當時のしの、めのふりと推はるへし此文の内
あ行へいふおやと御こきよふてとある二所さらによみ得られたれと今は大やうの心はへ
と引とへて解試み侍る也さて紀氏の鳴一聲に明るしの、めは此類基の歌に均しく明方の
事に打まらせてよまれたる也やうて亭子院有心無心歌合に柵はたの我にあふ夜のしの、
めのみえぬはよりそ霧はふらまし後撰にしの、めあつて別し袂とそ云々なとあるもみ
な明方の事也されと此ころまでは枕のねたる目の心とふみてあくとの見るとのいひて目
の縁とは離れさりし也後おいたりては全く明方の事となりて即ち顯註ふしの、めとは曉
と云と書れたり

○遠鏡に初句の、文字はのの意にて結句の明るへの、く詞也といへるは非也鳴一聲ふ
夏の夜の明るしの、目と云てよらんや又初句より結句にしつゝ、く事あらんやはさ
れば然はさこえさる事也又云郭公ノナイター一聲テ目カサメタカハヤモウ夜カアケルし

の、めと打聞の如くあしたの目とする時は後の譯也といへるも非也是はいねたる朝の
目のさめたると明るしの、めといへりを見たるにやさらは只あくもの、目といふへし
あくると云るは夜の事おて目の上おはいはれす聞知へし又或説お夏のよはと云へさや
うにさこめれとのとよめはそしの、めまで心たもますいみしく一首郭公とせんとせそ
して短夜とよみふせたる心は見おるといへるも非也夏のよはとなくとも短夜とよみす
あたるとはいひて妨くへさ又心もいひてたゆむへさ却て短夜の心いみしさものとや是
みな傳寫の謬としらす解えられぬと強て解んとせるの妄説也

みふのたゝみね

くるゝかど見れば明ぬる夏のよをあかざとやなくやま郭公

紀 秋 岑

夏山にこひしき人やいりにけんこゑふりたてゝなくほとゝきす

先打まらせて山に入といふ事は出家遁世して佛理に歸るといふ當時神儒の名家といへ
ともつたはら修信せざるふければ道俗とも心ある限は只此道と終のよるへとたのむ習ひ

なるよりさる方の離別世に多くて其愛慕の歌諸集ふあまねしこの歌も夏山に打あけて鳴
時鳥の悲しきこととさして彼四月の結夏安居ツクサツアノケとたよりに世とのれ入る人と戀しむ人の
歎きお思ひよせて郭公の戀しき人や山こもりしけんどもよめる也菅真にも此歌お合せて一
夏山ニ中ニ鶯耳ニ根郭公高響入禪門とあり又六帖に我ためお何のあたこの山なれや戀しと思
ふ人の入らんなどよめる引合せて思ふへし

題しらす

よみ人しらす

こそこの夏をさふるして時鳥それかあらぬかこゑのかばらぬ

ほととぎすの鳴とさしてよめる

つらゆき

五月雨のそらもどくつるよ郭公なにをうしどかよたなくらん

さむらひあてこのことものをさけたうへけるにめして郭公まの歌よめと有ければ

よめる

みつね

ほととぎすこゑもさこゑも山彦と外になく音をこたへやはせぬ

酒たうへなどあるは月おもしろき夜なとなるへししうれは上にも時鳥まらわたらせ給ふ

よりわざと召出てまの歌おほせ付られたる也更にこよひ一聲もさこゑをよいに山彦
はよろなるひよきも傳ふるならずやのる今夜外にてたに鳴さらんや其外もなく音とた
に答てこゑに聞へ奉れいりて答へやはせぬ長くもしの待わたらせ給ひて尋常の夜ならぬ
ととさるへき方の山に向ひて山彦へよみくたしたる意はへ也山彦は今のこたまにて物の
聲にこたへて生靈あるに似たれば日子の名と付たる也日子は往古より男子の通稱也後お
この山彦お對へて山姫の名も出たれり

山にほととぎすのあさけることよめる

つらゆき

郭公人まつやまになくなれば我うちつけよ戀まごりけり

はやく住ける所あて郭公のなさけることよめる

たみね

おかしへや今んこひときほとよきを故里にしもなきて來つらん

郭公のあさけることよめる

みつね

時鳥われとばなしに卵のとなのうき世中になきとたるらん

郭公の殊更に山より出て世中あなくといふ空となさわたると年月已の啼て世とわたるに

あつらへる也時鳥の上と云んとて已としはらくやとひ出せりもとより已れはうき身に極
められた付て只主意は時鳥のさまと云くたせるのみ同人秋の部に雁とさして憂事と思ひつ
らねてのりのねの鳴こそわたれ秋のよなくと云るは似たるおもむきなうらこは鷹によ
せて専ら已の上とのへたるにて今とは賓主のたのひあると辨そへしうの花はうきと云ん
枕のみ萬葉卷十篇之往來垣根乃宇能花之厭事有哉君之不來座とあるおよれる物のら其卯
花と時あはせて時鳥の匂ひとなすの當世の序のさま也

○遠鏡にトウイフ事テ世中カウイト云テ卯花ノアツリへ來テアノヤウニオレト同シヤ
ウニ鳴テクヲス事ヤラと云るは非也卯花のは只うといはん枕なる事萬葉およりても明
らけきとや卯花のあたりお來て時鳥の鳴くらす事とおもへるはとさなしさては世中に
鳴わたるらんといふけしきにも語調自然おなはさるるもの也

はちその露を見てよめる

僧 正 遍 昭

はちを葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露と玉とあてむく

つゆのつはひとつふたつなどのつにてもとこまやのに數あるの名也萬葉卷十三劍池之邊

葉爾停有水之往方無同卷十六蓮荷爾停在水乃玉爾似將有見なと有て覆盆のとく大きく玉
となせるとはそののみ只水と云て露とはいはす六帖に蓮葉おささるる露の玉水はうのへ
る人の心ととみるとあるも露おつまりて玉の水となせる也其ためたふさまとうのへる心
どうけたる枕と知るへし今もさる露とかきためて目の、やく玉と造りあせると蓮葉の清
潔なる心ともていひてのくはたはのり欺くそといふ也常お露と其まゝ玉とみるとはたの
へり露と玉となしてあさむくの意也心もてといひ何のはあさむくといへるおしう巧みな
すの意はへ見えて力あると味ふへし後の今も其わいためとそへしと云には非す此歌はさ
るおもむきあると見すくす事あつれといふ也文集お荷、露雖圓豈是珠といへるも露おつ
まうて一圓珠とあせると云り

月のおもしろのりける夜あつたつきのたによめる

ふのやふ

夏のよはまたよひなからあけぬるを雲のいつこに月やとららん

是は始涼の歌にてすゝみ明したるさま也されは夏の末お入たり月は照ならはのららんに
明ゆく氣しき今も向へる心ちうとる夏の夜はのく雲のまに明果ぬると月、雲のいつくに

の隠れ宿るらんと云り已のゆくりなき意より月もいのにあつてんすらんとればつるなみ
たるのはなく面白き

○餘材に今宵の空はまた宵にて明れば月も常のとまりにはえいたらそして半空にやど
りてそいすすらんとおもひやりてよめる也打聞ふ月のわたるはほとはありあらんに宵
にして夜の明るなれば月はいつこにやどりて有らんといへる共非也月の面白りけ
る夜曉方およめると云るはみるく明せる納涼のさま也のく月入て後起出て空あとう
るひみたるやうのけしきあらんやは

○遠鏡にア、ヨイ月テアツタニ云々西ノ方ノ山マテイキツツ間ハアルマイカアノ曉ノ
雲ノトコヲニトマツタ事ヤラと云は非也是もいさつくまは有まいとこらにとまつた事
やらあとおほめきたるの其よき月と見さして一たひ打聞たるさまに思へるにや詞書に
違へるはいふも更也この雲のいつこは空のいつこといふあてのくれやどらん雲など立
まふへき夜のさまならぬと聞知へし餘材に雲のいつことは雲は物とへたて隠れものな
れはいへり只いつこの空にいと云心也といへるはあなへり畢竟皆書説おはうられたる

の隠也

となりよりとこなつの花とこひにおこせたりければとしてみてこの歌とよみてつ
のはしける

み つ ね

ちりをたにすきとと思ふとまじしより妹とわかぬる床夏のはな

妹とわれと二人ぬる床夏なれば塵とたにのけしおもふと手折てさへ人に見すへきやしの
疎そのなる花にはあらずといふのく惜む心と其まゝいひつのはしたるは隔てぬ中らひの
たはわさ也此歌の心遠鏡とき得たりと云へしさて端詞は歌のおもてに随ひて書たれとま
とは花とつのはしたるへしいつよりえんも同じるへきと殊さらに隣よりなるとこ
とわれるは其隔てなき中としらせたる也されはとしてみて此歌とよみてとのみありて其花
とつのはすとはなけれと惜みなららよみそへてつのはせし心下おみもと云へし六帖に同
人妹とわぬる床夏の花なればなへて人おはみせん物おはとあるはこの歌なるへし此集
えらまるゝ時優ある方になはされしならん集中此類多しこは床夏の名に思ひよせて妹と
ぬる床あれば大よそ人に見すへきならんと只其めつる心の甚しきといひて折てやらさく

としきと見せし也今は其床ふ塵と思ひそへ其塵たにすすしと思ふと人につらばすへきならんと今一層の心と加へられし也されと其塵といはんとそる方に引れてなへての人には見せしといふはしめの主意はうたはらふなりてよくせずは然は聞とり難きまてみれり六帖のは打つけのまゝなれば下るみのたは心まてあらはみ見えて中々おのしき方も侍るふや

○餘材に夏と本として常夏の詞はあるのと思ふに只常にと云心にや萬葉第十七家持立山賦にふひ川のその立山にどこあつに雪ふりしきて云々と有といへるは非也常夏は夏咲てより秋冬までもめれば然いはんは更也立山の雪も夏あるとめつらしむより夏と主おして常夏とは云る也萬葉中常夏の詞みなしより常にといふ心といひて常夏とはいふへき

みな月のつこもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひちはかたしき風やふくらん

みな月はもとより熱暑おられて水なきの名也水なき河とみなせ川など云ふ同じさる水無

月のつこもりの日よめる日しもあすなん秋のふん月也ときくに今夜しの秋と夏と行のは其秋の立くらんのたへはやうて涼しき風や吹らんと秋涼とまらわふることよりくれなん空としのもおもひやれる也

○遠鏡に云今晚クレテユク夏ト來ル秋トイキチカウ空ノ通り道ハソノ夏ノ通ツテユク片一方ハマタ暑ウテ秋ノトホツテクル片一方ハス、シイ風カフクテアラウカイと云るは非也此歌は只涼しきとのみねのひて思ひやりたる炎熱の情思ふへし夜といはて日とあるおも心と付へしされは暑き方おは其意なければ片一方ハマタ暑ウテの一句不用也しの引とりたる譯解に例せば最初にア、暑イ事哉などおきて末の余意に其涼イ風カコ、ニモハヤクフイテコイテとの何との有へし只秋夏交替の上とことわりたるものと思へるは其意と得ざるものにていはゆる歌とときころすの罪のわれざるに似たり

古今和歌集正義卷第四

秋歌上

秋立日よめる

藤原敏行朝臣

秋きぬとめればさやかけみえぬとも風のおとにそれどろかれぬ

歌の意明らかしされど秋の來たらんもとより形跡あるへきならねは絶て目に見ゆへきならどさやうにみえぬは鮮のみ見えぬみて遠き空或は霧のくれなどはのうにはみゆる詞也又秋風の吹そめん唯身み寒くおはゆるはのりの事みて耳に聞へき音あるにわらす風の音に驚くは草木としとり板戸など鳴して荒く明さま也さらはさやうみといひ音にねとるとくなといへる其情景叶はさるた似たりされども只目みは見えと涼しきみしるなど有のまゝみ述たらんより却て初秋早涼のけしき明らかうかへるもの也わやしといふへしうの本のさやうにの詞自然未なる風の音にのよへるみとすへてことわりの外に聞へき古歌のすのたみて及び難きさうひ也只み見すくす事なれ

秋立日うへのこのこともかものうはらみはせうえうしけるともにまのりてよ

める

つらゆき

河のせのすゝくもあるか打よる浪とよもにや秋たつらん

殿上人の納涼せしむ諸共おまのりて也逍遙の語は専ら莊子の逍遙遊より云ならせりと見えて打まのせて遊ぶわさど逍遙すといへるそののみ一つの詞也兼輔集にも諸共に逍遙せし所などありて俗に遊山と云るお似たり重之集お舟逍遙と云るは今舟遊山といふおひとし西の國にては今も茶道遙など云めり古は紡ぬ限りは世人の聞やすらんと言としてむけなる俗語といへどもおる公さまの文にも憚らす書れたる也後世奇と好む類ひに思ふへおらす歌のこゝろ吹くる川風の涼しきにつれて打よするとみれば此浪と共お今日の秋は立くらんといへり涼しきも浪のよるも一つの風のしわさなれば秋のたつも浪のたつも共にやと云るのおもむき也

題しらす

よみ人しらす

我せこか衣のどそを吹かしうらめつらうらめつら

余材に賦ふうらめつらしと聞ゆる歌也といへるは賦に然り秋立けん朝けなど住らん男のさる庭わたり立もとほれるとみやりてよめりしやうの事なるへしうらめつらしのうらは

うへおもてなどに對へる稱にてあらはならぬ方よりやめて心とさしてもいへりうら細しうら安の國など太古より云おれたりと見お俗に心嬉しき心面白きなど云るよく叶ひてさるは下心に嬉しく面白きおて表にあらはるゝ手ならぬは輕き方お似たりといへとも又自然眞實の意と含めは却て深く嬉しく底より面白き方ともなれる也うら若しうら寂しうら悲しおと思ふへし今もいとめつらしと云はるり中や強き方おあたれり其意は衣といはんも袖といはんも差別なければうらと承んお便りよければ裾といへるのみ只さる秋風に吹れたる人のさまなり註家此上の句と序と見たるはひる事也本の吹へしはやめて未なる初風のしわさ也とわり照應せる序の体あらんやはさるゝたによめるも古歌にたまゝ見おめれどさばやめて序歌とはいふへらと序の意はたゞへは也

○遠鏡に歌林良材集に引れたるにはわさもこのとあり新古今集有家卿さらてたに恨みんと思ふわさも子衣のすろに秋のせう吹これらによればわさもことある本も有しおるへしと云るは非也新古今にはこの初秋の歌と戀にとりあしさて我背子と我妹子どのへられたるの趣のたらしきのみならず専らは調といたはれる也恨みんと思ふと云より

調へおろさんには我せこのとは受られそ衣の裾と明へしと受むに我妹子のとは置の
たさと聞知へしさては忽ち口調あらひて互ひにすのたとなさゝるもの也

ちのふまをとなへとりーからつこのまよいなばそよきて秋かせのふく
意明らけし

○餘材にさなへはわさなへと云へきとわと略する也早蕨早百合おなし心也と云るは非
也さは即さつきのさつて五月にわへる物には大やういへるの中み殊更に播苗の事多
分いひてさなへさつとめと始め何とよふ事今も田家に少うらと恐らくはもと播苗よ
り出たる語のさらぬ物にも及へるもの歟五月雨五月蠅五月百合など尙有へし近頃愚考
も侍れと熟案の後申てん是とわさの略也と云るは不通の説也わさはわさ田わさ穂ふと
稻穀のうへにのみいひて外にさつすよし若き意とせんふも早蕨などはさも云てんやの
てさゆりとも若き心とせんこといふ又云さなへととるといふは田と植んとて苗代に
有と取といふ也と云るも非也苗と取は植る事にて新年祭の祝詞に取作牟奥津御年乎と
云る取作らんの取ふと即同意にて凡手してまらふわさには廣くいふ詞なり幣と取と

いへは手むける事笠ととるといへは被く事枕と取といへは寝る事ふて常にも床と取は
敷事湯と取は汲事腹と取は按る事など推て知へし

秋風の吹にじ日より久かたのあまのかはらにたぬ日はなし

こは萬葉の秋風乃吹西日從天漢瀾爾出立待登告許會といふに似たりもし此歌の差へるに
や天川は西土あいはゆる天漢銀河等より出たる也天安河と混すへうらと安河は高天原に
ある川にてもとよりこゝに云りおもひき似たる方より萬葉の頃には天漢安川原天漢安
渡丹など一つに連ねてもよみなせり

久かたのあまのかはらのわた守君とありあはかちかくしてよ

是も萬葉に吾隱有機棹無而渡守舟將借八方須曳者有待といふに似たり

天川もみちをばしにわたせばやたなはたつめの秋をともまつ

萬葉にも機搦木持往而天河打橋度公之來爲あといへり此紅葉もふみ木もち行とあるに
ひとしき意はへにて織女の手つらものせる也紅葉の枝と打橋にやわたすともめしきさ
まと思ひやりていへり萬葉に此外も天漢棚橋渡織女之云々安麻能河波伊之奈彌於可婆

云々など皆身のあらまのなふ細流のさまにて出るにまのせてうたへるもの也顯注に新院の御本おは紅葉と橋にと書れたるに橋と直して舟とのゝれたり但考實方集云天川のよふ浮木ふことゝはん紅葉の橋はちるやちらすや此歌若以古今爲本詠歎然考實方の所見本は橋とありけるにや近來の人は多紅葉の橋と所詠也とありて即顯昭は院の御本の舟の方に従はれたり密勘おは舟橋只兩説也舟とも橋とも風情よりこん時共に可詠用也とありては例の兩端ととりて落所と知さるの説にて論し難し既に六帖にも橋とありて橋ならん事論みさと舟と直されたるは紅葉と橋お用んはつさなき事と思へるより紅葉の水に浮ひたらむ舟とみん事もとよりなれば海人の流せる舟のどろ見るなど准へ來たる例に任せたるもの也せはき流れお枝なら打渡すとさなき趣向と聞知さるよりの感ひ也空穂物語に秋淺み紅葉もしらぬ天の川何とはしめておひわたるらんといへるもの實方の歌も是によりてよめる也證とすへし

○打聞に顯昭本にはもみちと舟にと有て崇徳院御本には橋とのゝせたまへると舟おとゐいなほされたると有思ふに橋とても有ましきにあらねと舟とあらんはやすらうに聞

もされとあへて改められたしといへるは非也こはさはりの天川に紅葉と橋にのけ渡さんいのお設けいふとも余りお大とれてふさはしらすけお舟こそはと思ひ従へる也大やう難もしの思へるより舟の異説もおこれるもの也されと紅葉と舟とあして川と渡すと舟にわたるといひて聞えんやは不成の語也

こひく〜てあふよはこよひあまのかは霧たちわたりあけすもあらなん
其趣は例の有ふれたりといへとも初二の句のしら〜尋常ならぬと玩味すへし

寛平御時なぬかのようへにさふらふのことも歌奉れと仰られたる時人おは
りて讀る
とも のり

天川あさせしら浪たとりつゝわたりてぬはあけそ〜にける

萬葉に天漢去歲渡伐遷閉者河瀬於踏夜深去來とあるおひとしき趣也たとるはた〜しきにて尋ねわふるさま也びてまらなくと白浪にいひのけ其白浪やうて踏たとる脛に激しくいさよふ水のけしき見ゆめるこ〜ちす古は只秀句の爲おいたつらなる語とかく事はなろりと疎のお見るへらす渡り果ねは〜わたり果ぬにと云るにひとしき古言也吉備のお

たりおては今もいふ詞也と國人いへり

○打聞お下おなぬかの日やうの日のと有ごもなぬのの日の夜とありしあらん即下に
さる所も見えたりなぬのやうののはひとつふたつのつに同じくおそへる詞也といへ
るは非也一つ二つのつとどいひし事とまのそおぬのやうかの日は即ち日おて古へも
夜おはこの夜目にはとうのとなど夜に對へると云りなぬのの日などいふは其言と
重ねるのみ調へに従ひていにもいへり前後と吟して知へし

おなし御時ささいの宮の歌合のうた

藤原おさのせ

ちきりけお心そつらきたたのたのと一たひあふてあふかは

心うつらきは年お一度と契りけん心ともとのしく氣の毒におもひなげく也

あぬの日の夜よめる

凡河内みつね

としとにあふせばをれとたなはたのぬるよのかさうすくおかりける
たなはたよかうつるいと打はへてどいのをあらくこひやわたらん

打聞お是は戀の歌にて織女によせてよめるならんといへるは然り初句織女はといはす織

女にらしつるとおれはろの織女の戀といへるに非す聞ゆれば也されと又こゝに入ことれ
はつおなしと云るは非也戀歌の四季に入れる事既お辨せりやうて次お今宵こゝ人おはあ
はしと云る戀にあららんやは又再お思ふお織女はとさしていへは織女の戀あらん事論
なければとさるは調もれくれたるうへに其織女おしつる糸まのあたりには打はへたと見
なから織女おしつるとよそくしくいはん却てふさはしおらねは織女にらしつると今
みるまといへるあらんさるは然戀わたらんは即織女にらしつる其糸のとく打はへて云
々お聞どるへしおの打はへて年の緒長くと云る語勢も織女の戀めきて聞おめり又次なる
今夜こん云々の歌は七夕およせたる戀の歌あれば題しらすとわらちて入られたるには此
歌も戀ならんには其内お屬とへさよやはり常の七夕につらね置れたるなどおたしく思ふ
へしいつれ後樹有へし又手向るとおとといふは凡神佛おは手ならし穢したる物とさしく
る事なし七夕のみおは有ふれたる衣類調度などとも暫く手向れば借といふめりもと根な
しとの置れおさなれば也けり

題しらす

そせい

とよひこん人にはあはしたなれたの久しきはどに待もあそどれ

この結句は紀氏新撰又六帖家集等皆あえもこそすれと石の正しき也あえは今あやのる
といふにて織女の久きく待わたるにあえも社それと云る意いと明らる也待もこそそれと
せるは久しきはどにといふの即待わたるあひたなる事と聞しらす待の詞なくはあし
と思ひたる後人のさのしらにしてさては却て聞えするものと辨せざるもの也久あまつ久
しく待などはいふへし久しきはどに待といふへけんや宵もころと待もこそあむさと入る
へたれば語さへといふのはすなれる也諸註此謬と回護してさる方に説なせるは語調み暗し
といふへし

なぬらの夜あつつきによめる

源ひねもさの朝臣

今としてわかるゝときは天川をたらぬさきにそそひちめる

やうのの日よめる

みふのたゝみね

けふより今こんどこのきのふをそいつとかとのみ待わたるべき

萬葉に織女之今夜相奈婆如常明日乎阻而年者將長と云に似たりさて七夕之巧奠はうきた

る事の却て興あめればはやこもふも奈良の頃より盛んにもてはやされて會合のさまと人
間の上に向けて意の向ふお従ひ口に出るまふくよみ成して其趣一方あらずもとより眞
實よりいはねはよき歌也と云も更お感あるはあし又しの意あまのせていへは古より今に
至りて殊に奇異なる歌のみ有へきに此集の歌なども皆萬葉中の精粕にして却て花鳥の上
はより珍らのお新らしきも見えぬにや假にも詐偽のたのむへらさると思ふへし

題しらす

よみ人しらす

木間よりもりくも月のかげみればこころつくこの秋は來にけり

此歌心明らる也といへとも又打つけに解得たきこころちせるは其すうたこゝる幽微と究
めて感哀あまりに深ければ也只さなららふ吟玩すへし畢竟は月は秋こそと待つるに其月
やうて秋と傷ましむる嚆矢也けりとあやふくき木間の影お大方のこゝる盡とらこちよせ
ていへり

大かたの秋くるからにこか身こそかなとさものとおもひーりぬれ

秋とこそ究めて悲しきものに思ひし其秋來りてさてこゝろむればわれもとより憂身ゆ

るにこそわきても秋は悲しきなれ大方の秋のわさには非そといふ也ひたぞら秋のうなし
ましむるに非すこなたより秋に悲しむ也と云心とくくのへたりたどへは時氣の爲ふ犯さ
れて我固疾と知ると云んに似たり

わかたぬにくる秋にしもあらなくに虫のぬきけばまつそ悲しき

虫の音は夏の末より下ふなきて秋と聞しる始めぬれば先と悲しきといへり

物とよ秋をかふときもみちつゝうつろひゆくをかきりと思へば

くもみちつゝ移るひ行と梢の上も限りとおもへは何事も身にしみて悲しき秋にそある
とうつる紅葉の一つふつきて物とに衰へゆく萬の秋と思ひしめて打るめたる也こは庭
わたりの梢の春より夏にかけて立榮えたるの此頃や、黄はみたと見て讀るとやうの事あ
るへし

○打聞にこは初秋なればもみちの今染ぬ時なれと草木のれどろへ果る秋の其始なれば
先いひ出て云々鏡遠も是に従ひて物ノシマイニナル時節ノハシメチャト思へばと云る
其非也限りと思へばとあると秋のはしめなればと解へきならんや又秋を悲しきもみ

ちつゝ移るひ行とよみくたせる其氣しきまのわたり見ゆめりわらのしめ思ひうのへし
句調ならんや秋のはしめといふ事一首の上にも更お句はぬ事也この六首は只大やう秋
にわひてはのなしきものと云る心のふるき歌とよせつらねて七夕と月との間みれられ
たるのみ今は部立に泥みてみる初秋あらんと一むきお思ひとれるよりのく入はのの説
も出くめり此うち心盡しの秋は來おけり我爲にくる秋にしもあらなくに秋くる音は露
けのりけりの三首は初秋の歌也大のたの秋くるのらに我身こそ秋の夜そもの思ふ事の
と此ものこに秋を悲しきの三首は初秋の心にはあらざる也

ひとりのぬるとこは草葉にあらねども秋くるよひの露けかりけり

意は明らかし恐らくは此歌はたまく通ひすむ男あとの夜られたらん頃などよめりしに
やあらん獨ぬる床はと更めきていへる語調此頃獨ぬる床はとやうの意お聞とられて我獨
寝獨ある人など打まのせていへるとは同じのらざるにや又秋來る音は露けしと迫りてい
へるも秋くるのらお秋にしぬればとたはらのに云るとは自然差へるこちしてひたす
らのやもめ住ふはあらしと聞なざるめり吟して知へし

これまたのみこの家の歌合のうた

いつばどは時はとかねと秋のよそものおもふこのかきりなりける

此初二の句優にして方ある調也よりて事なき末の句も自然にめてたく聞ゆるし心は明らか也

のんなりのつはに人々あつまりて秋のよとしむ歌よみけるついでによめる

み つ ね

かくばかりをしと思ふよをいたつらにねであかざらん人さしそらうき

斯も哀に面白き夜といふに見えて、徒にねて明すらん其心なき人さへそらうきと戻らしみ惜みたる也露の程ありつらん人のまより退きなりと人少に静まりたる夜中わたりの歌也さる人々は更にて見わたしの格子のうら局々のもの深き夜のさまとさしあて、いへる也其意とえて詞書に人々あつまりて秋の夜としむ歌よめるといへられたるにや、更るまで人々侍らひし事しられ又ついでお讀ると數の外にいへるは人より後れ残りて共に只夜と惜めるのみふはあらぬ歌のおもひさふ合せたる也此歌家集には明る迄今宵の月と見てもあ

らてねてあつすらん人のこゝろよとありこれ其夜のよみのまゝにて今のは選はるゝ時にあたりて直されたるあるへし此わくるまで見てもあらてあつとあるお更るまでは人も在し事いよくしるしおしくも古の御壺の内の其夜のさまゝのあたりに見ゆることとすいともなつらしおらそやはこは月と賞せる歌なら只夜としむとのみあれば秋の夜とつらねたる歌の末と承て月の歌のはしめおられたる也

○遠鏡に寝テシマウテムサ〜ト明ス人モアラウカキコエヌトチヤト思ハレルと云るは非也徒に寝てといひねて明すらんうきとさへ云る世の中のねぬ人とそらふ廣く思ひやりたるあらんやさを所ある語調と聞知へし、の思ひとれるより結句の人そらうきとキコエヌトチヤト思ハレルなとあらぬ事さへ解あやまてるもの也

題しらす

よみ人しらす

〜ら雲にそぬうちかはしとふかりのかす〜見ゆるあきのよる月

此しら雲は只天とさせり太虚と雲とのみ云なす事少あらす萬葉に安麻久母爾可里曾奈久奈流天雲翔雁相鳴雲隱雁鳴時などいへり皆高く見えのたさと雲の上雲のくれみと

いへる常の事も青雲はもとよりあて天雲白雲など多く空とさしていふゆり又白雲之柵曳シラネノ國之青雲之向伏國乃天雲下有入者云々など連ねても云るに只大よそなるを見るへし菅萬クニノに白雲に飛鳥さへるのりとねとなくなどへて今と同じ只大空と打群て飛行さま也羽打ムカシのはしは遠鏡に雁と雁と羽とならへのはして飛わたると云り白雲と打のはすには非すといへる尤然り四句は菅萬顯本等に影さへと有と正しあるへき數ともいはれざるにあらねど影のたれたやの成へし其影は人影などの影にて飛行貌也實は月夜に鷹のとふるとみゆへきならねと月のいたりてあさといはんとして心あての面影はのりといへる也顯注に雲井はるのふとひ行雁の影の庭にも移りて見えんは月のさはめてあさ心也と地上に移る影と見られたるはいふふたらす密勘に秋の夜のそめる空に雁金の鳴わたらん面影のやうにや侍へき影の説にのりは月にのけらん程は遠くともせめて隈あきよしといは、詠めん庭の面宿さん袖の上にも影みもとも申なしてん白雲お羽打のはし飛ん影は雲中お隔たりなは月の影あさ心にはたのふへしよそならん雲に羽打のはさん鷹と遙のふ照さん月はあめん人の心こゝにて影みん事數のたくや侍へき云々白雲お飛て影みえん事覺束なけ

れは數さへ見ゆるふつさ侍る也とあり此文中なめん人の心こゝあて影みん事難くや侍へきの一句差謬有て聞取難く侍れば先其意と申解侍ん人の心の心は次なるこゝにの重なりたるにて衍字なるへく影見むの影は數の誤ならん事論あく難くや侍へきは難くやは侍へきの意也あめん人のこゝにて數見ん事難くやは侍へきと地上の影とたのひて見やすきといはれたる也さて其宜へる大意は數さへみゆる秋のよの月とあるけに鷹啼わたらん實には其數あともみゆへきならねと面影のやうにや侍へき又の影さへの説あつきて評せは月お翔らんはとはよし遠くともいと責て隈あき限りとたへんおは庭の面袖の上にも影見もとも猶いへにも申なしてむされとさるは月下と行鷹也其月下の白雲に羽打のはさは其白雲やのて月の隈と成へきには影のあさ心違ひて忽ち地上の影も有へきならそ月よりよその空なる雲お羽打のはす鷹と遙にてらさんはこゝより仰きならめん人の其數見む事は難きお非と白雲と共あらん其影地上にみえむ事ははつらなければ我は數さへ見ゆるの方に従ひ侍る也と宣る也愚按るお元來白雲は空の事なると辨せを羽とさへ交よと見られ又影さへ見ゆるは飛行空の影なると地上にうつる影也とみられたらんみな其歌の

本意に差ひたれば畢竟朝四暮三の説ふして註勘共に推こめてひる事也けりふよる月下と
行鴈の影も數も見ゆへきものならず況や月よりよそにありて雲にさへまじりたらんとや
又云俊賴朝臣は影と執せられけるにや基俊のゝれたるは數お心ひけると見侍しは古
賢も格別に思はれけりどあり基俊は黃門の爲には古今口傳の師ならんには其説に従ひ玉
はん事論なきものゝら猶謬は共に謬なるへし

○余材に影さへみゆると云と定家卿の難し玉へるもとわりいまた盡さる歎若この白雲
といふと月に厭ふはとの雲を見てそれお隔たる鴈の影はみえしと宣はるこお執し玉
へる數はいひて見玉はむやと答へは勝負不定あるへしといへるは非也こは密勘の文意
の見分たきと研究せずして推はのりお云るもの也雲にへたゝる鴈の影をみえしと云
れたるに非す月下お雲あらんおは其鴈の影も地上にみゆへきならず月のよそならん雲
に羽うつ影は下より望むには見ゆへしと宣へる也

とこふかじよばふけぬらゝ鴈かねの聞ゆるそらに月さたる見ゆ

今宵も更でもはや夜半なるらし鴈かねのしはく聞ゆる太虚に月もめぐりてみもと云り

此歌は萬葉お弓削皇子に或人の奉れる三首の中おて次なる歌妹イセカアノシメノカミ當茂トシノカミ音夕霧來鳴而過トシノカミ
去及トシノカミ之トシノカミこれも同時の詠ならんおは鴈は夕よりしはく鳴る夜のさま也歌の上し聞ゆる
こゝちせるにや鴈金のそことなく聞ゆる夜の哀にも面白き空お月のやゝたむけるけし
きなるへしさるは鴈の聞ゆる大空に月の更たる也月すむ空に鴈の啼わたるといふおは似
て差へると聞知へし

これさたのみこの家の歌合お讀る

大江千里

月見ればちゝに物こそかなしけれわかみひとつの秋にあらねど

歌の意明らけし

○打聞に我身ひとつの秋おはからぬといかてのくまで悲しきやと下にとわれる
也と云るは非也こは我身一つの秋にはあらねど我身ひとつのこゝちしてちゝに物こそ
悲しけれと折のへして落着する歌なりいひてのくまで悲しきやとさふのしむに非ぞ况
や再ひ下にとわるへき意あらんや秋にはあらぬとさふのくまでとは語脈もつゝの
る事也よく吟味すへし我身ひとつの秋にはあらぬとさふのあらぬものとの歎辭もてい

ひおるさはいりての心出てん事もとより也されは今はあらねとてあらぬとを書換てい
りてのくはといふ方に解なせりあらぬといふもあらぬといはんもわいためなくひ
とつにとれるは疎まを云へし

たゝみね

久かたの月のかつらも秋はなほもみちすればやてりまごるらん

月とよめる

在原元方

秋のよの月のひかりしあかければくちぶの山もこへぬくちぶなり

べのもとにまのれりける夜さきりくすの鳴けるときよてよめる

藤原たゝみ

きりくすいたくな鳴そ秋の夜のなかき思ひはわれそまごれる

人の許は女のもと也何の打侘て泣たらんとてよりも我らまされるも打のへし且はなく
さめてよりりしと折しも床下ふとに啼けるさきりくすにのちて云る也

○諸註人の許と朋友のもととせるは非也さらは詞書に然泣へき故といはてのなふへけ

んや又此歌友のもとと見て何の感哀あらんこは秋部ふ戀歌はあるへららそと思へる例
の謬也同じ葦も設て思ひよせたらんか或は序枕ふとにいはんは必戀部に入む事論なし
實事實景ならんは其物さねに随ひて部とに散在せる舉るふたへす
是貞の見この家の歌合のうた
としゆきの朝臣

秋のよのあくももくちぶく虫ばわかてものやかなしがるらん

こは明はなれたる朝けの庭などに猶なきしる虫の音と夜たゝ物思ひあうせるかのの上
にかこちよせたる也

題しらそ

讀人しらそ

秋萩もらうつもぬればきりくすかねぬとやよるはかきしめ
あきのよは露こそそにこもかぐと草むらとよ虫のわふせと

結句の侘れは、侘るはの意也さらは詞まきりてしらへとあるはれはるとれとなたらめた
るのみ

○打聞にわふれは、わふるはの誤なるへしわふれにてはことばり聞えずと云るは非

也菅裏に菖蒲草いくつの五月逢ぬらむくる年ことに若く見ゆればとし月の雪ふりゆけ
は草も木も老ころすらめ白くみゆればなとあり近くは西行の庭さめる月也けりな女郎
花霜あわひぬる花と見ゆればなとよめるこれら同例みて若く見ゆるは白くみゆるは花
と見ゆるはと云へきとみゆればと謠ひて歌と調へなせる是てにははの常なり此類ひ舉
るふたへんや

○遠鏡にアノヤウニ虫カ難義カツテ鳴クノチキケハと云るは非なりこれも佗れはにて
は本末のでおとは打合すと思へるよりさく心といひろへてきけはのはおれはのはと強
てめてたる也佗れはときけはと解へきならんやは難義カツテ鳴クハといひてたれる也
君一のふ草にやつるふふとばまつむ一のねそ悲一かりける

此歌君しのふくさふやつるのとつらねたるしらへいともめてたき也こは哀傷部融のお
とゝの身をり玉ひて後の家にまがりて君まさてけふりたえにし云々と紀氏のみみ給
ひ又利基朝臣の身まのられし後昔の曹子の荒たるを見て君の植し一むらすと云々と有
輔のよめりしと等類にて是も友達などのあらと成たらん後其故宅おてよめりしあるへし

序お松虫の音お友と忍ひとあるは全く此歌のこゝろと昔れし也

○打聞に序に松虫の音お友と忍ひといへは此君は友の事とそへけれとわれは此歌とあ
りて友としたふ事に云此歌は只昔こゝに住たるあるしの事と君と云なるへしといへる
は非也其あるしやかて友ならんには友としのひと云ん事論なし只のりて云るせるなら
んや

秋のふ道もまといぬ松虫のこゑするかたにやとやからま一

こはしらぬ道と實おふみ感ひたるにはあらて野遊あとの路暮はてたどくしく歸りの
てならん醉のすさひなとにのくもいへるなるへし道もまといぬといへる輕き語調しの聞
ゆめり聲する方おやとよのらましことお道もふみまといたればとやとあるへきこと
お云るはのりあるは松虫のねと暮ふの主意なれば也道はまといぬ道まといけりなど惜お
いふとはたのへりさるはまといたるの故あやとどのとなりてまといへるの主意となる也
今はたよとらん料ののよとあいへることよとまといしるへし聲する方おはさし付て松虫
にのらんと云まてにあらす待の名おたよりてさる方角にやともとめんといふはのりあり

こはうちつけのけしきおまのせて同遊の友なと小いひたはれしはりのとさなされもふ
きあらんふはもとより理りと推さるへさおあらす

○遠鏡お此秋ノ野テモウ日モツレニ及フ道モフミマヨウヤホトニといへるは非也この
道ものもは只あるく常お用ふるてにはなり道もまといぬれはたしく松虫の鳴方に
行ましと云にて日暮ぬ道もふみ迷ふと對へていへる格には非す日クレテ道モフミ迷
ヒなどは解へしざりとも日もくれぬといふ事歌の上おあらはころあめなき言なると
こまうけ出て打合すへきにあらす

あまのよよ人まつ虫のこあすなり我がとゆきていとふらばん

これも近よりてきのまほしきの意よりしう讀なせりとふらひは問事也らひは即はへの轉
睡おして休らひ中らひの類ひめて其事とさし付あらすなたらめいふ詞也今も我の人のと
問たすにあらそ何ふやうの意也と知へし雜部に五節のあしたのんさしの玉の落たりけ
るとみてたのならんと問らひてよめるとあるも尋ね正とまでならずこはたの落せしなら
んといひあへるは有りあるとうたに主やたれとへと白玉と云む料にとふらひてよめると

書なせるのみ只消息するともとふらひと云るおと皆同し意はへ也

○遠鏡にツチヤオレチマツノカト云テトレヤ行テオミマヒ申サウと云るは非也マツノ
カト云テ行テオミマヒ申といふ詞つらひ世にあるへきならんやこはいさ行て我のと
ふらひと云ふて何事もなき句調なると消息する事ともとふらひと云ると此語の正意也
と意得て行テオミマヒ申など筋もなき事お解くつせるもの也

ふみちばのちりてつゝれる我宿にたれとまつ虫こゝら鳴らん

按るに松虫は秋の初めより半まで盛りお啼めり今こゝらなくらむと云る類に鳴たつるけ
しきなるに紅葉の散つめれるといふ暮秋より初冬のさまあるも打おへりとも見えす又松
虫は葦などの類ならて専ら山野或は故郷など人氣遠き所に鳴めると我宿にと打まのせて
いへるもふさはしおらそこは後撰六帖等お此本の句秋の野に來やとる人もたもほえすと
有と正しあるへき野に來てやとらん人は有へしともおほえぬに誰と待らんといふはふ
さはしく落葉の積らん宿に誰と待らむといへるはしたしおらすさらは誰のは分てとはん
なといふへし今は二様に云傳へたると調につきて紅葉の方とどられたるの又は後に書た

あへたるの甚かほつゝのなし

○打聞ふ秋の暮の歌あらぬにもみち葉の散て積れるといふは松虫の歌ふて未なればこゝに入たる也と云り遠鏡も是とよろしとして従へる共に非也松虫の末ならば即暮秋ならん事論なきと暮秋の歌に非とといへるはいふ、又もみち葉の散て積れるの暮秋にあらざしていつならんこは部立お泥みて實景とわすれたるもの也

ひくらしの鳴つるなへに日は暮ぬとおもふ山見えしのかけにそ有ける

四句顯本六帖朗詠等皆とみえしはとあるる正しあるへきこは山陰の暗さと云るなれば思ふといふより見えしといふのしたしくつみえしと過去にいへるお其山陰と離れし事いちしるさ也おもふのは其山陰あるら云るにも聞ゆる方有て正しあるらす密勘に家の本おはと思へは山のとそ書侍とありされは今の思ふは、此密勘の思へはの又轉したる也さるは定家卿の家本にのみ思へはと有て流布の本はみえしと有し事も論なし又とみえしはのと文字と或は上に或は下に屬するの説まち／＼にいへれとこは下句につくへき也下につけずしては唱へるたき歌多く密勘にもとおもへはと書侍るとあるは即當時も下につけて云

りし證也もし上句に屬するならば只おもへはとそ書ると有へきもの也

○打聞遠鏡等なへへのと濁れるは非也こは萬葉中なへのへの假字お倍の字と書るとのみ見て多く苗の字と用ひたる所あると辨せざる也倍は多分清る假字にもつゝひ苗は更に濁らるへきならず今も清てのみ唱ふるは自然の調也夫木に引たる六帖の歌お蛙鳴井手の山田おまさし種君まつなへに生たちおけりどありててにとはのあへとやめて早苗によみあせるにも濁らさると知へし

日くらしのなく山ととのゆふくれば風よりほかよとふひとゆなし
はつありとよめる
在原 元方

まつ人にあらぬものからばつかりのけさ鳴こゑのめつらきかな

まつひとの音信たらんはめつらしさるゝものあれば其待人にはあらぬものうちと云われはしらぬ國より年々往のひて遠來の人めきたれば萬葉に登保津比等加里我來鳴牟遠津人カサノイニ獵道之池爾など枕にさへおけりされと待るゝものは鶯の聲山郭公いつの來あるんかと鶯郭公はのりのねてより待るゝ情なきものは又さはのりの聲ならねは也

○打開に雁カキ書カキと着て京へおこせし事よりこゝにも雁と遠つ人の使と云りといへるは非也こは待るゝ遠方の人に似たるより思ひよせたるにて雁書カキの故事には非すされは書とはいはそ人と云り又待人カキああらぬものらと遠つ人の便とまつわれにはあらぬと聞へきならんやはさるはむけに詞のたらはぬのみならず語脈も差へるもの也

○遠鏡カキホカキチカ待テ居ル人テハナイチヤケレトと云るは非也雁は遠方より來れば待人らしきものら猶さる人ならねと、いふはりの心はへ也兼てわの待とる人あり其待つる人ふはあらねと、いふやうのしの手重き語調ならんや聞知へし

是貞のみこの家の歌合のうた

とものり

秋かせに初かりかぬそぎこゆふるちか玉つさをかけてきつらん

こは蘇武か故事より讀るにて諸注に委し秋風にとおけるは秋のせの寒きにたへそして啼わたるものなれば萬葉に秋風寒暮丹アキカゼノサムキニラヘニカクナキロニニカクナキワカレ雁カキ喧渡秋風之吹來苗丹雁鳴渡ると云ならして秋風爾山飛越雁鳴之ニヤトヒコニカカリガチと打任せてさへ云り今もあき風に打作て鳴の意也秋風アキカゼ小聲と吹たくと聞へるらす即管萬ふは此歌秋風アキカゼ小啼のりのねるとあり玉梓は使といはん枕詞にて萬葉

にあまた見えて諸註さまざま云れと定説なし契沖云梓は弓といふ言にて萬葉に刺楊根張梓アサヤホミミシラシヤヒ矣御手二所取賜而云々とある梓にて玉とつけたる弓といふふるへしと云り是亦因て考る小弓には束あれは其弓束ユミに云のけて梓弓つかひと受たる意の枕なるへし梓弓本と受末と受るに同じ玉梓タマシラ能イモ妹イモ者イモ珠イモ懸イモ云々とあるも弓と射るとのゝれる也然つらひみれて後只玉梓とはのり云ても使の事と成けんイモと其使は多分書もて往のふものならんふはやめて又書の事とも轉したる也其後の好事文字とさへ玉章と改めたらむにはいよく書の事と成定まれりかのれ初めおもへりしは此歌の玉梓は猶使の事にて誰の爲の使とつけて來つらんと云りとするけては兼て也さるは萬葉に可里乎都可比爾衣豆之カサリヲツカヒニエツクニ可母雁使者宿過奈利九月カモカサリノツカヒニヤトスキナリノカサツキ之其始雁乃使爾毛ノシハカサリノツカヒニモなど云ならし又六帖にいつこととふみまとはせる玉つさそこゝは田邊の磯ならなくにとある玉梓も猶使の事のと聞ゆ又此歌管萬には鳴のりのねそとよむなる六帖には初雁のねうひゝくになるとあり萬葉に雁我稱波都可比爾許牟等佐和久良武あとのるもさる重たゝしき使實は人あまた率カキ來たらん者なる雁の打群たるに思ひよせたる也と思ひとりしのと再び按するに紀氏大井行幸の序に旅の雁雲路カキあまといて玉つさとみ

之云々家集にしら玉つさはやけどのひなしなどよまれたる皆書の事かれは今も同時の友
則の歌にてこの此集の撰達者ならんふはやはり此玉梓も書の事也けり

○遠鏡小雁は遠方カヲノ状ナクヒへ掛テ持テ来ト云事チャカと云るは非也漢書蘇武
傳には天子賦上林中得雁足有係帛書とあれは首へのけて來るといふへのらそ

題しらす

よみ人しらす

わか門にいなねほせ鳥の鳴なへよけさふく風にかりの來にけり

稻負鳥イナガセトリは稻令命の意にて彼の渡り來る頃稻刈わさそれは田稼の事と云ねはするに似たれ
はしよよふにやあらん苗植んとする時來なく郭公と死出の田長といふも催したつるこゝ
ろ今と同じさて此鳥古は名實明らの成しと其種類多き方より相混してつひお知のたきも
のと成て清輔顯昭俊成定家あとの先匠もたもひ惑ひ玉へるならんには今更いのゝ定むへ
き能宣集ふのりにとて我やとのへに來る人は稻負鳥にあはんとや思ふ順集ふ里遠みくれ
なは野邊に宿るへし稻負鳥にやとやうらまし是等小鷹符の歌也さるは鷹と合とる鳥と見
えたり又和泉式部家集小逢と稻負鳥のとしへそは人と戀路に惑はましやは堀川百首に

公實卿板倉の橋とは誰もわたれとも稻負鳥イナガセトリろすきにてにとる此二首は鶴鶴と云れたり又
兼盛集にのらくして急き刈つる山田のな稻負鳥のうしろめたさに足引の山田のこすけ明
るまでと稻負鳥とれふも手たゆし此山田のこすけは山田のこすなの寫誤なるへし又次に
山田もる秋の飯庵ふかく露は稻負鳥の涙なりけりとあるも皆同じく稻はむものともみも顯
註にも古歌に秋の田に群はむとよめりと云れたり又仲正の歌に賤の女のいなほを投るの
ら棹に打うへて來る庭たゝきのなとあるは稻はむさなれば稻負鳥ならんと庭たゝきと
よまれたりと聞ゆ上の和泉式部公實卿の兩首は庭たゝきと稻負鳥とよまれたりと見えて
其名と互ひふせれば同物也といはんは庭たゝきは稻はむもの非そ又稻負鳥は水邊にあ
さるけしきならず又互ひに其趣異也此頃前宰相公兼卿宣はく今俗に河原鶴といふもの鴉
の一種にして秋のころ渡り來て田野に群飛して稻ともはむものあり恐らくは是ならん
一時わたり來たらむにはこの稻令命の名義も叶ふへし鶴鶴は數品ありといへとも皆群
飛せず又稻はむものに非すと宣へり後衛と待へきもの也又大和物語にさよ更て稻負鳥の
鳴聲と君のたゝくと思ひける哉とあるはけしきも何もなへての類ならねはもとより取難

し此外異説多しといへどもいふにたらず又頌註に上なる公實卿の板倉の歌と判して是は馬也と意得てよまれたりと見えたり馬には稻と負する者なればと云るは名ふまどへる謬也こは庭たゞきの清き山河を或は板橋九橋にもあれかりゐて飛さらす猶其はとりあさりして振まふさまと過りてふすと宣へるのけしき見えて面白き也のよわき橋と人はわたりとも荷おへる馬は得わたらそといはん事何の趣有ん況や馬と鳥と云へけんや

いとばやも鳴ぬるかりかゝる露の色とる木々もゝみちあゝなくに

雁は露霜さむく成て来るものおしてよめる意上にいへるの如し白露と云て色とると云るのきはやりにけしきありて新らしき書なと筆していろとると云に意同じとるは幣とる早苗とるなどの採にて本は手してなすわさと云なる事上に説るの如し今も白露の手お任せて色ふそ意也只露の染ぬるふと云と同じく見すくそへあらず

春霞かきみていよゝかりかねば今そなくなる秋きりの上に

こは春の霞にのすみていにしと云也今を啼なると打おとろけるふ其のすみていにし春の面影なつゝのしう霧の上に思ひ出られたる句ひ只ならそゝし借草紙に躬恒の子と竹壺の許

に召出てよませられたる歌とし古今著聞集に寛平歌合の友則の歌として左方にて五文字と詠したりけるとさ右方の人聲々笑ひけりなと云る皆あとなし事也歌合の公宴にさるくつゝのへりたる事有へきものならんや又春霞とよみ出たらむお何のよのしき故ありて誰かは笑ふへき又歌合に友則のよまれし躬恒の子のめされてよめりしならんといひて題不知よみ人しらすとしるさるへきとへて著聞集或は十訓抄等の説の大略一時好事の作意お出て據へき事尤少し

夜をとむみこつゝん鴈かね啼ふにはきの下葉もうつろひにけり

このうたはある人のいはくおきのもとの人丸の也と

夜と寒み衣といふまてはのりと云んの序おて振といはんどて處女等の袖どかける類ひ也とに古へ衣はのりもしのしもするものなればのくよめり萬葉に旅爾師手衣應借妹毛有勿爾佐農能岡將超公爾衣借益矣集中にもあるしのきぬと着せたりけると朝お返とてなとも有て男女はもとより男とちもさるわさ也さて夜と寒みは鴈の來る頃に打合てれかしき

也

○余材に此歌は或人の云く柿本の八丸の也と有と難して此歌菅萬上にあり寛平后宮の歌合の歌なるへし萬葉第八に雲の上に鳴つる鷹の寒さなへ萩の下葉はうつるはんのも云々打聞にも是と古注の柿本の八丸の也といふは例のとらすこの歌は新撰萬葉に入て寛平の御時の皇后の歌合の歌ともなる事其序に見えたり其上此歌は萬葉に雲の上に云々といふと少のへたるのみそれらとよく見ぬ人の云る注也是等ともて此集の古注といふものゝい捨へさぞ知へしと云る共に非也先菅家萬葉と寛平后宮の歌合の歌のみとのゝれたるものともへるは却ての序文とよく見ぬひと也彼集は后宮の歌合はもとよりにて其外も今古と撰はを集め玉へれば其釋一定ならと其と春部の春たては花とやみらむの所に既辨しれけり打聞にぞへての左注と意と決めてしりうけたるは専ら此古注によれり其意此歌菅萬あれば后宮の歌合の歌おまさされなし然るに八丸と有は必撰者の筆に非ぞと思へる也又此歌は夜とさむみ衣のりぬねと云るの尤おのしきと此歌によりて後々衣のりぬねとよみはやせるに耳ふれて却て今とめつらしまを萬葉の雲

の上の歌と少のへたりなどいふは陳妄也又句々たのへる歌と同じものに聞なせるもいふにそや

寛平御時ささの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風に聲とほにあげてくる舟はあまのこことたるかりにそ有ける

何にても露顯するどほに出るほにあらはるゝなといふより今は舟の帆と揚るによせて雁の聲高く啼とほにあくといひあせり余材も雁のなくは櫓とおすに似たりよりて雁櫓といふされは舟によろへて詩にも歌にもいふ也云々空の青くてひろくと有は海に似たれば萬葉に八丸の歌に天の海に雲の波たちとよめり又天の戸といふ事もあれば海の追門およせて天の戸わたるとは云り按とるに集中戀の歌にも小夜更て天の戸わたる月影おとよめり歌の意一行の雁と舟に見たて聲とほにあらはると帆とあけたるにさのせ天の門と海門およせたり且夜さむの秋風やめて追手の風お聞なざるゝなどいみしくたのしき也

○余材に聲とほあけてくるとは高く鳴て聲とあらはお出と心也現形するとはほにあくと云又物に従てほに出とも云同前也といへるは非也現形するとはほにいつとはいへ

とはにあくといへる事あし今は其はふ出と事とほふあくといひなして舟の縁おあはせたるのみほにいつもほふあくも同前也と云へるは陳妄也

○打聞に雁の渡る舟と見なぞ如くも聞ゆれと文粹に雁櫓來ともいへれば聲と櫓とたす音と聞なして聲と帆に揚てくる舟はと云る也といへるは非也聲とは帆の方にとりたるに又櫓の聲に聞なさん事有へらすこの遠鏡に船ノヤウニ見エテ來ルモノハ鳴テワタル雁チヤツイと云るは解得たり

ありの鳴けると聞てよめる

みつね

うぎてを思ひつらねて鴈かねのなきこそとたれ秋のそなく

こは雁の鳴けるによせて己の思ひと述たるにて其ありのねの、一句と除けは只常の述懐の歌也つらねといひなきわたるといふ雁の縁とのけたるのみ

是貞のみこの家の歌合のうた

たみね

山里は秋こそとにわひとけれかの啼音にめをさましつ

讀人しらす

おく山にもみぢらふみ分なく志かの聲さくとこそ秋はかあこま

百首異見に委し

題しらす

秋はきにうらひれをればあし引の山下とよみ志かのなくらん

萩の下葉とならめて物おもひとれは山下とよめて鹿の啼のなとりも社あれいひて斯はと萩には鹿もうらふる物なるの打あへると奇しむ方にいへる也うらひれは顯本にうらふれと有う正しきうらふるはうらはあらはに打出ぬ事ふるは荒ふるちはやふるなどのふるにて其様子といふ也さるは大やう物おもふ事として差はすうらみうらむるなど同意なれとは怨恨の字あどとあて、別にあつらひなせり

○打聞に鹿は己の妻と思へる萩なれば妬みてや鳴らんとてふ意とすへしうらふればわふると一つ心なる事上にいへりと云るは非也こにもあらぬ鹿とさして今わの萩にうらふると妬みてや鳴といふへきものは又うらふるどわふると一つ意ならんや委しく外お辨せり

○遠鏡に此ヤウニウナシナケテ居ルノニといへるは非也。此は萬葉に左小牡鹿之鳴成音毛裏觸丹來コエモウラフレニキなどある同意也。よしうらひれの詞あらんにもせよ猶うらふれの轉語也。いふて頂と投る事ならんこのもしひれふすの語など似たる事に心得あやまてるにやひれふそのひらふすの音便にて平伏する事なれ。猶是に異也。又居れり居るにの意也。と云るも非也。是も天川わたりはてぬの云々獨して物と思への云々なるとわたりはてぬにものと思ふにとして意得る格と申し事と思へる也。これの本末或は彼此たのへる所に用ふるにてはにて逢見て後こそ明ぬへき夜のわたらぬささふ明たるとおどろき獨くるしく物思ひとるにちそやといひなくさむる人もなきと佗たる也。今の我も鹿も共に物と思ひて戻れる筋ならぬ。更あ是と同じのうらすらひれ居るのみなるや鹿のあくらむとの云へきことわりなし。

秋ばきをーからみふせそなく鹿のめにはみえそてねこみのさやけさ

老のらみはしなへらむ也。もく鹿と萩のさふふるさまふて所謂胸分也。志のらみふせての分靡け陥したくさま也。萬葉お志のらみ散しなともいへり。或の志のらみのまの水にて水と

のらむ事とし或の柴のらみの意也。なと云るみな受難しかどのさやけさの顯本に聲のさやけさとあり密勘にも異論なければ。通本しありとみも従ふへしての萬葉お比日之秋朝開爾霧隱妻呼雄鹿之音之亮左とあるに等しき歌なるにこれに音の字とのければ。今もしのよめるあらんされど此萬葉の歌もこそよむへし。此歌の次に左小牡鹿之鳴成音毛裏觸丹來左小牡鹿之音乎聞乍宿不勝鴨左小牡鹿之妻呼音助益物乎とある。是等みな音の字と書れど聲とよむへきと論みければ。今もしのよむへき也。たましく口調おまのせて保登等藝須奈久於登波流氣之なともよめる事も絶てなきにあらねと大やう禽獸の啼との聲とのみいひならせり。

○餘材にまからみとの河ふ井杭打てるれに柴竹なとよこさまにあみ付て云々鹿の萩の枝と折ふせてふみしたさ亂とるそれに似たれり。志のらみふすと云也と舊説およりて云る打聞も是に従へる共に非也。志のらみは何にてもまよりのらむ物ににいふへし。就中水せくはあり世お用ふるの専らなる事あければ。ひとり其方の名にいひあれたり。水せくに似たるより鹿の上にも云るに。非す鹿の鹿の志のらみ水の志のらみと意得へ

し萬葉に可良麻流伎美乎波可禮加山加牟など云るのらまるもまのらむ事にてしなへう
らふれてとゝむるといふ此のらむにしなへのしのそひたる也しなへるとしとるとい
ふに同じ

○遠鏡み野ノ萩ノ中ヲフミアラミテオシフセテシカラミコシテ鳴テアルク鹿ノ云々と
いへるの非也これも欄かしてといへるの欄のたゝ水の上のものと想へる也この萩もま
のらむさまと云るにこの風情のあめれ彼の過たる跡のまのらみに似たるといへるな
らんや

これさたのみこの家の歌合ふよめる

藤原のとしゆきの朝臣

秋はさの花さきにけり高砂のをのゝのかはまやなくらん

むらしあひしりて侍ける人の秋の野にてあひてものふたりしけるついでによめ
る み つ ね

秋萩のふるえにさける花みればもとのころばわづれさりけり

昔相しりて侍ける人の次に藤原の忠房のむらし相しりて侍ける人の身まかりにける時に

とあるにひとしくも相見し女といふ也ついでによめるのさしむけて物語の中などふよ
めるのあらわられてわかれて獨ちたるやうの心ときかせたる也秋の夜としむ歌よみけるつ
いでによめるとあると其心はへ同じとて用ひて見るへしさて此歌雜部なる石上ふる
のらとのゝ本柏もとの心のわすられなくにと心詞大やうのはることなしよりて按するに
六帖に此結句のはらさりけりと有るを正しあるへき本句も本柏ふるのらの序のめてたきと
羨みて秋萩の古枝とせるなと其心はへ同じきには結句の是はありたに差ひなくては其詮
なきとちこそめる今のもとの心はわすれさりけりは己のわすれぬといふ語勢也既本
歌のわすられなくふは己の心といへる也されと今は花見ればといふとうけたればしひて
人のわすれぬに聞なそのみ六帖のもとの心はのらさりけりは人の心ののらぬといふ
語意なる事論なきもはらさりけりに思ひさたむへきものゝ又古枝に再び咲たる花み
れば本の花のほらすといふは何事もなく古枝に咲る花みれば本の花に咲ことと忘れそ
といふはいりほらにして迂遠あると聞わくへしもの心はわすれぬにの歌いとはや
く世おひひふりたるも且のはらさりけりより忘れさりけりの方其口調も切に聞ゆれば自

然ふうつりたるなるへし

○餘材に古枝の萩の秋と忘れすしてさらお花さけるによせて我も昔の心は忘れすと云りといへるは非也こは人の昔とわすれぬと嬉しみなつらしみたる也我わすれぬといへるならんやこれも本の心は忘れれそと云は自然我心といふ方に親しき故おさるのたに聞あやまてるもの也

○打聞に男とちあらは昔したしよりけるなと書へし相しりて侍るもの云けるなと書ひ皆女とさして云例也さるといひてのく書けんと言ふるは非也四季には戀の歌はなしと思へるよりこれとも男とちとこゝるえたのへる也この戀なら萩につきてよみたるしたれの萩の部に入れるのみ

○遠鏡に萩ノ去年ノ古枝へアレアノトホリ又花ノサイヨヲ見レハ草木ヲモマヘカタノ事ヲハ忘レハシマセヌワイスリヤソコモトモ中絶ハ致シタケレト先年御コンイニ致シタ事ハオワスレハナサルマイといへるは非也まつ男とちと見たるのいふおたらす本の心は忘れさりけりと只萩の上といへりおせんや又わすれさりけりとワスレハナサルマ

いと人に問つむる心とせんやさるのわすれさらましなくてはのなはそ

題しらす

讀人しらす

秋はきの下葉いつつく今よりやひじりある人のいねかてにする

末句獨ある人のいねかてにせんなと普通有へきとくいへるは古歌の及び難き也このもろそるなどのてにはお似てあらうしめ治定せるもの也

鳴わたる鴈のなみたやおちつらん物おもふやどのはきの上の露

我物おもふより啼わたる雁とも物思ふものにして其涙ならんと云る心詞ぞくれてめてたさ歌也此注遠鏡解得たりと云へし

萩のつゆ玉にぬかんとくればけぬよしみむひじり枝さから見よ

或人のいはくこの歌のならのみのとの御歌也と

萩の枝の露のうるはしきとめてくさはらの落んなれの手もふれて見よといふとく連ねたりとらけぬへしと云へきとこれけぬと一たひり取ても試みたらんやうにいへるのいみじき也

をりて見はれもそしぬへき秋萩のえたもたわしにわけるころ露
萩の花ちるらん小野のつゆしむにぬれてをゆかんさよばふくとも

もとより此歌戀にして其意明らかし露霜の余材に露と霜と二つともいへとは是の秋の末や
うく寒くある頃近く霜とも成ぬへきはどの露といへは霜と濁るへしといへりぬれてと
行んのぬれて行むといふにとのてにとはの加りたる也次にもみて渡らんとみてとわたら
んとあり常に月見ん花みんと月と見ん花とみむ山陰行ん浪路渡らんなどいふと山陰と行
ん浪路と渡らんとも云に同じ意の文字なれとつらひさまの聞なれたると聞馴るるにて
いたく差へる事に思へる也

○打開ふ是は妹あり行らん事と上とうるはしういへるなりけんと秋の歌とのみ思ひと
られし也云々ぬれてと行んのとの只に助辭とのみふてはことわり差へりよといふへき
と云といふ也宇治川と舟渡せよといふに同じく舟渡せよと云也といへる皆非也萬葉の
船合渡呼も舟渡せと呼へとも云とわたせよと云る也たましく此宇治川の歌わたせよ
ともいふへきふ似たれり老の思へる也ぬれてよ行ん見てよわたらんと云詞つゝ世も

有へき事の又秋の歌と思ひてとられし也など云る何の言とささくも然のみいへり
古今の撰者戀の歌とことくえも見しられさりしとせる笑ふへし況やらくもいしる
き歌とやろもく紀氏の此道お秀て給ひて古今お冠たる事お言と待へきに非を潜お文
武の徳と抱き漢才に驕れる世と思ひ門地と貴ぶ俗と忌み高く風月にうそふきて其光と
晦ましめ清貧と樂しみて一生涯とへ給ひし尊みても仰のさるへけんや近世和文と倡
へて古學者也と自負せる輩却て古お晦く其一斑とも窺ひ得そしてあめしう思ひ落せる
の傍はら痛きの甚しきもの也

○遠鏡に夜カフケテ露ハシケクトモと云るの非也この夜の更ぬとも露霜おぬれて行ん
といふにて事もなきと小夜のふくとももの詞と引放ちて露のしけくともとしけく
の下にもて付たるのいふ露のしけしといふ事も歌の上に見えぬとや又ぬれてとのと
は助辭なら其事とつよく云る詞也と云るも非也とは其本の詞の調へによりて強くも
弱くもあれる也上お解ると見て知へし

是貞のみこの家の歌合およめる

文屋あさやす

秋の野におくころ露は玉ふれやつらぬきかくるくもの糸すも

意明らけし貫ぬきのくるの糸よりのくる錦かりのくなどのくるに同じく古くへいふ一の詞にて今も只つらぬくといふ事也

題しらす

僧正 遍昭

かためてゝをれるのかやそ女郎花われおもにきと人にかたるか

非情の草花おしてとみななど云名のおむかしさに手折見る斗そ我墮落せりなと人にいひなす事なれと也本の句は女郎花の上ふていひ末の句の只に女としていひおるせりおつるの志と遂得さると云ふて名と落と身と落すなどの更也下臍に落る俗に落るなどいふゆり戀の上ふの殊更お云て今も女の男に云従へらるゝと落るといひくとさ落をなどいふゆり皆操の立あへぬといふにて古歌おもふみ返しての落るならひろなとよゆり況や僧の破戒と墮落といへいよく落るといふへき也此落るの語と後の心に戯れたる方にどれるより落馬などの縁なくてのと思ひてあらぬ辭とそへたる也和泉式部の落たりけりと人もこそ見れの歌と後拾遺お俳諧お入られたるの扇の上としのいひなせるの故也落るの語のた

はれたるにの非す遍昭集に落馬のことに書なせるの其意と得さるのひの言也とへて彼集の好事の漫りによせ合せたる杜撰の説のみふて取へきものに非を彼集お因て序注おもさる野おて云々など書るの謬也

○余材に此歌の此集の序の注にさる野にて馬より落てよめるとあるにてよく心得られたり遍昭集にもさうくしう侍しおの馬に乗て物おまのりし道に女郎花の見えしと及びて折しほどに馬より落て伏なあらとありといへるの非也さらのこゝに馬より落てと書へきと題不知とし歌おも只落にきとはありありてさる意にのいおて聞おへき又集おれよひて折しほどとあれおの歌のとれるはのりろのやはり手折し事にて馬の方へのらとさらんにの馬より落ての文いたつらになりて其筋とほらさるもの也況やさうさうしう侍しおの馬おのりて物にまのりしといひ及びて折しほどに馬より落て伏なあらなどのける意も詞もむ下に拙くてことわりさへとほらさるとや何る僧正の口氣ならん見しるへし

○打聞に下に花とみて折んとすれの女郎花うたゝ有さまの名にこそありけれどよめる

如く實女のことしと見てさて是の其女を見て手折に非ず名ある花にめて、折たるはあり云々といへるの非也のくいへると考るに女といふ名にめて、手折といへる即墮落の心となるに似たれりさてはたどる斗と墮落のせすといへる心なはとぞ思へるより名ある花といへる也女郎花とさして名おめて、といへる女といふ名とめつるに論なしさると只名ある花とめつると云んや菅萬に名おめて、けさう折つるとみなへしとあるも女郎の名とめつる也又女の如しと見てといひなら是の其女を見て手折に非ずといへる何の事ともことわり聞えず又名にめつるといへど名ある花にめつると云語のあるへきならずとなへて知へしもとよりさることわりのなけれ也

○遠鏡にれるとの馬よりかりたるといふとみなへしと折れるにはあらず打聞わると云るの非也この馬より落ると下たる方によみなせりとせるおや又の實女下たりと見て落馬の説のとらさるおやいつれか聞わさのたし下馬落馬よしいつれにても其事の詞書なくての歌の上更にこれとの聞なされぬ事也又名おめて、折るとのみるとの云へし名にめて、おかれるとつ、けんいと迂遠おして語となさるとも聞しるへし又打聞

の落馬の説とらさるとわるといへるも中々也

僧正遍昭のおもふならへまのりける時にととこ山にてとみなへしとみてよめる

ふるのいまみち

女郎花うしと見つゝそゆきとくるおとこ山よしたてりと思へば

奈良へ遍昭のおもふまのりけるといふと調といたはりて斯のけるの文のめてたき也當時遍昭ならお在れしなるへし雑部おならへまのれる時おなとも見えたり歌の意男といふ山の中に交りて立ると心うしと見もてすくると也俗おうたてく思ふと云にて遠鏡にイヤツラナ女チャどのけるよくのなへり

○余材に石上寺と夏部に奈良の石上寺といひたれり彼寺に住れける時なるへしふるも同じ所也打聞にも僧正奈良の石上寺お住れし時の事也と云る共に非也奈良と石上の同所おあらず夏部にあらの石上寺とあるの既お謬ある事其所に辨せり又云獨あらの我妻ともせんや男われりのひなしと見てすくると云也と云へるも非也さらは思ふのひなしとらうらやましと如何といふへしうしと見つゝとあるの我妻ともせむなどいふ方に

は聞えず又云或抄云このこと書ふ遍昭の本にどりけるに斯よめる心はのく世といふ人も侍るに女郎花の此男山み立るとうしと見つゝの心也といへりと云るも非也何ぞさる心まで歌の上にくくるへきさりとて實の女ならば僧正にたくらへて思ひ落けん事の有もしけん今の只女郎花といふ名につきてしの思ひよせたる即興なるとや余りおとさなき説也これは歌を行とくるとわれは其行ささと書むにたま〜遍昭のもとへゆくなればしる書るのみ僧正の名其世にしるければ也もし向ふさき直人ならんには只ならへまありけるとはあり書れん事論なしこれは撰集の格也と知へし

是貞のみこの家の歌合のうた

としのきの朝臣

秋の野にやとりいすへし女郎花なをむつま〜みたひならなくに

行くれていつくは有とも秋の野おころ宿りはすへきなれ女郎花と云其名むつましくして更お旅おはあらぬはと云りさるは馴にし妹に思ひあそへられて家に寐たらんこゝちと云意也旅ならぬこゝちとこの旅業ともあしなどあるへきと旅ならすと強くいひきはめたる也うきたる事と治定していひなすは歌の常なるら今いはるなき女郎花によりて旅なら

あくにとまていへるの余りおけなきより聞まとはるゝもの也

○余材に旅にはあらぬとも女郎花の名とむつましみ秋の野お一夜のやとりはすへしと也と云打聞も是に従へる共お非也これは名のむつましさに旅あらぬこゝちせるふてやとりたればむつましき女郎花おあへりしと云意也むつましさに野にやとるおは非を又名とむつましみ秋の野にと四句より初句にのへして聞へきあらんや況や名とむつましみ旅あらなくおとつらねたるし引放つへき句調ならんやよく思ふへし

題しらす

小野のよしき

をみなへしおはかる野へにやとりせばあやあくあたの名をやたちなん

こは女多きわたりにやとるへき事有つるやうのとき准らへてよめりしと見ゆ其口氣深く味ふへし女おまたの中にも有て却て實事有へきならねと戯れ心のあたし名はいよく〜避るへらちと然のひあき名と負んよりは宿らざるおししと落着とる意也結句は名や立なむと云ふとの加りたるふてぬれてと行ん見てとわたらんなどのとに全く同じといへともこは又一きは耳遠くして冬部の香とたに匂へなどの類ひにていよく〜うとさこゝちせるも

の也皆そのふみの平語と知へし

○遠鏡み女郎花ノオホクアル野ニトマツタナラツケノナイコニアタナ名カタ、ウカシ
ヲヌ女郎ト云ハ名ハカリテコソアレホンノ女テモナイニといへるは非也このはのなき
草花とひたそら女として其趣となせるもの也さると今草花なれともあた名やたゝひと
やうにとけるさるいはれもさる情も更に世有へきならず又あやかくあたの名とや立
なんどわけなき事あた名の立んと解へきならんやこのあたの名のあやなかつたつ也あ
やなき事にあた名の立にのあらし又名とや立なむのきはめて名に立へしといふはあり
いとつよき語勢なる名カ立ウカシヲヌとかほつゝあみたる方に解へきならんや花の
名はありあ名のたつといはむ事あら筋なくしてむけふ打合ねいせめて輕らのおいひな
せるもの也又あやなきとわけのなきと解へらそひのなき事也さるとの集中いつ
れの歌も通せと委くの春部のやみのあやなしの所に辨せり

朱雀院のよみなへし合によみて奉りける

左のねはいまうちきみ

女郎花あきの野風に打さひき心ひとつをたれによすらん

このすのためてたくて女郎花十三首の中にて優れたるなるへし其意明らかし

○余材にふたつなき心とたの方によすらんと云るは非也ふたつあき心はふたつとなき
心と云にや又ふた心なきあやいつれにても叶はず心ひとつの遺す心あかく打まのそ
るにて一むきに入はまれる意也

○遠鏡に心ひとつといふたゝ心といふこと也と云るは非也たゝ心とはあり心得ても
其意たのはそといふへし心ひとつと云と只心といふと何ら同しあらん陳妄と云へし

藤原定方朝臣

秋ならてあふとかたをみなへしあまの川原におひぬものゆゑ

歌の心明らかし物故の意の春部の待人もこぬもの故の所に委しく解り

つらゆき

たか秋にあらぬものゆゑ女郎花なそいろに出てまたあうつろふ

女の一たひ籠と失へる忽衰色のあらはるゝに准らへて云り

○余材に見る人の心の秋に非すわの秋なるものゆゑといへるは非也この遠鏡に誰カ

飽タトイフ秋テモナイニと云るはのなへり見る人の秋わの秋なといふへきに非す又な
と心浅く色に出て女郎花の方よりうつろひるむるそと云るも非也この只うつろふ色の
みゆる也

○遠鏡ハ女郎花ハトウシヤフツアノヤウニ色ニテ、恨ンテマタ早イニウツロウノハ
いへるハ非也このたの秋にてもなきハ秋も立おへすうつろふ色ハ出たりと云にて恨む
る色にハ非すさる事歌の上ハ見えそ又恨たりとて必うつろふへきものもあらぬや
女郎花ハとく咲て秋の半もまたすちるものなれハしの云る也

み　つ　ね

妻こふる鹿ぞ鳴なるをみなへしおのかさむ野の花とーらまや
をみなへし吹過て来る秋風をめには見えぬと香こそしるけれ

た　ゝ　み　ね

人の見るとやくるとさきをみなへし秋霧にのみたちかくるらむ
ひとりのみなかまるよりは女郎花わかすむ宿にうゑて見ましと

獨なのめてのみわらむよりのいさ我宿おうつし裁て相見ましといふ野原なとわたてる
つまなき女のつくく物思ひとるさまに見なせる也遠鏡にひとりこの一もとにてあるよ
しにはあらそ女の男おそはすしてひとりあるよしにいへる也と云り我とむ宿は只我宿
にと云ふハ差ひて共にすまんの意おのつらふくめり見ましとハ只見ましといふはどの
言のそへる也

○遠鏡ハウツミテ植テ見ハヤシテヤウモノヲと云るハ非也此見ましの上のなむる
よりはといふと受てさてあらんよりの共おすみて相見ましと云にて見はやしてやらん
なといふへきに非すそむといひ見るといふ皆男女相ちなむの語也又ものごとあらまし
あひへるも差へりいさ相見んと推さためて云る也このぬれてと行ん見てとわたら
んのとの言とどちめにおけるのみひのりと花とちらそはのりと我さへともふけぬへき
ものとなとのとに同じものごと心と遠す格とハひとしをらす日本後紀に散らしぬへき
あたら其香と古くハ日にいとどのとある皆た、云とちむる詞也
ものへまのりけるに人の家にとみなへしうゑたりけるとみてよめる

兼 覽 王

女郎花うしろめたくもみゆる哉あれたる宿にひとりたてれば

意明らか也うしろめたくのうしろめいたくの意にて後見なきと痛める意はへよりなれる
詞なるへし俗おうしろくらしと云ふ心のはらすうしろめたふくなどもつひあして畢竟
不安心なる意也遠鏡にキツカイナと解たるよく叶へり

○打聞おうしろめたくは我後ろの見たけれど見えぬ物あるもてねはつがなきの本にて
云々といへるは非也うしろめたきとうしろと見たきとせるは俗意也況やうしろめたき
は人の上のみいひて己の上にいふことに非ず我うしろの見たけれど見えぬと云て叶ふ
へけむやうしろやときなど己の上といふ辭とは自他の差ひ有て語勢異也

寛平御時藏人所のことともさる野に花見むとてまのりたりける時のへるとて

みあうたよみけるついでによめる

平さたふん

花にあかて何かへらんをみなしこおほかる野へにぬなまじものを

はるふ飽すしてあうさは歸らん女郎花多き野へなるには願ひてもねぬへきものなると

と皆のへり行といふよりて獨もとのしみすまふ方によみなせり然立はなれ同しつらあ
ぬ心と見せて詞書にもついでよめると書り

○余材の詞書によりて見るに君お仕ふる身なれの心に任せぬ歎きこもれり前の美材の
歌はあやなくわたの名とや立なんと遠慮せると貞文のきはめて好色の人なれの却て女
郎花多る野へにねなましものと云うといへる皆非也君につらふれはの意更み有こ
となし又貞文はきはめて好色ならんふの美材の遠慮あるお如さるやうの事一首の歌お
付て評すへきならんや況やこは實情ならず女郎花の上ならんとやさるの詩の二南大小
雅などの道々しきと羨めるやうの意あるより中々の言のみいひ出めり皆歌の歌た
る所以と知さるの惑ひ也

○遠鏡にハライツハイエ見スニナセニ此ヤウニカヘルヲヤラ女郎花ノ多クアル野テコ
ヨヒハチヤウアツタモノヲといへるの非也花に飽てなに歸らんの花にあきたら
ころあらめ女郎花さへ多る野邊にやとらをして何もあしかり歸らむと云すみや
けき語勢と聞知へしおへるく己の心とくい怪しむやうの口調お非す又ねなましもの

とねやうものよと云へしねやうて有たものと過去小問へきならんやこの歸る道にて悔しむ方ふ叶へんとて強てしか解なせるもの也

是貞のみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

なよ人がきてぬきかけしふちはかまころ秋ことよのつをにふばす

此歌意明らかし遠鏡解盡せりといふへし

ふちはのまよみて人につかはしける

つらもき

やとりせし人のかたみか藤ばかり忘れかたき香に匂ひつゝ

詞書ふち袴とよみて其歌と共に人につかはしけるといふとく書る也又女のもとにつかはしけると書へきと女郎花の部ふ入れたれの人に書るのみ上に櫻の花の盛に久しくとにさりける人の來たりけるとあるもといさりける男のきたりと書へきと櫻の部ふ入れたれ人の來たりとあき上に人の許あまよりけるに蜚の鳴けるとあるも戀部あらの女の許あまと書へき也この四季に入れるの用捨也さてもとより女の來てもやどらん事常なれ詞あしるされざる也もし男とちあらむに其やとれりし故といはて問へけんや又わす

られ難き香に匂ひつゝあど云へけんや思ふへし

○余材ふ五文字の我人の方お行てとも人の我方に來てとも問ゆるとと云るの非也やどれりし人のかたみとあらんわら人の方お行て宿れりしにいひて聞ゆへき又さる事有けん歌にもつれるあやと云るも非也これも男と見たるよりの不審也

○打聞に歌にてやとりせし人の事しらるれん端の右の如くおける此集の例也と云るの非也男と見たるいふにたらすつ歌のやとりせしの一句にまのせて其やとりし故よしといふにと書さるやうの事い更に有へきならず省くへき限りのあくまで省けれど又書へき限りの飽まで書る此集の例也友などのやとりたらん事の書へきの限りあるとや

ふちはのまよよめる

そせい

ぬと忘らぬかこそ匂へれ秋の野にたかぬきかけし藤ばかりも

うののみ薫物の制の其加減など殊更お心と盡せる事にて其巧拙お隨ひてなつかしくもいやしくも心のはとさへ分れんお打薫るより睦さの大やう誰ならんとするきはありなり

し也今の大きれたる句ひの主定まらぬ方ふよみなせりぬしまらぬ香ころといへる味ふへし又ぬきのけしの只ぬきしと云にさはりのはらぬ事にてかけしころへる詞ながら袴の懸へきの縁したしけれ自然打懸かく方ふも聞なされてん實の袖脱のけ裾折のけなどのるけに同じと知へし

○遠鏡ふち袴そのろ文字と濁れるの非也この清てよむへき事論なしさる方語調がなへの也そのれとさす意ならんに清るの本ふて音便ふては濁りもする也と云もそもといふも一つに思へるの疎漏と云へし譬へいたると云にの必すみたれそといふもの忽ち濁れるの如きと推て知へき也

題しらす

平 貞 文

今よりはるゑてたに見し花すゝさほに出る秋はわひーかりけり

れよそ薄のめてたき物なれど秋更てのく穂お出る頃ハ又うらふれ佗しかりけり今より前栽お植てまての見るへきお非そといふ或秋夕など一時うちつけの感哀に堪すしてよめるなるへし

○遠鏡ふス、キハトコニモタクサンニアル物チヤカソレヤトウモセウコトカナイチヤカ今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ植テハ見ヌヤウニセウソと云るの非也のくての薄の最初よりいみ嫌ふへきものと聞ゆめりしの固より厭ふへき物と今まてのなにも植てみたるにや更にことわりたぬ事也こはよきの上あるさのといへり又たにはなりとももの意也と云るも非也たふは直おの語のてふとはとなれるにて一むき強き所お大やう用ふゆり譬へは家お力者と養ふの如し火あれば火に用ひ賊あれば賊に用ひ或は重きと運ひ堅きと碎くやうの手強事には廣くつらひなそお似たり今も植て見しと云言のときは語勢のつよまるふて植てまては見し植て見るてはなしなどいふはかりの意はへ也なりともなどいふ手弱き語意ならそ又植てなりとも見んとは云へし植てなりとも見しと云語世おあるへきあらんや更お筋なき事也よりて植てとあると庭にとのへたれとなは庭になりとも植て見しといふ語いよくあるへきならず

寛平御時ささいの宮の歌合のうた

ありはらのむねやな

秋の野の草のたもとか花すゝさほに出てまぬく袖と見ゆらん

遠鏡に色も出て戀しき人と招く袖のやうに見ゆといひ此歌にて袂と袖とは只詞とのへたるのみおて同じ意也といへる皆従ふへし

素性法師

われのみや哀れおもはん養なくゆふかけのやまじなてしこ

夕日たえくにしし靡きて養さへ鳴出ゆる山陰などの庭わたりみ大和撫子の二本三本咲のこりたらん長月ころの秋のさま我のみならんや誰やは哀れおもはさらん之餘情今たお只ならぬこゝろをすめる顯注お大和なてしこは皆紅梅色お花のすろさへけて變りたり秋の野に一すちくろ咲たるとあり今河原なてしこといふ

○遠鏡お見事ニ咲テアルアノ撫子ト云兒ヲ云々オレハツカリカアノヨイ兒ヤト云テ獨り見ハヤサウツカヤと云るは非也養あく夕陰の大和なてしこと打吟するより其情景身おしむはあり悲しき歌とさるおはれも見しらてあの撫子と云兒となとけしきとよるに解へきものはもとより撫る子に見てよむことも常なれとさるはさる方のみよみなしもこそおんめれ況や大和なてしことつらあると引はなちて人の兒と見るへけんや俗解と

いふへし

題しらす

よみ人しらす

みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋は色々のはなよそ有ける
も草の花のひもどく秋の野に思ひたはれんひとをどりめそ
月草よ衣はすらんあそ露にぬれての後ばうつろひぬとも

打聞につき草の花にて衣はさらむ露にぬれてとく色のうつろひぬともといふ也然れとも此歌は萬葉の七の巻に譬喩歌の中に出て四の句ぬれて後にはとあるのみ變りたりこれ戀の歌おて一度たに逢みは後はうつろふ色はありなりともといふ心也と云り是はもとより例の戀の歌なら月草の上お付て草花の部お入られたりともいふへけれと序文に萬葉集お入ぬふるき歌身つららのとも奉らしめ玉ひてなんとおれは往々萬葉中の歌の交れるは決めて誤入なるへしこのつ此歌さる月草お向ひてよめるおもあらねは外の例にはおたのた叶ふへからず月草は露草也衣お摺付るよりつき草といふと云り又此草は花おせまれる一ひらの葉ありていのに照日といへともうの中にたはる露打かたふけはこほれ出ぬ

りさるのら獨露草の名はとりつらん

○遠鏡に外へ色ノウツリヤスイ物チヤニヨツテ朝ノ露ニヌレタラ色カ外ノ物ヘウツ、
テシマハウモシレヌカと云るは非也物に移る事とのみ思へるは俗意也これらのうつる
は只變る事にて今色のさめると云也ぬれての後は外の物へうつるひぬともと云へん
やはこは花の本なるうつしの色に泥めるなり委くは春部の移はんとや色のはりゆく
所に辨せり

仁和のみとみこにねはしましける時ふるの漉御覽せんとてねはしましける道
に遍昭か母の家おやとり給へりける時に庭と秋の野につくりておはん物語のつ
いてによみて奉りける

僧 正 遍 昭

里はぬれて人はふりに宿なれや庭もまかぬも秋の野らなる

此母の家は奈良わたりにてもやあらんやのて前に遍昭のもとへ奈良へまのりけるとある
も其家お在れし時の又雜部お奈良へまのりける時なども見ゆめり母の家ならんにはしは
くともふらひてのつ留りても在れけんあし歌の心明らけしまかきは間牆の意にて庭わた
りの小屏也つかきやうの大あるに對して云めり門お對して中間の小闕と問門と云おひ
とし是も萬葉に前垣とあるに泥みて前なる垣とのみ思ふへらすさは屋門と屋前と替る
類ひにて一時心とやりて書たるにて正字に非と

古今和歌集正義卷第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合のうた

文屋やすひて

吹からに秋の草木のこゝろをばうへ山風をあらと云らん

委しく異見にしるせり

草も木も色りはれどもわたつみの波のはなにそ秋なかりける

秋の歌合しけるときに讀る

紀よしもち

もみぢせぬとさばの山をふくかせの音にや秋を聞わたるらん

題しらす

よみ人不知

霧たちて鴈そなくなる片岡のあたりの原をもみちとぬらん

神無月我門の早田しくれもいまたふら刈上ぬなくにかねてうづるふ神並の杜

世に紀氏の自筆本といふ秋部の下巻ありうれば此うたわの門の早田もいまた刈上ぬ
またさもみつる神みひの杜とあり是る正しあるへきるとより秋の歌に神無月といふへき

謂れなし打聞も此自筆本によりて云く早田もいまた刈上さるに神なひの杜はもみつるとよめる也下句のまたき聞え難し六帖にのねてうつろふと有のよろしけれと余りに猥りわざして取のへんもいか、なれば本のまゝにてさしおきぬへしと云り從ふへしされと下句のまたき聞え難しと云るはいか、更ふ聞えぬ事なしは上のいまたの詞と同じ心也と見て然いへるなるへしよしや其本同意より出たりともいまたとまたきと其語のはればその意もかはらざることあたはず即上句とわざ田もまたき刈上ぬにとは云れと下句といまたもみつるとも互にいはいれぬにて同意ならざると知へし又六帖には本の句は自筆本お同じくて末の句はのねてうつろふ云々と今本のまゝ也さると今よろしといへれと早田もいまた刈上ぬにのねて移ふ神なひの杜とはつらねられぬ事なりぬては其本物とのぬる方より出たる語にて其上より承るもの、縁とのけはなれてはいふへらぬ言なれば也されはぬねて移ふと本のまゝともちひんならば上の句も本のまゝにして時雨もいまた降あくおどあるの叶へり杜のうつろふはもとより時雨のわさなればなりまたきはた、早き意の語ならんにははやき事には何の上おもいふへし今云またきもみつるは只早くもみちたりと

いふのみなれば上にのつらざるも妨なし早田もいまた刈上ぬにのねて移ふとは受られず早田と刈と杜のうつろふと縁あく相あつからぬはのねてと云へき謂れあければなり聞わくへし

○余材に神無月は時雨と云ん料也神無月のと意得へし當時の事にはあらざといへり遠鏡も是にしたのへる共お非也神無月しくれもいまたふらなくには次に神無月時雨のあめとたてぬきにしてとあるお同しくいま十月に在ていふ言也時雨と云ん料ならんや又の、字と入て聞へき語勢ならんや又後とあらませていへるならむやみな其例もあき事也打聞に秋の部と云ふ神無月しくれもいまたと云はいふおし是と強て神無月のとの、一言と入て見ると、説なせれと彼五月まつ花橘のとよめることくにことわらては心もあすよて貫之筆と云方とよしとと云る尤從ふへしこののみ時雨は大やう紅葉ろめ出す秋の物として萬葉も八九は長月のしくれとよみ此集にも雜部に秋の時雨と身ろふりおける長歌お秋はしくれに袖とのしとよみて春の霞夏の蟬冬の霜に並へて擧られたりとののみもたましく神無月とよめるなきおあらねと大やう秋と主とせる也其後神無月

ふりみふらすみ定めなき時雨と冬のはしめ也けると云るいみしき歌一たひ後撰ふ出て
より世中時雨は冬の物とかもひあり今の歌も神無月の時雨とやうに思ひて説なせる
は古に暗き也

千早振神なひ山のもみち葉におもひはかけしうつろふ物を

貞観御時綾綺殿のまへに梅の木ありけりにしのかたにさせりける枝のもみちは
しめたりけるとうへにさふらふこのことものよみけるついでによめる

藤原かちおむ

おなしえとわきて木葉のうつろふはにしこそ秋のはとめなりけれ

いし山ふまうてける時おとは山の紅葉と見てよめる

秋風のふきにし日より音羽山岑のこするもいろつぎにけり

吹ろめし日より其風の音の絶すせし音羽山と来て見れはや峯の梢もみち初けりとい
へりもとより都より打わたしたる山なれば風の音は聞なれし方いへり後撰にも松虫の
はつ聲さそふ秋風は音羽山より吹ろめおけりなり音は絶せし意といたく省きて

云かけたれと日よりおとは山と受たれば外の筋おはまかはさる也次にも我とは君なふと
もおもへらすの意と我と君難波の浦おありしのはといひ誰か見ろさして木綿とは付し鳥
ろの意とたのみろさき木綿付鳥と云る類ひふとは聞とりおたきまで省きつむるの古のみ
やひなると後世解あやまてるもの多し或説にこの音羽山は音はやますしてと云まてゝ
れるならんと云るは行過ぬへしされと詞おつれて自然ろのこゝろはへは句ふゆり

○遠鏡に秋ノヲチツメヲ日カテシテ風ノ音モカハツテキタカ今日見レハ此山ノ木共モ
ツロく色カツイテキタツイといへるは非也こは秋風の吹にし日より其秋風の音はと
は聞へし其秋風のおとの變てとは聞もへらともよりおはる意歌のうへに見えぬ事
也また秋風のふきにし日より風の音もおはりてといへは上の秋風と下の音も變ては其
語脈されて風のはなる物のおはるに聞ゆる也さるにより今秋風の吹にしと秋の立ッ
メタといひらへて風ふくといふ事を取捨たるは意にまのせたる強言也又梢もといへる
にて風の音も變りたる意と思はせたるもの也と云るも非也此も文字は次に山の木葉も
色まざりもくとあるなと同しとて常に手のろくつらひなすてにとはにてた、大よそ

の紅葉にあたりて云也何る本の句の意と思はせたる心ならんさりとて梢の色ものはりける哉などあらはころは強てさもどめ色付にけりとあるとやあつ秋のせと音羽山の外も見たるもいたく語勢と失へるもの也

これさたのみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋のこの葉をちよにそむらん

壬生忠岑

秋のよの露をばつゆじおきあからかりの涙や野邊をそむらん

余材に朝とに見るに露は只しろくであるに紅葉のもみちもくは啼わたる鷹の涙や落て別に野とはるむらんと也といへり

題しらす

よみ人しらす

秋のつゆ色々こぎくにわけんこそ山の木葉のちくさなるらめ

二の句のいろ／＼には不成の語也色とふといひてたれるありたとへは人毎に山毎なといはんと人々ことに山々とははいふへのちぬらしこは菅菖ふ色とく／＼にとあるそ

正しき已上三首はみな露の一種とて八千種に染わくるとあやしみにふらしむ意の歌也色とくはそのものものに随ひて色とはとてすと云秋の露はた、白と見ゆれとさふはあらてこれは赤也ゆれは黄也これは濃しゆれは浅しなど木々に随ひて置わたすと見ゆと云也されは色ろれ／＼におけはころと意得へし委しくは冬の梅の誰のこく／＼わきて折ましの所にいへり

○遠鏡ふ色とチカウテオクサウナと云るは非也こはいろ／＼ことと色々の異なる意おとけれとさるはいろ／＼におけはころと云てたれり重ねて異おといふへさおあらすもどより語およりて幾重にも云ん事常なれと句調おまゐする事也色々異江と云詞は世おもいはとた、色々と云おて異おの心あれば、俗にも色々ちのうておくとはいはと色々おおくとこそ云めれ

もる山のほとりにてよめる

つらゆき

しらつゆん時雨もいたくもる山は下葉のころす色付よけり

秋のうたとてよめる

ありはらのもとのた

雨ふれと露もたらしどかどりの山ばいかか紅葉そめけむ

歌の意明らけし

○余材に笠取山は取さる意也といひ打聞に取てさすと云あり然らば雨露もいらしといひ遠鏡に傘ヲモット云名ナレハといへる其非也此は皆取の意と得さるの故己のむきくにいひ試るもの世中にも遠鏡のものを見たるはいたく泥みて俗意也笠ともつと云詞あるへきあらんやは此は只笠と被く意にてさすともさるともいひにもさるのたふ聞ふそへし委くは上の早苗とりしもの所ふいへり又遠鏡笠取山のとりと濁れるはいふみこは連聲お唱ふる語はみな濁るへきものと思ひとれるの謬也又露もいらしと打聞に雨露も洩しと云るはいひの遠鏡に露ホトモモリハスマイといへるは叶へりされとも此は露もしらし露もうらみしなど打まのせていふには差ひて降雨と受たれば其雨の露ならん心はへも下ふ句へりとは云へし

神のやしるのあたりとまのりけるときふいひのうらの紅葉と見てよめる

つらゆき

ちらねとよかねてそをしき紅葉といまばかさりの色とみつれば

神のいさかかゝるとならは常磐お久しあるへきと推なへなる世の秋には遁れ得と色のはれりと云あへとは其もと立合のたき意也次お秋風あへを散ぬるもみら葉のとあるも今と同じ

是貞のみこの家の歌合によめる

た、みね

雨ふればかごとり山のもみち葉はゆきかふ人のそとごとしそてる

寛平御時ささいの宮の歌合のうた

よみ人不知

ちらねともかねてそをしき紅葉といまばかさりの色とみつれば

秋きたりて移るひゆく紅葉は梢のわれ衰ふる限りの色と見つればいまた染盡さとしてちる時ならねとのねてもとしきこちすと云り上に物とに秋る悲しさもみちつゝ移るひ行とのきりと思へはと云るに同じ意はへ也

○余材お今は限りの色とは千入と盡す也と云り打聞遠鏡も是に隨へる共に非也此限りの色は今染る色の限りおはあらず推なへたる木葉の色の限り也今既にちらんのきりと

見ゆるとかねてそとしきなどあらませて云へきならむとさるものとりめらんやはつちら
ねともはいまた散へきならねどもと云也實に今ちるへき限りならんに云へき語勢なら
ぬと聞知へし又染盡したる色の限りと惜むとならば未ある落葉の部の佐保山の柞の紅
葉ちりぬへみ奥山の岩墻もみち散ぬへしとある歌の次ふとに入ぬへきもの也
やまとの國おまのりける時は山に霧のたてりけると見てよめる

紀のともものり

たかための錦なればか秋霧の佐保の山へをたちかくぞらん

是貞のみこの家の歌合のうた

よみ人不知

秋きりはけさひなたちそ佐保山のはしそのもみちよそにてもみん

秋の歌とてよめる

坂上これのり

さか山のとくその色はうすけれと秋はふかくもなりけるかな

人のせんさいお菊にむすびつけてうゑけるうた

在原なりひらの朝臣

うゑし植は秋なき時やとかさらん花こそちらめぬと「かれめや

初句真字の勢語に選植者とのき朝臣の家集にもうつしうゑはとありて事もあきふや植し
植はと云る事此外になく他の辭お例するふたとへは更る事とへしへのへは添る事とへ
しそへはともいはす或は取る事捨る事ととりしとれはすてしすてはなと云る類ひすへ
聞しらぬにや戀とし戀はとはわれと戀し戀はといひはす吹とし吹はとはわれと吹し吹は
とは云とさるはうゑしうゑはも世にあらぬ詞也只紀氏の筆と云古本にうゑしうゑはとあ
れとこはもとより紀氏の自筆あらす後人の筆なることしるければ古き一本お具ふへきの
み尤正據とすへのらと

寛平御時さくの花とよませ給ふける

としゆきの朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつはしとそあやまたれける

此歌はまた殿上ゆるされさる時おめしおけられてつらうつるとなむ

歌の意明らかし打聞ふこの歌はまた殿上ゆるされさる云々と見えたり例の後人のしわざ
也と云るそ然るへきとへて左注は大やうことこの意わか難きことわりたるものおて止と
得さるのしわざ也今は端書おて事たらひたるとやこはあやまたれけるかとあると今一き

見ゆるとかねてそとしきなどあらませて云へきならそさるもとりあらんやはつちら
ねともはいまた散へきならねともと云也實に今ちるへき限りならんに云へき語勢なら
ぬと聞知へし又染盡したる色の限りと惜むとならば未ある落葉の部の佐保山の柞の紅
葉ちりぬへみ奥山の岩墻もみち散ぬへしとある歌の次あとに入ぬへきもの也
やまとの國ふまよりける時さは山に霧のたてりけると見てよめる

紀のともものり

たかための錦なればか秋霧の佐保の山へをたちかくぞらん

是貞のみこの家の歌合のうた

よみ人不知

秋きりはけさひなたちそ佐保山のはしそのもみちよそにてもみん

秋の歌とてよめる

坂上これのり

さか山のとくその色はうすけれと秋はふかくもなりけるかな

人のせんさいお菊にむすひつけてうゑけるうた

在原なりひらの朝臣

うゑし植は秋なき時やどかさらん花こそあらぬぞしかれぬや

初句真字の勢語に選植者とのき朝臣の家集にもうつしうゑはとありて事もみさふや植し
植はと云る事此外になく他の辭お例するふたとへは更る事とへしるへは添る事とろへ
しそへはともいはす或は取る事捨る事とりしとればすてしすてはなと云る類ひすへて
聞しらぬにや戀とし戀はとばわれと戀し戀はといひはす吹とし吹はとばわれと吹し吹は
とは云そさるはうゑしうゑはも世にあらぬ詞也只紀氏の筆と云古本にうゑしうゑはとあ
れとこはもとより紀氏の自筆みらす後人の筆なることしるければ古き一本お具ふへきの
み尤正據とすへあらそ

寛平御時さくの花よませ給ふける

としゆきの朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつはしとそあやまたれける

此歌はまた殿上ゆるされさる時おめしおけられてつらうまつるとなむ

歌の意明らかし打聞おこの歌はまた殿上ゆるされさる云々と見えたり例の後人のしわざ
也と云るそ然るへきとへて左注は大やうことこの意わき難きことわりたるものみて止と
得さるのしわざ也今は端書ひて事たらひたるとやこはわやまたれけるみとあると今一き

やはえあらせんとて後のさのしらなるへし六帖に兼輔卿けふ引て雲井ふうつす菊の花天
津星とやあそよりはみむなどの類ひ也

これさたのみこの家の歌合のうた

きのともものり

露なからをりてかさよ菊の花にいせぬ秋のひさしあふく

意明らけし今よまんにい大やう菊とあさにて足ぬへきと當初は齡の上ふは必露とまど
してよめりさるは彭祖の長壽或は鄭縣の故事と其本露によれば也

寛平御時ささいの宮の歌合のうた

大江千里

うきよきばなままとほに有菊うつろふ秋にあはんとや見し

おなし御時にせられける菊合にすはまどつくりて菊の花うゑたりけるにくはへ
たりける歌ふきわけの濱のあたに菊うゑたりけるとよめる

すのはらの朝臣

秋風の吹上れたてるとまらきくは花かあらぬかふみのよするか

歌のこゝろ明らけし

○余材にすはまど作りてとは洲濱の形とつくりて云々打聞に洲濱の形と臺ふ作れる也
と云るは共に非也斯いへはこたひ洲はまの形と思しよられたらんやうにそ聞ゆめると
はまはろの形あしたる臺の名ふて洲はま臺なといはんを略してそはまといふふればた
ゝ臺とつくりてといはんふ同し今鳥臺といふふ似たりもとは松竹鶴龜やうのものと飾
り乗するの故ふ洲の形似つのはしきふよりさる方に定まり來りけん天徳の歌合など
に數さしの洲濱さへありて打まのせたる名也是もたゝ數とりの盤と云んに同しされ
すはまどつくりてと有て形と作りてとはなしやめて次ふ吹上のはまの形にどあるの此
たひ作り出られたる形ふて仙宮ふ人のいたれるのたなど同じく新たに思ひよれるれも
むき也

仙宮ふ菊とわけて人のいたれるのたとよめる

素性法師

ぬれてはず山路の菊の露のまにいつかちとせを我は經にけむ

此歌菊十三首の内にて殊ふそくれたりといふへし俊成卿もこの歌はぬれてはずとあける
五文字の誠ふめてたくはへるふ又山路の菊の露のまにと云るも有難く侍るふよりて末の

何も何となく引れて皆いみしく聞えはへる也といはれたりぬれてはと云すて、袖とも衣ともいはすいと大らなる實おいはゆる幽玄の跡にしてめてたしともめてたき也しおいみしきより此後山路の菊とたにいへは仙家の事となれるにや此露のまも只しはしのはとといへるのみならず其露ちよのものなれば也此末句家集おはいるての我は千世とへにけんと有今のとくは決して此集撰勤の時例の筆削せられたるおて竟に玄々の門にいよく衆妙どろなへたりといふへき也又六帖にいらて千年と我はへふけひとあるは此集と家集と採ましへてしるせるもの也

○遠鏡に在所へカヘツテ見タレハモハヤ千年モスキヤウスチヤカと云るは非也菊と分て至れるおたよめるとあると歸て見たればと解て叶ふへけんやこは彼王質の家お歸て七世の孫お値りと云故事に大やうよるらんなれば其仙宮ならにては千年へたらんもしらるへきならずと思へるより在所へ歸てなと云るもの也こはうこまでのことわりとせむへきお非そ仙宮お至ればさるものにしていつの千年となどよめる也強ていは彼王質も斧の柯の柄盡けんおは世々經たらんは其山路なら知へき也ともいひてん

されとさはありしらふるわさには非そのし打聞にいつの程おの我は千年へにけんと其仙宮にいたれる人の驚くさまとよめる也と云るに従ふへし

菊の花のもとにて人のひとまてるおたよめる とも のり

花見つゝ人まつときて白妙の袖かとのみそあやまたれざる

歌の意明らかし諸注王弘の使の白衣の故事と下にねもへりと云さも有へし

大澤の池のあたに菊うゑたるとよめる

ひとゆと、思ひしてふをねはさはの池のうこにも誰かうゑけん
世中のはおなき事と思ひけるとり菊のはなと見てよめる

つらもき

秋のきく匂ふかきりはかさこゝん花よりささとくらぬとか身を

白菊のはなとよめる

凡河内躬恒

心あてにをらしてや折むてつ霜のおきまとはせる志ら菊の花

初霜のおきまとはしていつれ花ともわられそもし折んとならは心あてふや折んと云とら

は心めてみや折んといふとさるは句となさねは心めてに折はやとらんと打返したるは打
いて、田兒の浦も見ればと田兒の浦も打出て見ればと下上も交へて云ると同じ是も異見
に辨せり

是貞のみこの家の歌合のうた

よみ人しらす

色かはる秋のさくとは一とせにふたゝひ句ふはふとこそみれ

仁和寺に菊の花めしける時ふ歌うへて奉れと仰られければ讀てたてまつりける

平さたふん

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば

あへての千草はあゝる秋の末ふはみな霜かれて衰へゆく菊はうつろふふ随ひて色殊ふ
まさり行と見れば秋とは秋とたきて又時ころ有けれと冬に向ひてもいよく盛んあると
云る也下の意上皇御落飾の後御室お籠らせ給ひても世中御うしるみあちにてまつりこち
玉へる大御威稜のさのむなるとはさ參らせたるなるへし

人の家なりける菊の花うつろふたりけると讀る

つらゆき

咲そめーやとしかはれとさくの花色さゝよこそうつろひにけれ

題しらす

よみ人不知

さは山のはゝそのもみち散ぬへみよるさゝ見よとてらすつきかけ

へみの言はへらと云ふ似て其様子と見はありていふろののみひとつの語也俗にいへは柞
の紅葉いまもちりさうなされのよるも見てかけよ明日はたのまれそといふはありの意也
宮つゝへ久しうつゝあまつらて山里にこもり侍りけるおよめる

藤原 關 雄

おく山のいはかきもみち散ぬへしてゐる日のひかりみるときふくて

此山里は東山今の永觀堂の地也さて岩のきは岩陰也岩陰紅葉岩陰沼岩陰清水など連ぬる
時はのけとは唱へよらねはのきといはるゝのみ垣の意には非しあさろひあさろふなど
通はせいひ萬葉東歌にも島陰と島のきとよめるなど自然の事也巖牆の文字などに泥むへ
のらす今その舊跡と見るお實おこゝしき岩陰也けり才學ありなら不遇にして恩光にあ
たらそさて朽果んと悔たる意なるへし

題しらす

讀人不知

龍田川もみちみたれてなかるめりわたる錦なかやたえなん

此歌はある人ならのみろとの御歌也となむ申そ

こゝろ明らけし

○打聞に左注ふ此歌は或人ならの帝の御歌也と申すといふは例のとらそと云るは非也
序中に立田川に流るゝ紅葉とは帝のおはんめに錦と見玉ひとあるは此御歌とさせるお
論なきとや此左注といふのしむ意より却て此序文の一章と摺入の偽作也とせる説ある
いふにたらそ

たつた河紅葉かかると神なひのみむろのやまよ時雨ふるらし

又はあその川もみち葉あふる

立田川は飛鳥川に同じく雨ふるとに淵瀬うつりさためす常は大やう水無河にしてたえた
えあらんふは石並おき或は歩わたりせし也歌の意水上なる三室山ふしくれ降らし紅葉の
流れ來たるはといふ一時の雨ふ淵底より河上とあけて散たまれる紅葉の推くたされて流

れ出たる也山川のさま皆しあり猶冬部立田川にしさかりのくの所ふとけると引合とへし
昔よりこれと時雨の爲に今しもられる紅葉と見て結句嵐ふくらんと有へきあともどし
みたるはいふにたらす又左注にまたはあその川もみち葉あるとあり此方其地理お叶ひ
て立田川の水上下三室山はあらはと余材お委しく弁せりこの萬葉の比と今と其所のはれ
る事異見の嵐ふく三室の山のもみちはこの歌の所に委しく論定せり

戀しくて見てふしのばんもみち葉を吹なちらしそ山おるの風

三の句もみちの落葉と吹なちらしうと云也さはつらねのたくのつ落葉の外お聞へきやう
なければ打まのせて紅葉と云り

秋風にあへどちりぬるもみち葉のゆくはためぬ我ろかなしき

あきとぎぬ紅葉は宿にふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

まつさひしき秋は來ぬといひそゑて其上紅葉はふりしき問人はあしと立のさなれる侘し
さといへり

○打聞ふ今の本おとふ人はなしとあり古本お問人もなしと有いつれにても聞ゆといひ

て古本に従へるは非也人もとしては前後に打合さるのみならず調もとののはさるもの也

○遠鏡に紅葉ハ庭ニチツテシマウといへるは非也のくはめて見し紅葉も今は散果たりといふ也此紅葉は色とめつるおはあらて上に紅葉ふみ分次にもみち葉のふり隠してしゑと有にひとしくた、落葉枯葉なといはんおさのみ差はすさるはふり埋むと佗たるおて散れると惜むには非る也見分へし

ふみ分てさらばやとばんもみち葉のふりかくしてと道とみさから

この宿は落葉ふり隠して道も見えそ然は見あさらさらお踏分て問さらんや強てもものせんとももみち葉に意とあらせてふりのくしたりといふそれやのてあるしのなしに聞とらるめり更にの詞はもはらふみ分てにのりて更にふみ分てやとはんの意也六帖には結句宿と見ならと有のくてはさらおや問んと云までおのへりてよろしきおや道と見なからは初句のふみ分てにのへりともまりてあぬこちすめり宿と見なら問んと應し道と見なら分てと應すると聞しるへし

○打聞にこ、おすむ人は跡とけちて人めと厭ひと云るは非也こはのねても物せる宿とさる秋の末なとお訪へる也こ、にすむ人はなと始て見出たらむ宿お更おとはいふへさならずふみ分てや問んと云て足りぬへし

○遠鏡にサウト見ナカラフミ分テ見舞ハウヤウハナイと舊説によりて解るは非也宿と見ならふみ分て入んといふおこそ趣きはあぬれさど見ならふみ分て見舞へきならずと云て何の味ひのあらんさてはふみ分ての語も力ぬけていたつらあるに似たり

秋の月山へさやかにてらせるはおつるもみちのかごとと見ととか

意明らかし打聞の上に飛鷹の影さへ見るといふとく月夜に見おましき物とあけていとくさやのお照せるささと云也といへり

吹風の色のおちくさに見えつるハ秋のこの葉のちれハかりけり

二句紀氏自筆本といふにちくさの色にと有と正しあるへき色のちくさに見ゆるといふはもと色ある物の上にいふ語おて即春部のはる霞色のちくさお見えぬるはと云は霞の色のちくさお見ゆる也今は風の千種の色に見ゆる也風は霞など、差ひて月お見おへき物あら

ぬに色ふみゆるとどめたるにて風に千種の色の見ゆる也風の色の千種ふみゆるとは其
わいため有とさ、知へし色の千種に見ゆると千種の色のみゆると詞も心も均しきふ似た
るより實はいたき差ひのいてくるとおはえさるもの也恐らくは春霞いろのちくさに見え
ぬるはといふに似たるより唱へまされしならん

せきと

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおれいかつちる

歌の意明らかし後世ならば山の錦のおれは亂るゝとの何との統ふる方の縁とどめてい
にもいふへきとのつちると紅葉の本にのへりて云棄たるのめてたき也翫味すへし萬葉お
たてもみく緯もさためそとどめらのおれる紅葉お霜な置るねなどあるも錦といはて紅葉
と云るの却てめつらしきあと今と同じきものにて皆及びなき古人のみやひ也後人此等の
類ひと中々あるぬわさに思ひて萬葉の歌は半どゝのはさるもの多しあといへるもの也近
くは公任卿のちるもみち葉とさぬ人ろなきなど紅葉の錦といはんときらはれたるいおし
への心はへにして尤巳達のわさ也

うりんるんの木ののけにたゝとみてよめる

僧正 遍昭

わひ人のとぎて立よるこの本の頼むかけあくもみちりけり

雲林院は即遍昭住持の寺也さて詞書と歌とをあはせ考ふるふこは春部に由性法師のいさ櫻
我も散なん一盛ありなは人お愛目見えなんどよめりし意はへふて恐らくは法務の上など
に付て不平のとなど有つらんと紅葉によせていはれたるおやあらんとおはゆされは此わ
きて立よる木本は、直お其住持せる雲林院と指て云れたる意ならむわきて立よるは指所
ある語にて或は一樹或は一村はのりの木の下お立よれるさまおてさるはさしも廣らな
らん雲の林お立もとほりてよまれたる句調にあらす撰者も其寓意のある所と量りて雲林
院に在てよめると云はのりの心と姑く歌と合せて雲林院の木の蔭おてと一わたりに書
かろして當院の紅葉の實景に叶はさらむとわさと願みられさるるへし春部に雲林院と
しはくいてたるも皆其端詞緊要にしていたつらならぬと思ふへしたゝ木葉のちると見
てよめるあといへる一時の趣ならんや吟味すへきもの也諸注たのむ木蔭お雨もりてと云
諺の意也と云る尤然るへしもみち散けりはもみちて散けりの意にて上おもみちるめけ

んもみちつゝ移るひゆくといひ次につひにもみちぬ松も見えけれと云る小同しくも
みたすもみつると活く詞也されは其木陰さへたのみなくうつるひはてゝの意おもみち
て散也もみち葉の散と云ふは非を辨用の差ひと辨すへし

○打聞にわひたる人の立よる木の下は紅葉もたのむ陰なく散と也と云るは非也こはた
のむ陰なくもみちてちる也紅葉も頼む陰なくちると云にはあらそさるは歌の語路にも
たのひのつ理も通らざるもの也

○遠鏡ふ紅葉カチツテシマウテ頼ムヘキカケモナクナツテシマウワイと云るは非也
紅葉の散はてゝたのむけなく成しにあらそたのむ陰なくもみちて散し也皆めてし紅
葉の散しと惜む事とのみ思へるより歌の調ものへり見そたのむ陰なく散紅葉哉などい
はん意にとけるは疎妄也語の顛倒は始くかく紅葉のちる事と只一句中にもみち散けり
と急迫にしらふへきものあらんや櫻ちりけりなどいひ難きに同じもみちてちりけりの
意に聞なすときは自然句調もとさまるもの也

二條の後の春宮のみやと所と申ける時お御屏風お龍田川に紅葉なられたるのた

とらけりけると題ふてよめる

そ せ い

もみちはの流れてとまるみなとにはくれお深き浪や立らん

なりひらの朝臣

ちてやふる神代もさかす立田川からくれなる水くゝるどと

異見に委しく辨しおけり

是真のみこの家の歌合のうた

としもきの朝臣

我きつるかたもーられぞくらふ山木々のこの葉のちりとまかふに

結句のちりとまのふは散とちりてまのふといふとはふけるなるへし來と來てはあとのと
の意也しきりおちると云

たゝみね

神ふひのみまろの山を秋行はにしきたちきることゝちこそぞれ

北山お紅葉とらんとしてまのりける時よめる

貫 之

見る人もなくて散ぬるおく山のもみちはよるのにしきさりけり

紅葉とらんとては古本としむとてと有と正しき大井行幸の序ふくれぬへき秋としみ玉
はんとてと書れたる同じ意はへのとしむふて紅葉の散ぬへきは色の限りにてそれ借みに
といふの即盛見にといはん等しやめて歌に見る人もなくてちりぬると落葉とよめり同
しく紀氏の歌お惜みふと來つるのひなく櫻花云々清正集に紅葉としみに山里へ出來て風
吹はぬさとちりのふ紅葉ころ云々など引合せて見るへし次お君とはましてとしとこそ思
へなどある同じ意ふてとしといふうちにかのつゝら愛賞する意あり

○打聞に今の本には紅葉としむとありとわりなきふよりてとらす貫之本とらむとてと
云りと云り遠鏡も是お從へる共に非也花紅葉見にゆく事と折にゆゑんとは雅俗ともい
はぬ言也もとよりとらん爲のみ行へきあらねは也さるは却てとわりなき語といふへし

秋のうた

おねみの王

立田姫たむくる神のあはれこそ秋のこの葉のぬさともちるらぬ

とのといふ所に住侍ける時紅葉とみて讀る

つらゆき

秋の山もみちをぬさともたむくれはさむ我こそ旅こちす

神あひの山と^越過て龍田川とわたりける時にもみちのなれけるとよめる

きよはらのふのやふ

かみなひの山を過行秋なれはたつた川にそぬさはたむくる

詞お神なひの山とすきては紀氏の本といふお神なひ山と越過てと有と正しき歌に神あひ
の山とすきゆくとおあるおみなひの山と過てと同しとと書へきならす古本の神なひ山と
越さきては語調歌と差ひて端書の體也神なひやまと歌ころあらめ詞に神あひの山と書へ
きならす前後の立田川など詞に立田の川とは書す佐保山に霧の立りけると書て歌にはさ
はの山へとたちのくすらんなどある見わたして知へし歌の意これより神なひ山と越て歸
りゆく秋なればまつ立田川にみそき後へてぬさとは手向るあらん紅葉の錦の流るゝは必
しありといふ也余材に今古三室立田の地理相違せる事と辨せり

○余材お歌ふよりて此ことおきと見るに秋は西よりくれは西に歸ることわりあれば三
室山は立田川の東にあたりて有のと云るは非也秋は西へのへるなれば今向ひて越んと
する三室山は西に有へき事論なしさるに立田川の東にあたりて有のと云るはいふおこ

は歌の山とさき行と過て來たる事とかもひ認てる也既ふ打越て來つらんと過ゆく秋といふへけんやこれよりさき行へきと云る事更にさるふへのらぬとや又いらんとさる山口とて祭るへけれ越果て後幣とるへきおはあらし思ふへし

○打聞に立田川の上に神並山と在か如く思ひあやまりてよめる歌とさる事とららにおはえてよめれば又それに従ひて撰者は端の詞と作りて書るものなるへしと云るは非なり紀氏深養父の歌仙たちさる事有へきならんやこは己の意とて古人と誣る也とて立田河の事は異見ふ論し置り

○遠鏡にコチモ今神ナヒ山ヲ過テキテ立田川ヲ渡ルカと云るは非也深養父は山と越來て川とわたられたるなれと秋はこれより越んとするにて深養父とはゆき違ふ意也コチモ今神ナヒ山ヲスキテ來テと秋と共に越來たれりと見たるはたのへる事既にいへり又云神なひ山は山城國乙訓郡立田川は其西にて津國島上郡也共に山崎のあたり也此事別ふ考有と云るは非なり立田川は太古より大和なる事論なし山城也といへるはいたき認なる事是も異見ふ辨せり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原かさのせ

白浪に秋の木葉のうかへるとあまのなかせるふねかどる見る

こは山川の岩瀬などに落散たる木葉のとさまのくさまお浮漂へると海上に漕出し船の難風などに吹流されてよるへなくさそらふさまに見たてゝ興したる也

○余材に大井川の序に秋の水あうのひてあるゝ木葉とあやまたれ云々土佐日記にみな人々の船いつこれと見れば春の海お秋の木葉しも散やうにそ有けるこれ等と同じく見るへしと云り打聞も全く是ふ從へる共に非也大井の序土佐日記のは河海お浮へる舟と木葉とみたる也今は細流にたゆたふ木葉と漁舟の漂流に准らへたる也木葉と舟お見たると舟と木葉お見たるとうらうへの違ひといかに見惑ひて同じ事也といへるあやたとへは花と雲と見雲と花と見んなどは今と同じ事お似たれ共こは花も雲も同じ高根の物おしてうらうへの違ひは有といへとも心はへは一つに落て趣にはいためなき也舟と木葉とみるは遠望の常おして實おさるこゝちすめりまのあたり木葉と舟と見るはわざとしの見おして興せる也更に混をへきおあらし

○遠鏡に浪ノウへ、木葉ノチツテウイテアルノハ獵師ノ流シヤ船テハナイカト見ユル
といへるは非也舟と流せるは取流してさそらへ漂ふこと也俗おも是と流れ舟といふ只
乗ゆく事と流すと云へけんや末なる伊勢の御の長歌に沖津浪あれのみまざる宮の中
年経て住しいせのあまも舟あらしたるこゝちしてよらん方あく悲しきにとあるも即漂
流といへりされは今もその荒ひたるさまを形容して初句と白浪にとおけり只海上の漁
舟と見んには水の上にとも山川おもいにもいふへしとくしく白浪と云へきにあ
らし心と付て見るへし

たつた川のはとりおてよめる

坂上 是 則

もみち葉のふかれざりせい立田川水の秋をいたれかしらまじ
こゝろ明らけし

○遠鏡ふ木葉ノ青イノハ色ノカハルテ秋カシルカ水ノ青イノハ色ノカハラヌ物ナレ
ハ云々といへるは非也しゝ青き色と打合せたるにはあらず打聞ふ水には秋の色のあ
ぬと紅葉の流るゝとみて水の秋とはしるといへるのよくなるひてともなき也こはたつ

田川と山城の山崎川也と思ひてさる大河の青みきりたる水面あうける紅葉とせるより
然いへるあらめと河上にちりたる紅葉あとのめにとまるへきものあらねはもとよりさ
るけしき有へきならず

しゝの山こえおてよめる

はるみちのつらき

山河にかせのかけたるゝからゝいふふかれもあへぬもみちなりなり

流れもあへぬ紅葉也けりはなれおねてもとゝこはれる落葉也といへる也さるは人なら
て風のしわざあれば風ののけたると打まのせて云るの趣のおのしき也

○余材にあられもあへぬはあり散るゝる紅葉と風ののけたる柵とは珍らしくもよまれ
て侍る哉と云ひ打聞ふ山河に紅葉とひまなく吹のけつゝさきに散たるのまた流れはて
ぬうちに幾重も吹のくれは水の上お紅葉のとゝまりてあると風ののけたる柵と云て下
に其柵は流れ果ぬ紅葉也とことわれる也といひ遠鏡ふアレハ風カフクテアマリシケウ
紅葉カチツテセキカケノ流レテクルニヨツテ云々と云る其お非也こはこゝの水隈の
しこの岩根おせられて流れえぬと云り行水のさる所々にたゆたふと社柵とも見あすへ

けれ水面お散満たるのいりて柵に似るへけんこは皆あへぬの詞を取あへすなど急率ふ
つらひなすと差別なく意得て今しもしきりに散とどおもひ差へるもの也又さらんふは
あくる柵といふへし今はのけたると有とやのけたるはのけたけるといはんにひとし猶
委しく異見に辨せり

池のほとりにて紅葉の散とよめる

み つ ね

風ふけいねつるふみち葉水清みちらぬけさへ底よ見えつゝ

吹風につれて水面に落ちる紅葉とみれば其水清く底をみていまた枝なる影さへあさやのに
見え行はといへり其けしさいまも臨めるこゝちすめり昔先人古今口授の序てに此つゝの
辭此歌におきて殊に力ありといはれたり軽く見すくそへらす

○打聞にちれるる水にあるのみならずまた散ぬ影さへみ水底に見えて池は皆紅葉とあ
るよし也といへるは非也こは其陰なる池の汀に立る折しもふく風に落くる紅葉とみれ
ば思はぬ影さへ水底に見えゆくと云也落るもみち葉とあるとあねてちれるる水にあり
といふへさお非す今ちりのゝるのみならずあど解へし詞にも紅葉のちるとよめるとあ

るとや

亭子院の御屏風の書み川わたらんととる人の紅葉の散木の本お馬とひのへてた
てるとよませたまひければつらまつりける

たちどまり見てを渡らんもみち葉ハ雨とふるど水はまさらし

木の本に馬と扣へて立るは乗すゑて立る也歌のこゝる打入ん駒と暫くひかへとめて散
しきるもみち葉の面白さと見てとわたらん雨と降とも水かさ増るへきにあらねはど是
と馬の口と取扣へ立る人のさまお思へるは立とまりの句に泥みたる也こは乗れる手綱と
ひのへてたちどまれる也

これさたのみこの家の歌合のうた

た み ね

山田もる秋のかりほよちく露いいなねほせ鳥のなみちありけり

打聞お今の本には涙なりけりとわれと新撰にあるへしと有とよしとをなりけりと定めて
云る歌に非すと云り然るへし山田のありはにちく露は其打らん引板なとお追やられて終
日空に啼さわくらん稻魚鳥の涙あるへしといへり此鳥は雀などの類ひならそ一時わたり